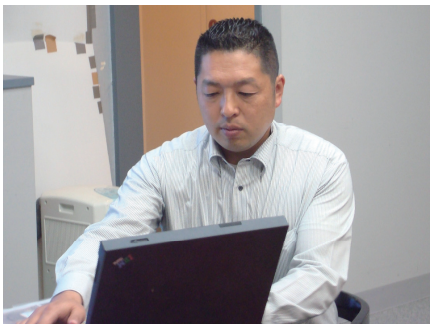
平成 26 年度
「地域活性化社会システム論」講演録

主　催：足利工業大学
　　NPO 法人　足利まちづくりセンター　VAN-NOOGA
協　力：内閣官房地域活性化推進室
後　援：栃木県
　　足利市
　　栃木県まちなか元気会議



平成 26 年度
「地域活性化社会システム論」講演録

主　催：足利工業大学
　　NPO 法人　足利まちづくりセンター　VAN-NOOGA
協　力：内閣官房地域活性化推進室
後　援：栃木県
　　足利市
　　栃木県まちなか元気会議

A.I.T.®
足利工業大学
足利工業大学

足利工業大学・足利街づくりセンターVAN-NOOGA 共催
公開講座「地域活性化社会システム論第 6 年」講演録

目次

開講の言葉
足利工業大学
学長　牛山　泉

開講によせて
NPO 足利まちづくりセンターVAN-NOOGA
会長　中川三朗

第 1 回　「地域と共に発展するために
－大間々町商工会施年分の活動を通して－」・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
大々町商工会前
青年部長　吉澤正樹

第 2 回　「みんなのとしょかん」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
一般社団法人みんなのとしょかん
代表理事　川端秀明

第 3 回　「うさぎや製『キモノのココロ』
－ハジマル・ハジケル・ハジモカクー」・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
「うさぎや」
店主　大竹麻実恵

編集後記

開講のことば

足利工業大学
学長　牛山　泉

足利工業大学と NPO 法人足利まちづくりセンター「VAN- NOOGA」の共催による公開講座「地域活性化社会システム論」の平成 26 年度の講演録が、ここにまとまりました。

平成 21 年度の開講以来、延べ 28 回を数える本公開講座も、当初は、本学の教員を含む研究者や行政の方々に講師をお願いしておりましたが、次第に、地元足利市や両毛地域でまちづくりに活躍されている方々から、地域での取組やご苦労を伺う機会を増やし、今年度は、足利市はもちろん、お隣の群馬県みどり市からも地域の活性化に取り組んでおられる方々を講師にお招きして、地域のまちづくりの貴重なお話をいただくことができました。

６年目に入った今年の第 1 回目は、みどり市の旧大間々町商工会を中心にご活躍されている吉澤前青年部長から、青森県の大間町との愉快な交流の取り組みをうかがいました。

第 2 回は、足利市に事務局を置きながら被災地を始め全国で図書館設置活動を行っている「みんなのとしょかん」代表の川端さんから、図書館を通じた地域振興や新しい教育活動について貴重なお話をいただきました。第 3 回は足利市の中心である鑁阿寺と足利学校周辺の通称「石畳商店街」で和服からカフェまで幅広く商っておられる「うさぎや」店主である大竹さんから、地域活動の楽しさやご苦労話を聞きながら、活発な意見交換を行いました。

少子高齢化の進むわが国では、地方都市が元気になることが大切なことは言うまでもありません。そして、地域の活性化のために、大学が地域振興のネットワークの拠点として機能してゆくことが期待されており、そうした活動の一環として、内閣府地域活性化推進室の協力を得て、全国の大学で「地域活性化社会システム論」が開講されております。

本学もこうした全国的な活動の一翼を担う意味で、6 年間にわたり両毛地域の市町を中心として「まちづくり活動」を実践しておられる方々からご講演をいただき、その成果を講演録の形で情報発信できたことを嬉しく思っております。こうした成果を基に今後も引き続き、両毛地域の学術・文化の拠点として地域の活性化のための活動を継続して参りたいと考えております。

開講によせて

特定非営利活動法人足利まちづくりセンター
VAN-NOOGA 会長　中川三朗

公開講座「地域活性化社会システム論」は、少々堅苦しいテーマですが、日頃、日常的にまちづくりの地元活動に努めてこられた方々をはじめ多くの方々のご尽力とご協力によりこれまで六年間を続けることができました。この企画も今年度をもって閉じることとなりましたが、この間、足利工業大学はもとより関係の方々から多大なご支援をいただき、心から感謝申し上げます。

ここであらためてこれまでの活動を講座の講演テーマにそって振り返ってみたいと思います。

地域の活動家のもの

「鹿沼市でのまちおこし」（カフェ事業を基にしたまちづくり活動）

「佐野市でのクリケットとまちおこし」

「自転車と足利のまちづくり」

「桐生のまちおこし活動」（ファッション等の企画と活動）

「伊勢崎銘仙とまちづくり」

「栃木市のまちづくり」協働の推進から栃木・蔵の街かど映画祭まで

「太田市のまちおこし活動」（NPO 法人クラッセ太田の活動）

「那須烏山のまちづくり」山あげ祭りと地域コミュニティ～歴史・現状・課題～

「館林市のまちづくり - 下町通りの活性化 - 」

「行田市のまちづくり - 足袋のまち行田の活性化」

「栃木市のまちづくり - 伝建地区とまちづくり」

「地域とともに発展するために - 大間々町商工会青年部の活動を通して - 」

「まちをげんきに・みんなのとしょかん」（足利市に事務局）

「うさぎや製『キモノのココロ - ハジマル・ハジケル・ハジモカク - 』」（足利市）

行政の側からのもの

「全国における地域活性化政策について」

「栃木県における中心市街地活性化の取組み」

「渡良瀬川流域の防災とまちづくり」

「全国の地域活性化の取り組み」

まちづくりに関する事業者等のもの

「UR 都市機構による地域活性化事業の事例について」

「日本の地域活性化事業の動き - 地域の目線から - 」

「地方都市の現状とこれからの地域のあり方」

「商業施設の展開と地域の活性化について」

「ソーシャルビジネスの失敗に学ぶ」

大学の側からのもの

「両毛地域を視野に入れた地域活性化論」

「地域資源の発掘と活性化の戦略 - 別府市の事例から - 」

「五感によるまちづくり」

「不動産から見た地方都市の動き」

「両毛地域の都市の財政」

以上 28 テーマの内容は受取る方々それぞれに大切なことを伝えてくれたのではないかと思います。NPO 法人足利まちづくりセンターVAN-NOOGA は 2015 年には 15 周年を迎えます。この公開講座の成果を踏まえてあらためて地域の活性化、中心市街地の活性化を模索していきたいと思います。

「地域と共に発展するために」
－大間々町商工会青年部の活動を通して－

大々町商工会前青年部長
吉澤正樹

司会

足工大と「ヴァンヌーガ」の本年度第 1 回の公開講座です。今年で 6 年になり、好評なんですが、今日は学生さんが学校の行事との関係で来られないということで、残念ながらちょっと参加人数が少ないんですけど、のお話のほうをお伺いいたします。

それでは今日は、群馬県みどり市から大間々町商工会の前青年部長の吉澤さんをお招きして、『地域とともに発展するために』という題目でご講演をお願いしております。

まず、恒例の「ヴァンヌーガ」会長挨拶です。

中川会長

今日は吉澤さん、お忙しいところありがとうございます。

だいぶ陽気もよくなってきたんですけども、世のなかはすごく災害が多くて、そういう意味では足利は災害が非常に少ないものですから恵まれているということでございますけれども、町の活気ということでは問題を抱えておりまして、我々の NPO「VAN-NOOGA」としても、どうしたらいいかずっと考えてきてるんですけど、なかなか思うようにはいかないのが現状でございます。今日は，足利工業大学と共催での公開講座ということで 6 年目になりまして、今年第 1 回目ということになります.

だいたい、足利中心に北関東、この周辺の町々で活動されている方にいろんなお話を伺っておりますが、今回はみどり市の吉澤さんにお願いするということで、ほんとに聞く人間が少なくて大変恐縮でございますけども、テープを起こして出版するということでやっています。どうぞよろしくお願いします。よろしくお願いいたします。

１．はじめるにあたって

吉澤講師

はい。では、改めまして、こんばんは。ただいまご紹介にあずかりました大間々町から参りました吉澤正樹と申します。私は商工会の青年部長を昨年の 3 月末までやらせていただきまして、それで、今、商工会の立場でいうと青年部の参事役員ということになっております。ただ、全国の商工会議連合会のほうのルールが変わりまして、今年から 45 歳まで青年部ということになりまして、私、現在 43 なんですけども、あと少し 45 までは青年部ということで在籍することになりました。今は若手を育てるというか、いろいろがんばってもらうために、いろいろ我々の経験を教えているようなところでありまして、私もいろいろ町おこし的にがんばってはいるんですけども、なかなか難しいところであります。

今日は、この時間ですとお仕事も終って一杯やるところだと思うんですけど、今日は貴重な時間を割いていただきまして誠にありがとうございます。

では、簡単に大間々の今、商工会青年部で私が携わってきたことをダイジェスト版にしてみましたので、今日はパワーポイントでご紹介したいと思います。

まず、私の経歴ですけれども、みどり市大間々町桐原というところに生まれました。高校は桐生工業高等学校の機械科を卒業しました。その後、日本大学生産工学部機械工学科に入学し、そこを卒業したあと株式会社ピーエス三菱という会社に入社しました。また、同社九州支店へ出向し、その後、そんなにいずに退社しました。翌年、現「メジャー」、昔は「吉澤商会」という屋号でうちの父が仕事をやっていたところに入った形です。

1999 年に消防団に入団。同年に商工会青年部に入部。同年にまた、組織変更。私が入って 1 年少し経ち，個人商店から法人へと会社のほうは組織変更いたしました。続いて、その年に私、結婚いたしまして、その翌年、『有限会社メジャー』の代表取締役になりました。

その後、地元でいろいろ仕事をしながら、また後ほどお話ししますが、青森県の下北郡の大間町へ行ったり、また、みどり市長と一緒に大間町に表敬訪問を行ったりいたしました。その年は、東日本大震災があり、また商工会青年部長になったり、いろいろ忙しかったんですけども、翌年、「まぐろ解体ショー」、その 2 年後に「アンテナショップ」なんていうことを行いました。

２．生い立ちと地域への関わり

１）生い立ちと地元へ帰るまで

さて、私の幼少期なんですけど、野球少年、昔はほんとに野球、今のようにサッカーとかなかった時代だったんですけどもね、ほんとにどこへ行っても子どもがバットを振ってるような時代で、野球少年を目指したんですけど、でも全然，技術が・・・、私は下手なんだってすぐ挫折しました。

今、パワーポイントに出ているこういうおんぼろ家に住んでいまして、いつも寝ると天井裏にネズミがばたばたばたばたほんと走り回るような家で生まれました。私は機械をいじるのが大好きで昔から組み立てたり分解したりよくしまして、理科の授業とかで懐中電器をつくるなんていうのがあったんですけど、全 4 回シリーズぐらいのところを 1 回目で全部つくってしまい、先生に「速いよ」なんて怒られたりしていました。そういう好きなものには，ばあっといってしまうような、私、いのしし年で、突き進んでしまうこの私の性格は，変えられないのかなと思っていますけども、幼いころはそんな感じでした。

赤城の山奥であわや遭難ということがありました．小学校 6 年のときに自転車の 5 段階切りかえ、昔はサドルの前のフレームにガチャガチャいう、ギアの切り替え装置のある自転車が主流だったんですけど、その自転車で赤城山に友人と一緒に行ったんですね。急勾配で自転車はほとんど手押しでした。5 段切りかえでも乗っていけないんです。それでもなんとかお昼ごろ赤城山の頂上に着いて、さて帰ろうというときに、南面に来ればいいんですけど、友達が北面行ってしまって、「違うよ、違う」って言うんですけども行ってしまって、置いてくわけにいかないので、それで一緒に一気に山を下ってしまって大変な目に遭いました。

当時、沼田大間々線っていうのは砂利道で自転車なんかとてもじゃないけど走れる状況じゃなかったんですね。近くを通っているトラックのおじさんに助けられました。今でも覚えてるんですけど、根利の小林さんという方に助けられたんですけど、昔は携帯も何もないですからね、ほんとに連絡のしようがないですから大変な思いをしたことがあります。人生の、ちょっと大げさ

ですけど、ターニングポイントであるんです。

ターニングポイントといえば、最初は前の会社を辞めたことで大きく私の人生が変わったかなと思います。あと、商工会青年部へ入部して、そこで学んだこと、結構大きいことを学びました。それから、「大間々で大間のマグロ、なぜ」みたいなことがあります。これはまた後ほどご説明します。

前の会社を辞めた理由ですね。ピーエス三菱という会社ですが、もともとが高速道路をつくる会社なんですね。高速道路、PS：プレストレストコンクリートを圧縮して強度を高める特殊な技術を持った会社です。もともと石川県の七尾に製造工場があって、そこをメインにやっていたんです。三菱マテリアルの100パーセント子会社でやっておりまして、今は三菱建設とピーエスという会社が合併して「ピーエス三菱」という会社になっております。

私は現場を転々と、高速道路、たとえば東名の拡幅工事ですとか、上信越自動車道の長野の佐久インターチェンジの先の工事をやったりしました。

２）有限会社メジャー社長に

その会社を辞めたあとに、吉澤商会、現「メジャー」に入ってわかったことがあります。まず入ってびっくりしたんですけど、仕入先から買掛金の督促、つまり「仕入れた代金をまだ払ってないから早く払わないと商品を出荷しません」と言われました。これは大変だということで、商工会を通して金融公庫から借り入れしまして、保証人は私がなりまして、マイナスからのスタートみたいな形で、よく「若社長」とか「馬鹿社長」とかほんとに馬鹿にされて、いろいろ教えてもらったりしたんです。そういう俗に言う２代目になるんですけども、まあ２代目ということで可愛がられたり、いろいろいじめられたりして強くなってきたかなと思います。

それで、さらに地元にどっぷり浸かるということで、私も小さいころからずっと大間々に住んでいたんですが、学生のころは日本大学、千葉の習志野にありまして、そこに４年間行っていました。前の会社も東京本社で、基本的には地元に帰ってくることはあまりなかったんですね。正味 6、7年はずっと外に出ていたんですが、辞めてやっぱり大間々に地元に帰ってきたら、本能的というんですかね、生まれ育ったところというのはほんとにいいなっていうふうに思います。

特に、大間々では祇園祭というのが８月の 1、2、3 日とあるんですが、この３日間は皆さん、飲みっぱなしで、財布なんかいらなくて、どこへ行っても飲めちゃうみたいな、ほんとに楽しいイベントというか、お祭りなんです。そこで神馬と駆けるイベントがありまして、これはおもしろいなっていうんで、はまりました。

その流れで、なんかしらないですけど消防団に入ってしまうことになりまして、セットで商工会なんていうふうになっています。だいたい田舎ではそうかなと思います。

３）町おこしへの一歩は祭りから

次に、商工会の研修旅行がありまして、「黒壁スクエア」、滋賀県彦根市長浜地区行ったんですけども、黒壁スクエアっていうのは、町おこしで成功した場所というので全国から多くの方が研修に来られるところなんですね。

何が成功したかというと、今はガラス細工で有名なんですけど、もとはガラス細工

に全然縁がなかったところなんですね。笹原さんという代表の方が全世界を旅したときに、どこの国に行ってもガラス細工があるところは必ず女性のお客様がいて、女性のお客様が多いところには男性もセットで一緒に来る。

お客を見て、またほかのお客さんも来るみたいな形で、何か多くのお客さんを引き込めるものはないかということで笹原さんが分析したら、ガラス細工がいいということで始めたそうです。

当時、最初に笹原さんがやったのは、交通量調査なんですね。1 時間当たり、どのぐらい何が通るのかと調べたら、本当に 1 時間で人 1 人と犬 1 匹だったかな、そういうところからスタートをしたそうです。今では年間何十万人だったかと思います。相当お客が来る商店街、つまり、スクエアというふうになりました。

私、しばらく行ってないんですけども、やっぱりコンビニとか大手スーパーという話が来るそうなんですけど、そういうでかいところとチェーン店は一切入れないそうです。入れるとやはり雰囲気が変わってしまって町のよさが PR できないんだそうです。

「駐車場とか、旅館はどうか」という話を聞くと、「町が活性化すると行政でなくて、離れたところにもホテルができたり、駐車場を経営する人たちが出てきたり、またそれも商売になって、勝手にそれはできるものだから、つくらなくても発展はするんですよ」という話を確か、してもらった記憶があります。

それで、ここにも書いてありますけれども、その講話で目からうろこが落ちた話が一つあります。

そこで教えてもらったことは、祭りとは、なんてちょっと生意気なんですけども、祭りとイベントの違いですね。このことに対して、よくわかっているよという方はいらっしゃいますか。

A 氏

イベントは出来事なんだよね。で、祭りというのは、その出来事が恒例化してくると祭りになる。だんだん祭りが儀式になってくるんですね。

B 氏

神様がいるかどうかだよ。

吉澤講師

ほとんどその通りですね。私も、なんだろう、当時は、全然一緒じゃないのなんて思っていたんですけども、違うんだとわかりました。

祭りもイベントも祈りがあるかないかで全く違うものになるということなんですね。祈りがあるイベントは祭りで、祈りがなければ、祭りはただのイベントになってしまうということです。ですから、「祈りがあるイベントにすれば、ほんとにそれは祭りだ」ということを笹原さんは言ってました。

３．大間々商工会議所青年部の活動

１）大間々祇園祭

それでは、商工会青年部の事業の紹介のほうに行きたいと思います。

私、いろんな事業をやったんですけども、「車馬駄馬 DO!!」っていうイベントをやったときは結構おもしろかったんですね。これは、さっきもちょっとお話に出させてもらいましたが、馬なんですね。神馬といって、大間々の祇園祭ですと、清めの、いわゆる前座なんですけどもね、塩を撒いて町を清めるという上から下まで駆け抜ける行事がありまして、そのあとに渡御、つまり神様を乗せた牛車というか、そういうもの

で渡ったんですけども、今は、その牛は、お休みしてるんですが。

その清めの馬の儀式のときに、その馬を見てほんとにすごいなと思って、「車馬駄馬DO!!」っていう名前も私が勝手に提案してつけさせてもらったんです。車馬というのは馬車のこと、引っ張られる側、これを「車馬」と言うそうなんです。駄馬は、馬には申し訳ないんですけど駄馬というふうにつけさせてもらって、DO はなんかそのほうがいいかなというんでつけたイベントなんです。

これは全部で 3 回やりまして、意外とマイナスにはならずに、ちょいと黒字ぐらいになりました。なぜかというと、乗車の運賃だけだと確かにいくらにもないんですけど、この看板です。ちょっと小さくて見づらいんですけど、この看板を出すことでコマーシャルですね。広告宣伝費で、そちらで黒字になる事業でした。

最初は、これも群馬県の補助金が出たんですけども、県の補助金がなしになってしまったんで、さあ、どうしようっていうことで急遽そういう広告収入でやることになりました。でも、やればできるんだなっていうふうな感じですね。馬と馬方さんが、レンタルと言っては失礼なんですけど、出演料が高くて・・。

A 氏

これは、伊香保から借りてくるの。

吉澤講師

榛名町です。おまわりさんも一緒に乗ってもらったりしたんですけど、無事に事故もなく、おもしろかったです。

B 氏

大きな馬だったんですね。

吉澤講師

そうですね。約 1 トンです。

２）商工会活動

次に進めたいと思います。どこの商工会でもこれは共通してあるんですけども、各単会と言われる団体の野球大会があったり、我々の家族間交流、仲間の交流ということで餅つきというのをやりました。結構子どもや奥様に人気があるんで、よかったですね。

これも、どのでもあると思うんですけど、青年の主張大会ですね。「全国絆事業」ということで、我々は朝の 5 時から掃除をしまして、ごみを集めて、こういったことを行いました。これは全国同時に、ほぼ同じ日にやるんです、その前後 1 週間くらいの日でオーケーだったんです。そういう特別な事業を毎年やっております。

３）青森県大間町との交流

それでは、青森県下北郡大間町との交流ということですが、これ意外と評判がよかったイベントなんですね。大間のマグロ祭りに参加して、マグロ解体ショーを見てとりこになったということです。なぜ、大間と交流っていうふうに皆さん思われたかと思うんですけども、

C 氏

名前が似てる。

吉澤講師

そうですね、おっしゃる通りです。大間と大間々は名前が似ているんですが、ただそれだけではなく、いろんな条件がありしました。今から 4 年前に全国の高速道路において ETC が休日、祝日 1,000 円ということで乗り放題という制度があったと思います。皆さん、覚えてらっしゃると思うんですけどね。これは長距離を旅するにはうってつけだった。1,000 円でどこでも行け

るんだったら、一番遠いところがおもしろいんじゃないかということで、いろいろ私も探したんですね。そしたら、最北端というんで見たら大間が出てきまして、ちょうどマグロ祭りの時期だったんですね。これはいいじゃないかというんこと。

これはほんとにおいしそうなマグロですね。大間といえば知らない方がいないぐらい有名なマグロブランドだったんで、私、すぐ大間の商工会に連絡したんです。「こちら、商工会青年部と申します。マグロ祭りに行きたいのですがパンフレットをいただけますか。」と聞くと、「すぐに資料を送りますよ。」と、すごくいい応だったんです。ここにも書いてあるんですけど、大間のおもてなしはそれだけじゃなかった。「こちらの青年部長に連絡をつけますよ。せっかく来るんだったら、こちらの青年部同士で一杯やったらどうだい。」ということでもう私どもも、「じゃあ、ぜひお願いします。」というような形で、とんとんと進んでしまいました。

皆さん東北の方は、ご存じの通り、心温かい方が多くて、ほんとに 780 キロの旅が本当にここから始まったのだなと思いました。これが初めて行った本州の最北端なんですけど、大間ってこんな形ですね。最北端ってこんな形になっています。

これはマグロの一本釣りのオブジェだそうですけど、これはほんとに獲れたマグロと同じぐらいの大きさになっているそうです。ここにも資料があるんですけど、最高で 400 キロぐらいのが釣れたそうです。あとでまたご説明したいと思いますけど、ほんとにこのぐらいです。フォークリフトじゃないと上がらないぐらい大きなマグロなんですね。すごいです。大間のマグロ祭り、2012 年に行ったところの写真です。そのときは、商工会青年部を連れていきました。初めは商工会青年部 3 人で行ったんですけども、私の話がおもしろいというんで、皆さん、「行きたい」ということになりました。

これは仏ケ浦というきれいな石が見られるところですね。これは大間の隣の佐井村という村ですね。これは大間ですけども、こんな感じで高台から見る景色がとてもきれいで、夕焼けもこんな感じで、大間は本当になんともいえない幻想的な海です。

栃木も群馬も海なし県を代表しているんですけど、海のものが恋しいというか、憧れるんじゃないかなと思います。今、ちょっと映った女性が島さんといって、青森で私が知ってる中では町おこしに力を入れてる方で、何かというと、「マグロ一筋 T シャツ」とか、そういうのを発案したり、ローマの休日ならぬ「大間の休日」みたいなのを実行したり、そういう方です。

すごいと思ったのは、もともとフェリーがあったんですけども、やっぱり人が少ないから「フェリー廃止」みたいな話が出たんですね。それを「何がなんでもそれを阻止しなくては」というので、その代表をされた女性でもあるわけで、本当に大間のなかでは島さんが今でもがんばっております。ホームページなんかを見ると、「あおぞら組」なんていうので出てるかと思います。

４）東日本日大震災により深まる絆

それで、交流が始まった矢先に東日本大震災です。私も大間との交流が始まったときに震災が起きてしまって、本当に大間の人は大丈夫かなと思ったんですけど、幸いなことに大間のほうではさほど被害はなかったんです。ただ、陸の孤島っていうんですか、ほんとに道路が寸断されてしまって物資が全然通らなくなってしまったんです。

「物資が入らなくて困った」などとは言っておりました。それで、私ども「何か送らなくちゃ」ということで、取りあえず震災直後にすぐに買い出しに行ったんですけども、ほんとに品切れ状態で、送れるものといったら、カレーうどんとか、カップ麺。湯たんぽ、これは「暖がとれない」と聞いたんで湯たんぽを確保したり、でもとても全員分は買えないんですけども、できる限りの青年部の少ない部費から出させてもらって送りました。これ以外にも個人的に送っている方もたくさんいるんですけど、青年部からということで一応お送りしました。

また、震災のがれきの撤去で仙台に行きました。さっきも申しました通り青森では津波の被害はほとんどなかったということで、対岸の函館には1メーター30センチぐらい来たそうですが、その函館も被害がほとんどないということです。

仙台の若林区に私の知り合いがおりまして、そこは壊滅的な被害だったんですね。ボランティアの受け付けが拒否されたんですよ。

というのは「がれきの撤去とかの手伝いに行きたいんですけど」と言ったら、「いっぱいでパニックになっているぐらいですから無理です」って言われました。

でも、ここで負けないのが青年部ということで、結構反対も押し切って、「危ないから行かないほうがいいよ」なんていう声もありましたが、我々で、自分で保険に入ったり、いろんな準備、段取りをして、泊まる道具から食料、水、すべてほかの人に迷惑をかけないような形で車に詰め込んで仙台へ突っ走りました。

被災時のいろいろな映像とか写真を見られている方もいらっしゃると思うんですけど、私も報道される前の写真もちょっと撮ってみたんでご紹介します。こういう悲惨さは今でも思い出しちゃう本当に大変な状況でした。家は基礎ごと全部流されたりしていまして、工場も。これは基礎の部分が残っているだけで、全部めくれちゃうぐらい津波の威力があったわけですけど、電柱も斜めに傾いてしまっていて、警察官がところどころにいます。

私がボランテイアで行ったのはこの鉄工所ですけど、「このなかを直してほしい」。直してほしいというか、砂がすごくて、「砂を片づけてほしいんだ」ということでした。「じゃあ、やりましょう」ということで、ゴールデンウィークを使って2日間やらせてもらいました。だいぶ片づいて、ある程度、作業ができるようになったんですけど、まだ電気がないので、ご自分の発電機でした。

舟が乗っていますね。万が一のときは、「その舟にもう一度乗る」とは言ってたんですけど、この5月ごろでも、まだ余震が結構あったときです。たまにぐらぐらと揺れて、「ちょっとやばいな、ここの現場自体も、もしやまた、来ちゃうんじゃないかな」という、そういうトラウマというか、本当に危険を感じる現場でした。

ここに写真がありますが、ランドセルが落ちていたり、いろいろあるんですけれども、こういったものは、さっきの警察官のところに届けるようになってますけども、このランドセルの持ち主は幸いなことに助かったらしいんです。こういうのが落ちていたりすると、「これでこの子亡くなっちゃったのかなあ」と思いながら拾ったりしたんです。本当に悲惨な震災だったです。

5）姉妹青年部協定とマグロ解体ショー

それでも、震災でさらに深まった絆とい

うものがありました。「これからは、お互いに助け合おう、大間と大間々で」とかですね。そんなこんなやっているうちに、「大間町商工会青年部と、姉妹青年部を結ぼう」なんていう話になりました。

そうしたらそれに TBS の報道の「N スタ」という夕方の番組があるんですけども、これ特番を組みたいなんていうんで、少し、2 日間、密着取材を受けました。

次にいきますね。「マグロ祭り」をここにも書いてありますけど、群馬県でも「大間のマグロ解体ショー」をやろうじゃないか、商工会青年部でもこの輪をもっと広げていこうという流れがなりました。まずは「幼稚園も巻き込んじゃおう」ということで、趣旨を大間々南幼稚園の園長先生にもちゃんと説明したら、「そういう交流もいいですね」ということで始まりました。

こちらからは大漁旗を園児がつくって、大漁旗といっても紙でつくったものなんですけどね、送ったりしたら、向こうからも、いろいろまた送られてきたりしたんです。こういった、地域ぐるみの交流の輪を広げていこうということでやりました。

それでやっと念願の解体ショーができることになりました。県の予算もつきまして、これはすごかったですね、本当に。有名人が来ないとこれだけの人は来ないかなというぐらいなことになりまして、我々もあれだけ写真を撮られるのは人生始まって以来でした。こんな感じで、テレビに映って放映されて・・・。テレビに出るとまた不思議なんですけど、あんまり連絡取れない友達とかからも連絡来たりしてすごいんですね。

それで、どういう姉妹協定を結んだかなんですが、ここに出させてもらったんですけども、「お互いに楽しく友好的な青年部の姉妹関係を約束します、お互いに遠くても、姉妹の絆を忘れずに、困ったときには助け合うことを約束します、お互いの青年部の家族、仕事、町がより幸せに発展することを約束します」ということで、基本は当たり前のことを書いているんです。

ただ、これに、必ず何々しなくちゃならない、というふうになると、また後々、世代が変わったときに負担になってしまうのも大変なので、このぐらいにしておけば、「万が一のときには、助け合いましょう」ぐらいな感じで、簡単に言えば当たり障りのないようににつくらせてもらったんです。こういう協定を結びました。

そうしたら早速、まあこれもテレビで報道されたからなんですけど、「アサカシ」ってご存じですか。」

B 氏

埼玉県の朝霞市。

吉澤講師

はい。もう一つ、アサカってあるんです。

C 氏

福島県の用水のある安積。

吉澤講師

やっぱり、似てるからというんで、我々の町街にもアサカがあったんで、姉妹協定を決めまして、また、向こうの大間のほうにも横浜っていうのがありまして、そこもまた交流したいというので、そういう問い合わせがあったそうです。語呂合わせ、字合わせみたいなものですが、これはおもしろかった。

そういうのをやって、ほかの方の刺激になるっていうのも、ある意味成功したのかなと思ったんです。改めてテレビの影響力はすごいなと思いました。

６）大間アンテナショップ「まんま１号館」

それから経済産業省の補助を受けて、今年の 2 月 22 日に、大雪の日ですね、大間のアンテナショップ「まんま１号館」をつくりました。こちらが改装前です。これが改装後のイベントやったときの写真ですが、こんな感じで、町おこし的なこともやっています。

本当は商工会青年部主催でやりたかったんですが、青年部とか明確でない団体には、当時は補助金は出せないって言われました。NPO 法人でもだめだったんですね。「個人事業主か法人かどちらかでないと、補助金出せません」と言うんです。私、ちょうと商工会青年部を卒業したところだったんで、自分の「メジャー」という稼業がもあるので副業という形になってしまうんですが、一応、店も出させてもらってオープンしました。この新聞にも少し載せてもらったんです。

さらに、交流深まるということで、これは、板橋区大山ってご存じでしょうか。東武線沿線ですけども、2013 年こちらでも、ひらがなで書くと、「おおやま」、「おおまま」、ちょっと似ている。強引に全部結びつけて。大間と大間々が大山で「解体ショー」やりました。

これは、つい最近の記事ですけど、1 週間前です、大間の方が来て、大間のマグロの解体ショーをやってもらったんです。これは私のやっているお店が場所を提供するということでショーをやりました。参加者には試食という形です。

以前にもマグロの解体ショーをしたときに、売らない、あくまでも試食の無料配布という形式だったら、自己責任ということになります。お金のやり取りが発生すれば、全部管理された調理室、ガラスで 4 面全部囲まれたものがいる。そういうのは無理だなということで無料配布にしたんです。

そういったことも工夫して、なんとか無事成功して、食中毒もなく無事、終わりました。

７）家業との両立

最後に私の会社が何をしてるかを簡単にご説明したいと思います。測量機メンテナンス販売、IT 機器販売、ソフトウェア制作販売ということで、もともと吉澤商会が何を扱っていたかわからないので、「メジャー」という会社にしました。メジャーもなんだろう、って思われてしまうかもしれませんけど。測るメジャーです。ただ当時、私が「メジャー」というふうに社名をつけるときに、野茂投手が海外のメジャーリーグに行った年だったんです。当時メジャーというと、野球のスポーツ番組にちょって出るくらいでしたけど、今は最初に出てくる感じになってしまったと思います。有名な大きな会社になりたい夢もありまして、メジャーに引っかけて、そういう会社名にはしたんです。

それで、手前味噌なんですけど、群馬県に 4 社、同様な仕事をしている会社があります。測量機の校正というのは、たぶん建築関係に携わった方だとわかるかと思うんですけど、高さを出す測量機、レベルという機械があるんですけど、あと距離を測る、今でいう光波トランシットですね。そういった機械が本当に合ってるかというのを、うちのほうで測定する仕事なんです。測定器を測定するということで、これは本当に、神経を使う仕事です。うちのほうの検査機が狂っているとすべてのものが狂ってしまうので、常に、温度管理とかには気をつけているわけです。たとえば基本誤差 1 キロ

でプラマイ 3 ミリくらいの精度でやっています。

測量の豆知識なんていうふうにちょっと書かせてもらったんですけども、本州、四国連絡橋がありますが、柱と柱の距離が約 2 キロ、下の基礎からの高さが、先端までで 297 メーターなんですね。地球って丸いですから、極端に言えばこういうふうに広がるわけですね、この下と上との差、どのぐらいあるかわかりますか。勘でいいですから。2 キロで、高さが 297 メーター。約 300m。

B 氏

実際の 2 キロっていっても、地球の半径が大体 6000 キロ、2 センチとかかな。

吉澤講師

93 ミリですね。10 センチ近いですね。はい。計算上、93 ミリなので、橋もこういうふうに実際広げてつくっているわけです。私も、もともとは橋をつくる会社にいたんで、当然、全部設計書に入っているんですけど、93 ミリ上が広いんだと思うと、上に行けば行くほど、どんどん土地が広くなるような感じで、意外だなと思います。

あと、IT 機器部門ということで、ご承知の通り、WindowsXP からの引っ越しとか PC が壊れた場合、ブルースクリーンとか、起動しないとか、そういったものを修理したり、あとは社内ネットワーク、イントラネット構築、セキュリティ対策なんてことはやっております。

それと、当社の特徴として、たとえば，出張料無料とか、万が一直らない場合は基本的に、無料返却、うちの場合、直らない場合は無料です。電話によるサポートとかは無料なので、ぜひ、機会がありましたらご利用いただければと思います。

最後に、弊社の企業理念ということで、「いつも感謝、いつもチャレンジ、いつも人を喜ばせ主義」ということで、会社のほうはやっております。

で、「生き様」なんて書かせていただきましたが、私も、いつも原点として、こういうふうに考えているんです。「遊びがあるからうまくいく」といつも思っています。やっぱり人生、遊びがなければうまくいかないのではと思うんです。

ちょっと前にありましたね。「ビールがなくても生きていけるんじゃないか」なんていうふうに言われていましたけど、お酒好きの人は、「そのビールの 1 杯のためにがんばってんだ」ということで、結構夫婦喧嘩になったらしいですけど。

遊びは、車に置き換えると、「遊びがない車は、真っ直ぐ走らない」とよく言うそうです。多少、気持ち遊びがあるから、車は真っ直ぐ走るとか、よくそんな話があるんです。

または、「ピンチはチャンス」、または、「一期一会」なんてことで、こんなことを考えながら生きております。ちょっと時間が過ぎましたけども、ご清聴ありがとうございました。

４．「絆」あるいは「人の縁」

司会

どうも、ありがとうございました。片倉さんの紹介でしたか。楽屋裏を話しますと、次は誰に頼もうかというときに、JC の関係からというような話のなかからたどっていくわけですね。

片倉さんは足利の蕎麦屋さんです。大間々の近藤酒造ともお知り合いとかで。

吉澤講師

あ、そうですか。私、近藤さんもよく知っておりまして。

B 氏

大間々商工会の近藤さんは前の全国商工会連合会の会長だったのね。で、近藤さんのお父さんが町長やったよね。

司会

先ほど仰っていたように、一期一会ですけど、いろんな絆というか、つてを探りながらこの公開講座も 6 年目に突入してるわけです。最初は、「メジャー」とはなんの会社だと思いましたが、測るほうのメジャーだとは思わなかった。

C 氏

お父様が、大間々でそういう仕事を興されたんですか？

吉澤講師

父は、若いころは自動車会社にいたんです。手先器用だったんです。父から聞いた話ですけど、いろいろな検査に自分が合格して、試験官になったらしいんですよ。

B 氏

もともと技術者なんだ。

吉澤講師

はい。そうですね。そのあとはレジの会社に努めたり、最後は、事務機屋さんに勤めて、私がちょうど生まれたときに独立しまして、その年に吉澤商会を始めたんです。だから、今私が 43 なので、創業 43 年なんです。昭和 46 年、父は昭和 15 年生まれです。

A 氏

日本の経済もこれから行くっていう時代で、そのあとオイルショックで下になるわけだから。

C 氏

そうだね。まだまだ、建設業はそれいけどんどんの時代で、測量機器も、公共事業が伸びて行く時代だからよかったわけですね。

久しぶりにさっきの話であった、地球が丸いっていうのをね、今の子は、地球が丸いことを忘れているって言うんだよね。測量業者は、「学生が入ってきても、地球が丸いことをわかってない」と言って怒ってけどね。

吉澤講師

全部データは、球差補正かけられてますからね。計算せずに全部。

B 氏

なんにも考えないでコンピューターにデータを入れてしまうんだね。

A 氏

東京都では 100 ヘクタールぐらい、実は面積が増えるはずなんですよ、理屈から言うと、膨らんでいる分。だけど、そんな馬鹿なことは今、みんな補正されていますから。土地が高い時代の小話でした。

５．町起こしのきっかけ

１）軽いノリで楽しく

司会

業界筋の話題を転じまして。

正直言って、大間々だから大間とっていう、ものすごく安易でいいですね。難しい理屈はいらないんでしょうね、きっと、町おこしというのは。

C 氏

大間々っていうのは、栃木とか、この辺をずっと車で走っていると、どこへ行ってもこっちは大間々。こっちが大間々って書いてあるんだよね。「何これ」って思ったんだけどね。

吉澤講師

そうですね。大間々なんとか線とか、なんとか大間々線とかですね。結構、大間々に通じるような。

C 氏

あそこは悪い意味ではどん詰まりだけど、交通の要衝ってことなんでしょうね。銅山街道の分岐点ですよね。

吉澤講師

地図上で見ても、意外と放射状になってはいるんですね。地形的に広がっている。山麓にずうっと、広がっているみたいな。

B 氏

間々っていう意味がそうだよね、確か。

吉澤講師

間々って、段差のことです。ちなみに、青森の大間は、アイヌ語なんですよ。意味が違います。

C 氏

板橋の大山までくっつけちゃうんだからすごいよ。

B 氏

大山商店街は、東武東上線で一番、立派な商店街ですよ。よく話題になる。

A 氏

確かに、そんなに肩肘張らずにやるっていうのがまず大事、基本ですよ。

B 氏

大間がよく、ついてきてくれたね。

吉澤講師

そうですね。最初、私が、名刺交換してるとき、町名は全然気づかれないですから。ワンテンポ置いて「ええ」みたいな、「あれ、群馬ですね」なんて。やっぱり気づかないんです。

C 氏

ある意味ではラッキーだったんだよ、と思ったりもするんだけど。そういう遊び心が通ずるところに、うまくヒットしたって感じがある。だめなところは、「何そんなの」ってなっちゃうからね。

B 氏

さっきの黒壁だって、全くガラスに関係ないのに、彼は倉庫屋の社長で会社を倍にしているんだ。だから、ベネチアにすぐ行っちゃうわけ。あんまり考えだしたらうまく行かないよね。

A 氏

まあ、理屈じゃない。本能のようなところで動いてみるというのは大事なことかもしれないですね。

２）祭りを考える

B 氏

それとあの馬がいいね。子どもが驚くよ、でかくて。

吉澤講師

馬はね、結構評判よかったですね。皆さんびっくりしていましたからね、本当に。

A 氏

イベントと祭りの祈り、どのへんに祈りがあったんですか。

吉澤講師

そうですね、皆さんのいろいろな祈りの思いは，違ってはいると思うんです。たとえば、大間々祭りに対しても、いろんな思いがあってやっている方がいると思うんですけども、とにかく、仰っられたように、本能じゃないですけど、「それがいいな」と思ったら「まずやってみる」みたいな。それで、考えるんだったらば、やりながら考えないと。

待ってからだと何ごとも終わっちゃって、「ああ~あ」、みたいな。「やっとけばよかったな」みたいなことも結構あると思うんです。

意外とチャンスなんてのは、ほんとに、なんでもそうだとおもうんですけど、こう一番身近なところにすべてチャンスはあったりしても、意外と掴めなかったりするのは、ちょっとした勇気が足りなかったりと

か、ほんのちょっとしたことで、知らないうちに見逃してしまっいてることもあるのかなあ、なんて思うんですね。これは仕事でもなんでもそうだと思うんですけど。

B 氏

大間々は、祇園の祭りだからね。あそこ素晴らしいのは、つい 20 年ぐらい前に、山車を一つ作ったんだ。今どき、山車つくるっていうのはものすごく珍しいことだよね。

吉澤講師

たぶん、最後に作った山車は 7 区のものです。

C 氏

京都とのつながり、八坂とかあったんですかね。

吉澤講師

そうですね。もともとは、京都というか、あっちの祇園祭の流れですね。7 区の山車は、上にいろいろ出る仕掛けがあるような山車ですね。7 区は、菅原道真公を祭っています。

B 氏

昔からあるのじゃなくて、今つくったからね、山車を。大変な金額でしょう、一品生産ですからね。

C 氏

大間々の産業っていうと何がありますか。

吉澤講師

大間々の産業は、星野物産ってご存じですか。小麦粉で有名なんです。星野の小麦粉。

C 氏

小麦粉なんですか。

B 氏

ロボット機械があってね、蕎麦でこう打ったら、蕎麦が出てくるやつ、星野がつくっていた。

吉澤講師

製粉会社ですね。あと、麺もつくっていたり。ちょっと前までは、サッポロ一番塩ラーメンとか、サンヨー食品系もやっていたんです。今はつくってないんですけど。星野グループは、大間々では一番大きな企業です。あとは、酒屋と、お醤油屋さん。「日本一醤油」という商品ですね。お醤油屋さんは今でも、その大間々のまんまのお店の前が、その醤油さんなんです。その登録商標が「日本一醤油」という醤油なんです。日本一醤油と、マグロが日本一だったんで、「日本一セット」で、みたいな話になりました。そういう、いい名前的なところが重なったりしたんです。

司会

じゃあ、解体のマグロをそこの醤油で食べるとおいしいわけですね。たぶん、そういう連想なんですね。龍のつく地名の市町村の「ドラゴンサミット」とかやっているし、そういう軽いノリで、続くものは続くし、本当に、そういう、楽しいことがまず大事ですね。

２）楽しさと食のつながり

吉澤講師

そうですね。やっぱり楽しくないと続かないと思いますね。さっきも、いろいろと出させてもらった写真でも、ほとんどは飲み会のシーンなんです。でも、皆さん、「食」というのは絶対１日３回食べるもので、そのなかの１回を仲のいい友達と食べられるっていうのは本当に幸せなのかなと思います。そういう、食のつながりになると、皆さんも楽しんで、つながりが続けられるんじゃないかなと思っております。

B 氏

だけど、解体ショーによく補助金を群馬

県が出したね。食品絡むものに補助金を出すのをものすごく役所、嫌がるんだよね。

食品が絡んでいると、自分たちは食べてはいけないとかなんとかうるさいんだ。

A 氏

やっぱり、大間のマグロ解体ショーだから出たんでしょ。しかも、ビジネスではないという建前ですから。

C 氏

海なし県だから。

A 氏

やっぱり大間のマグロと言われたら、企画力ですよ。たぶん、それは、補助金が入るとお考えになったわけじゃないでしょうけど。群馬県で、大間々で大間のマグロの解体ショーみたいな企画はおもしろいですよね。

吉澤講師

今、考えると、私もそうなんすけど、飲みながらでも、なんでもとにかく、「やりたいやりたい」っていつも言っていたんです。そういう話を聞いてくれた人が県の商工会議所の局長だったんですけど、「それだけ言うのら」ということで、ちょっと動いてくれて。それで使い道もある程度自由な補助制度の補助金を戴けた。

B 氏

たぶん県独自のものだね、国が入ってなかたんだ。国が入ってると、もっとうるさんだ。

A 氏

基本的にその補助金で、町でみんなが元気になるんだったら、本来の目的として、正しいことなんでしょうね。

B 氏

酒なんか飲むイベントはいっさいだめだから。ずいぶん、フットワークが軽いんだね。

吉澤講師

いやあ、そんなことは、まあ、普通にしてるだけなんですけども。

３）町起こしと家業と家族と

C 氏

それじゃあ、社長さんがそういうことに走りまわるので、社員は、仕事専念ですか。

吉澤講師

そう。ほんとにうちの会社なんかも家族経営に毛が生えたような。今、ちょっと縮小したんですも。家族外の社員は１人なんです。あとは、うちの家内と、父、母、身内だけで。同業者の方で、うちがやりたい仕事をやると「一緒に」という会社さんも結構ありまして。そういうつながり、ネットワークでうまくいってる感じです。こういう時代だと、技術のある方が、たとえば、何人いたとしても仕事がなければ、当然支払う給料も捻出できないですし。難しいところでもあるわけです。

アベノミクスでしょうか。結構 1 年半、もう２年ぐらい前から徐々に悪かったといわれていた建設業界が、少し盛り返してきた感じです。

あとは、「桐生市では計画立てると 200 万円補助金出します」とか、そういう補助金とか助成金とかあります、昔は必ず出てきた助成が 4、5 年前にはほとんどなくなったですね。

C 氏

なぜそういうこと聞いたかっていうと、そういう町づくりに奉仕すること家業との兼ね合い。やりすぎると家族崩壊につながりますね。

吉澤講師

そうですね。妻としっくりいかないとだめですけど。私の場合は、やっぱり友だち

とやってみないとだめです。やはり、つきあいですね。体力とつきあい。

1 週間にあんまり家に帰れなかったこともありました。帰ってはいるんですけどあんまり家族の顔を見ずにまた仕事にいっちゃったりして。そういう意味で、「いるんだか、いないんだかわかんない」って言われたことがありましたけど。

司会

以前お話された館林の方は、「婿だから文句言われなかった」とおっしゃっていましたね。やはり時間を、ほんとにどうやって捻出するか。その各活動する時間ですね。そこがやっぱり一番大きいんですね。

だから、やっぱりサラリーマンじゃ無理ですね。突発的なことに対して対応できませんから。やっぱり町の衰退は、日本中、みんな、サラリーマンなってきたってことが、一番の原因かもしれないと思います。

４）町を守る心とビジネスの狭間

D 氏

私は、全く大間々っていうとこを知らない。通り過ぎるだけですね。赤城のほうへ行くときに通ったり。通った印象とすると、まあ、さびしい。で、まあ、メインの通りだろうと思うところには、両側に商店だったと思うような建物がまだあるけども。やっているだか、やっていないんだか、通りすがりだからよくわかりません。まあ、あまり活気があるというよりは、ないっていう感じがしています。

大間々に行くとすると、紅葉のときに眺めに行くとか、そのくらいの印象しかないんですけれども。将来の町をどうしようとかこうありたいとかっていうご希望は、それでもお持ちですよね。

吉澤講師

私も商工会青年部に入ってこういう、少しイベントとか、町おこしまではちょっといかないかもしれないんすけど、そういう少し努力をするような形にしたほうがいいかなと思ったのも、自分の仕事は、お陰様でなんとかまあ、ぎりぎりには行ける形なんです。ただ将来自分の仕事だけが残って、この町の商店街がほんとにシャッター通り、悪くいえばゴーストタウンじゃないですけども、そうなることをこう想像しちゃうと、すごく嫌なんですね。

自分が小さいころから生まれ育った町が、誰もほんと住めないような町、住みたくないような町になることが、すごく嫌だったんです。ちょっと無理して、商店街に店を出す。私は、商店なんて出したことないんですが。一歩でも、ちょっと前進しようかなっていうに、気持ちで出したんです。

出したんですが、今、開店と書いてあるんですが、実は、そこで調理する店長さんがいたんです。店長さんも８月のお盆で北海道から戻ったんです。店長は「北海道で自分の店を出すんだ」っていう、元々夢があったんです。それはもう前から言っていたんですけども、いつかなって思ったら、オープンから半年後ぐらいでそうなってしまったんです。

そうすると今度お店のほうは、私も昼間は、本業があります。それで料理なんかできないですけど、土日とかは開けられるんです。今、考えてるのは第二、第四土日とかお店でイベントデー、そういうのをちょっとやっていければいいかなと思います。

B 氏

大間と関係があるので、すごくやりやすい。大マグロの部部位が使える。ほかのところよりはずっと、イベントがやりやすい。

吉澤講師

贅沢な悩みなんですが、大間のマグロはロスも出たりして、結構うちの家族も食べたりして、もう大間のマグロ見るのもいやっていうぐらいになってしまった。まあ、ちょっと贅沢な悩みなんですけど。

ほんとは売れないとだめなんですけども。やっぱり仕入自体、安くはないですよ。マグロも、お店をやってみて思ったんですけども、お客さんはお店で今日はどうだ、思ったときに、なかなか来てもらえなかったりして。今日は、数少ないんだけど、というときに、「欲しい」よって来るような。なんでこんなにバランスが悪いのかなと思うような。ちょっと不思議なんですけどね。それがうまくマッチできるようになれば、ほんとに最高なんですけど。

B 氏

大間々で、大間のマグロっていうのは、絶対にいけそうですね。だから、カンパチなんかも中心に売れば、コストも安いし。ここにある頭のね、トロ。かまとろ。ここが一番とろっとして旨いとこなんだけど。でもああいうものをうまく使ってやれば。

吉澤講師

ありがとうございます。そうですね。今、大間々のお店、お借りしているところの家賃を安くしてもらっているんです。ちなみに、いくらぐらいだと思いますか。大間々でお店を借りると。間口でいうと 3 間ですね。奥行きも概ね 3 間ぐらい。もうちっとありますね。4 間ぐらい。

B 氏

4 間 3 間。12 坪ですね。そうすると、普通だと 3 千円/坪ぐらいかな。3 万 6 千円。

吉澤講師

今 2 万円で借りている。なぜかというと、ほんとだったら大家さんは、なんにも使ってないところで、壊してもいいぐらいだったらしいんですよ。壊すとなると、何百万もかかっちゃう。壊したあと、大概、駐車場にするぐらいしかないらしんですけど、固定資産税が少しかかっちゃうから、それがペイできればいいかなぐらいな、くらいの気持ちで。

しかも、少し町おこしに貢献できるんだったら、「吉澤君だったら安く貸すよ」なんて相場的には安くしてもらってるんです。ちなみに足利だと・・・

B 氏

その倍ぐらい。もっと高いこと 7、8 万円といってるんです。実際の価値は 4 万円ぐらいかな。貸す方は、6 万円以上云うの、だから借り手がない。営業が成り立たないんだ。坪 2 万円だから成り立つんだよ。

C 氏

足利はやっぱり高いんですよね。

B 氏

足利は安くしない。だから、考え方も違うんです。基本的に、まだいけると思ってるのかな。

A 氏

金持ちだからだね。不動産持っている人は。

C 氏

安く貸すぐらいならば、貸さないほうがいいと。それだけの力があるんだな。

B 氏

地域には貢献しなくていいと思ってるから。

A 氏

極言すればそういうことなるんだよね。

C 氏

ついつい地元の悪口になっちゃう。

５）市町村合併と町起こし

吉澤講師

でも足利っていうとすごい。私なんかいいなと思いますけど。やっぱり歴史のある町じゃないですか。それで私は、たとえばですよ、その全国的な知名度からいえば、大間々、桐生よりも全然足利市は名前は知られている。

A 氏

日本地図でどこにあるかわかんなかったりね。何県だかわからなかったりして。

吉澤講師

足利も今どうなんですか、合併とか。私は、新聞とか見ると、合併ではなくて、たとえば、桐生と佐野と足利と、ここらが連携して、太田も入れて両毛 5 市の連携があって・・・。どういうわけだかしりませんけど、みどり市だけは、離されているですよ。

B 氏

みどり市の場合は、元々大間々を中心として桐生市に合併したかったんだよ。そしたら、桐生の市長が、反対して、だめにしたわけだ。だから、事情はかなり違う。

C 氏

みどり市は「両毛広域都市圏」の整備推進には入っている。

B 氏

それは広域推進に入っていて。両毛 5 市というか、6 市には入れてないんだよ。なんか、ちょっとわかりにくいね。

吉澤氏

そうなんすね。今度、商工会も、大間々町商工会なんです。今度やっぱり「みどり市商工会」になりそうな話なんです。それで、この前、大間の人たちが来て、「じゃ、我々も今度『きみどり市』かなあ」なんて。「きみどり商工会か」と冗談で言ってたんです。だから、今度名前が変わっちゃうと、大間とつなげるのが・・・

C 氏

難しいねえ。

B 氏

だから正式にいうと、みどり市大間々町商工会なんだ。商号はどういう形でも構わないということになっているですよ。

A 氏

合併したときの名前をどうするかという問題は日本中であって、さくらとかみどりはある。

C 氏

赤城の南面っていうのが段々開発されて少しずつ変わってますよね。あの「赤城の南面」とか、それから「足尾に行く途中」とか、やりようによっては、すごく可能性はある。

吉澤講師

この前、私初めて気づいたんですけど、みどり市の隣が日光市だったんです。車で走ってるとき、「あ、そうだ」と思って、足尾が日光市に合併になったわけですね。日光市ってもともと世界遺産を持ってらっしゃるじゃないですか。

この名前っていうか、編成が変わったにしても、一応ね、隣の市がもう世界遺産の市になったわけなんで。みどり市としては、大間々としてはありがたい限りなんですけどね。

D 氏

あんまり外に対する発信がないんじゃないですかね。今の大間のまぐろをね、我々がここで食べようと思っても食べられないですよね。売ってないですからね。だからもし、宣伝してもらったら買いにいきますよ。

B 氏

だって、大間に行くの大変だ。大間々だと行ける。

吉澤講師

そうですね。ありがとうございます。

私のところ、「大間のまんま」っていう店なんです。名前の由来っていうのは、大間のまんまみたいな。「そのまんま」とあと、「食べるまんま」。それでつけたんですけど、一応ここ 1 号館です。それなんで、いつか 2 号館とか。3 号館みたいな形で、シリーズで。

B 氏

いいね、今、黒壁が 20 号館ぐらいある。

A 氏

いいですね。でも、あんまり無理して投資しても難しいですよね。

B 氏

むしろ 1 号館だけで終わってもいいから、とりあえず、1 号館だけ。

吉澤講師

そう、とりあえずとりあえずですね。つけさしてもらっています。

６）足利を顧みて、大間々を考える

A 氏

ほんとに、足利ってすごく恵まれてるんですよね。名前も売れているし。

やっぱり 15 万の人口があるってことはすごく大きい。それでみんな、住民は文句ばかりいってる、ということなんですよ。比べちゃいけないんだけど、人口 2 万や 3 万の市町に比べたら、ここは立派なもんですよ。もっと小さなところが、どんなに苦労してるかという感覚は、やっぱ足利だとピンとこないとこ思いますね。

B 氏

だけどある意味じゃ、大間々だってそんなに、限界村っていう域じゃないよね。ちゃんと商売成り立っているんだから。しかもあそこの場合、1 本の道筋ってこともある。だからやっぱり豊かだ。桐生と、昔、江戸時代の初期には大間々の内立のほうが中心だった。桐生とはほんとはライバルみたいなの。

吉澤講師

大間々はね、最後の、最後まで残った山田郡だったんですよね。

B 氏

うちの女房も山田郡。荒金っていうとこでね。

里矢場村っていうの足利と合併になった。

A 氏

一気にローカルな話に、郡の中心だったんですね。だから、最後まで残った。ということですね。

B 氏

郡の中心は、もともと桐生町だった。それが桐生市になった、まとまって。そして中心の中心が今、大間々なったわけですね。

司会

なんていうのかな、町おこしっていうことといっても、ほんとにそれぞれの事情が違ってて、こうやってやったらうまくいくなんてことは、全然なくて。やっぱり一生懸命で。ある程度おもしろがってやる人がいると続いてるということだけは、なんとなくこう数年やってきてわかりましたね。やっぱりもっと楽しんで、あんまり肩肘張らずに。軽いノリでやってくっていうこと、大事なんでしょうね。

C 氏

突然だけどね、学生さん、そろそろの卒論のテーマを考えてごらん。何がありますか。いきなり振られて。もう来るのがいやだなんていわないで。もう卒論も決まっているの。

E 氏

はい、方向性は。

A 氏

発表の事は、みんな言ってありますから。大丈夫です。

E 氏

意外と、なんかこうイベントとかお祭りとかやるのには、イメージっていうか、目標みたいなものが実はあって、そこから人が集まってやるのかなって思っていたんですけど。お話を伺いながら、その名前が近かっただけとか、割と軽いノリでつくった部分が意外と大きい、盛況なったりとか、有名になったりとか。ちょっと、イベントの仕方のイメージが変わりましたね。

A 氏

やっちゃえばいいんだよね。

吉澤講師

やっちゃえば。そうですね。

B 氏

足工大の学園祭のが大変。いろいろ出てきてやるんだけど。そうじゃなくて、もうほんとにやっちゃうっていうのが大事。

7）新しい IT を武器に

吉澤講師

そうそう。やってるとね、今回、変わった方が来ました。大間々高校、唯一みどり市にある高校なんですけど。その大間々高校の生徒さんと先生が、直近の解体ショーの取材に来たんです。わざわざファックスで正式に依頼が来たんです。商工会のほうに。そしたら、

大間々で変わったことをやってるんで、ちょっと少し勉強さしてほしいなってことで、来たんですけど。結局、我々なんか、勉強も何も、やってて、酒飲んでるだけだから、そんなんですよって話で。でも、生徒さんたち、やっぱり若い方って見る目が違いますね。何が違うかっていうと、もう一言でいうと、目が輝いてますね。透き通った目でこう見られて。

我々も隠さず全部教えるんですけれども。「こんなんでいいんですか」といったら、「いや、これが聞きたかったんですよ」みたいな話で。それで生徒さん今 Facebook、ご存知だと思いますけどね。その Facebook で、今、私も結構やってるほうなんです。

それで、今度知り合いになったりして。それでまた輪が広がったりしてですね。Facebook、意外とこれ、仕事でもそうですけれど、便利なメリットのあるものになると思います。デメリットも当然あると思うんですけど、メリットのほうが多いと思うんで。これはぜひ生かしたほうがいいかなと思いますね。

とえば、タイムセールじゃないけども、お店やってる人だったら、今これどうしても売りたいんだけれど、て話で出すとばばばって売れますね。私、これは便利だなと思ったのが、昨年秋のイベントが中止になってしまったんですよ。台風がちょうど来るっていうんで。「はねたきフェスタ」という毎年やっている、商工会主催の大きな行事、それが中止になってしまった。そのとき私は、「大間々ラーメン」を出そうと思って、300 食仕入れたんですね。ちなみに西山製麺という札幌じゃ有名な麺だったんですけど。

弱ったなと思って。Facebook に出してみたんですよ。そうしたら、あれよあれよという間に、全部 300 食は売れてしまって、今度は足りない騒ぎになっちゃって。イベント中止になったのに、その麺が、欲しいっていうことに Facebook でなっちゃった。

A 氏

それみんな、近在の人ですか。

吉澤講師

近所の人が俺も買うと、Facebook のメリットっていうのは、やっぱり顔見知りっていうか。知ってる人っていうのが基本なんですよ。で、知らない人も、なかにはこう、友だちなるってこともあるんですけども、ま、それは、自分なんかは全然受け入れちゃうんですけれども。全く、なんていうんですかね、縁がないわけじゃないので。そういうので、「困ったよ」なんて出すと、助けてくれる。

A 氏

ちょっと感覚的には信じられない。

B 氏

普通にやってて Facebook に出したって売れないけど、「困ったよ」って言って売ったから、逆に売れたんですね。ただコマーシャルやっても、Facebook で売りたいよって言っても、たぶん売れない。

A 氏

今おっしゃったように、確かに使い方としては武器になりますね、おっきな。

C 氏

やっぱり年代の差が。私はなかなかね、勇気が出ない。

吉澤講師

Facebook の目的っていうのがよくできてて。あれは、「個人情報を曝しましょう」というところなんですね。

B 氏

自分の情報をまず出さないといけないんですね。

A 氏

本音ですね。

吉澤氏

そうそう。出すから、結構本音で出してる。逆に「本音を知られちゃうといやだ」っていう人はできないかもしれないです。でも、結構自分なんか意外と、オープンにできちゃうほうだから、別にいいよとなる。

B 氏

それは Twitter と圧倒的に違うとこだよね。

吉澤講師

違いますね。そういう意味で、「困ったなあ」みたいに出すと、「じゃあ、私買いますよ」なんて。

A 氏

ほんとに、新しい地域のコミュニケーション手段になっているんですね、現実的に。

B 氏

どのくらい実際に、Facebook 使っているってのは、非常にわかりにくいけど。でもかなりの人数が Facebook 使ってる。LINE はもっと多い。

吉澤講師

もう、ほんとに LINE 持ってない人のほうが少ないぐらいですね。スマホとセットみたいなもんで、しかも、普通のガラケーでも、アプリはあるんですよ、微妙なやつがね。使い勝手悪いですけど。

B 氏

こういうのを使ってます、今。

吉澤講師

でも一番それがね、電波が入ります。

A 氏

やっぱり世代として少し、やっぱり 1 回り違うと大きいですね。

C 氏

もう、引退しなきゃだめだなあ。こういう仕事できないね。自分を曝すってのは、だいたいやだからね。

A 氏

それが、やっぱ世代の一つ、壁があるんですよね。」

B 氏

論文書くのは平気だけど、書けるけど。

素は書けない。出せない。

C 氏

そういうとね、最近思いますよ。町づくりなんかやっている我々は資格ないなと。

司会

でも、確かに街コンだとか、そういう動きのある人はやっぱり世代的には 30 代から 40 代の人で。今みたいにある程度自分を出すことに対して、ためらわない。だから人が集まるんですよね。そこに。

C 氏

我々の年代でも、好きな人もいてね。

B 氏

よくあんなに、出すなと思うの、いっぱい、いるよ。

A 氏

だから、その感覚がもう古いわけですよね。それは世代のギャップだから。やっぱり次の町おこしってのは、若い世代、Facebook を使いこなす世代にあるんですね。

C 氏

インターネット通販なんでやんないんですかなんて言われそうだから。あんなもん、やる気がしないよ。

吉澤講師

でもそれはあるかもしれない。Facebook とかで、お店とかで通販もできなくはないんですよ。今度、それにした途端、全然だめになってか、そういうのもあるみたいですね。

A 氏

そういうビジネスに、持ってかれると、いやがられますよね。

B 氏

困ったから助けてよっていうのは結構、楽天に入っちゃったら、もうだめ。

A 氏

それは違う、完璧なビジネスですね。だから、そもそも NPO 自体がそういうビジネスと個人とのあいだぐらいに存在するためにあるわけだから、町づくりを、こう、NPO がやるというのは実に正しい姿。

吉澤講師

でも、すごいと思いますよ。みどり市には、私が知ってる限りには、そういう NPO は笠懸のほうに、「鹿田山を守る会」とかそういう NPO とかいくつかあるんぐらいで、私も細かくは知らないんですけど。すいません、勉強不足なんですけど。そんなになかったと思います。

司会

最後はエール交換ということで、ぜひがばっていただきたい、ということで。締めは、北川副会長にいつもの締めを。

北川副会長

ほんとにお忙しいなか、貴重なお時間頂戴きました、誠にありがとうございました。もう今年で 6 回目ということで、この周辺の町づくりに携わる人たちのお話を伺ってきて、そのたびにいろいろ感激を受けたり、それから、考えを新たにする機会、本日もまた、目から鱗のような感じがいたしました。

我々がどうしても年齢的に、まず考えて、プランを練って、それからスタートするというようなことからなかなか脱却できないんですけども。今日お話を伺って、まず走れと。で、走りながら考えろと。自ずと道は開かれるんだと、こういうようなお話を伺いまして、そうなのかなあ。というような感じも受けました。

もう年齢的に走ることも困難になって参りましたけど、少し若手を刺激して、そのような人材を育て上げるべく、そちらのほうで努力したいと思います。本日はどうも

ありがとうございました。

吉澤講師

　ありがとうございます。

司会

　時間になりましたんでお開きにしたいと思います。ほんと、どうもありがとうございました。

吉澤講師

　ありがとうございます。

地域と共に発展するために
～大間々町商工会青年部の活動を通して～

大間々町商工会
前青年部長　吉澤正樹

経　歴

- 1971年　みどり市大間々町桐原に生まれる
- 1990年　群馬県立桐生工業高等学校機械科卒業
- 1994年　日本大学生産工学部機械工学科卒業
  株式会社ピーエス三菱入社
- 1995年　同社九州支店へ出向
  株式会社ピーエス三菱　退社
- 1996年　有限会社メジャー(旧吉沢商会)　入社
- 1999年　消防団入団　　商工会青年部入団
  吉沢商会から有限会社メジャーへ組織変更

- 1999年　結婚
- 2000年　㈲メジャー　代表取締役に就任
- 2010年　青森県下北郡大間町へ旅行
- 2011年　みどり市石原市長と大間町表敬訪問
  東日本大震災　支援
  商工会青年部長に就任
- 2012年　大間のマグロ解体ショー開催
- 2014年　青森県大間町アンテナショップ
  『大間のまんま』 開店
  現在に至る

幼少期

- 野球少年を目指す･･･が挫折。
- 小5まで家族5人4.5坪の町営住宅で暮らす。当時恥ずかしくて玄関から帰れなかった。
- 家にいることが嫌だった。外で遊ぶことが大好き。
- 機械が大好きでよく分解･組み立てをしていた。
- 理科授業で懐中電灯を作る。全4回で組立てるところを1回目で作ってしまい、先生に注意された。
- でも、そのとき、誰よりも早く完成したことが何よりもうれしく感じた。　変わり者！？

赤城の山奥であわや遭難

- 小学校6年のとき赤城山南面を5段切り替えのチャリで登る。(ほとんど手押し！)
- らく～な帰り道のはずが、間違って北面道路を一気に下ってしまった(涙)
- 当時の沼田大間々線は砂利道。自転車で根利はきつかった。途中で足がつってしまい、近くを通りかかったトラックのおじさんに助けられる。
- 人生の辛さを経験。根利の小林きくじさんに感謝！

人生のターニングポイント

1　株式会社 ピーエス三菱　退社

2　商工会青年部へ入部。そこで学んだこととは･･･

3　大間々で大間のまぐろ？

ピーエス三菱の退社理由

- 原子力発電所出向命令 （九州玄海）
- 実家の稼業である吉沢商会が看板を下ろす!?

ピーエス三菱ってどんな会社？
　プレストレストコンクリートの略。
　橋梁　高速道路　滑走路　原子力発電所
　圧力ドーム　貯水塔　等の施工。

吉沢商会入社後わかった事実

- 仕入先から買掛金の督促。
- 支払わなければ商品を出荷しません！
- 商工会を通して金融公庫からの借り入れ。保証人になりマイナスからのスタート！
- 若社長？馬鹿社長？といわれて。

さらに地元へどっぷり漬かる

- 大間々祇園祭りに参加、３日間飲みっぱなし。
- 伝統行事の神馬と駆ける。
- 地元消防団入団。
- 大間々町商工会青年部入部。

黒壁スクエアの笹原さんとの出会い

- 商工会青年部の研修旅行で滋賀県彦根、長浜へ
- 「黒壁スクエア」代表笹原司朗さんの心に響く講話を聞き、目から鱗が落ちた
- そこで教えてもらったことは・・・

祭りとは

- 祭りとイベントの違いは？
- 祭りもイベントも「**祈り**」があるかないかで全く違うものになる。
- 祈りがあるイベントは祭り。祈りがない祭りはただのイベント。

商工会青年部事業の紹介

車馬駄馬DO　地域活性化を目指して

ブロック野球大会・餅つき　交流事業

青年部主張大会・全国絆事業

青森県下北郡大間町と交流

- 大間のマグロ祭りへ参加。そこでマグロ解体ショーを見て虜になった。

なぜ大間と交流？

- 「大間」と「大間々」の町名が似ているだけでなく、いろいろな好条件がそろっていた。
- 今から4年前年、全国の高速道においてETCを利用すると休日1000円で乗り放題という制度があった。
- 長距離を旅するには打ってつけだった。そこでひらめいた。せっかく高速道を1000円でどこでも行けるのだから最大限に有効利用をしない手はない。

- 早速インターネットで最北端を検索してみると「大間のマグロ祭り」がヒットした。
- 何とも言えない美味そうなマグロの切り身の写真が食欲を掻き立てた。もうここしかないと思った。
- 昔から善は急げと言うのですぐに大間の商工会へ連絡をした。
- 「こちら大間々の商工会青年部と申します。マグロ祭りへ行きたいのですがパンフレットをいただけますか？」と聞くと丁寧に「すぐに資料をお送ります」と優しく応対してくれた。さらに大間のおもてなしはそれだけではなかった！！

- 「こちらの青年部長に連絡をつけますよ。せっかく来るならば青年部同士で一杯やったらどうですか」と初めてなのにここまでしてくれる対応にはビックリした。
- やはり大間をはじめ東北地方の人たちは心が温かいなあと改めて思った。
- それがきっかけとなって片道約十時間に及ぶ780kmの長旅が始まった。

初めての本州最北端大間2010

大間超マグロ祭り2012　本州最北端

交流がはじまった矢先の東日本大震災

- あの震災のとき、青森の青年部の人たちが津波にやられてしまうのではないかと不安に襲われた。
- ここでくじけてはいけない・・・・
  きっと何かできるはず・・・・

大間へ緊急物資送付　少なくてすみません！

震災直後に買出しに行くもほとんど品切れ状態

内　容		
カップ麺	96	食分
湯たんぽ	4	個
カイロ	40	枚分
ウェットテッシュ	5	缶
懐中電気	1	本
乾電池	20	本

震災の瓦礫撤去で仙台へ向かう

青森の大間は津波の被害はほとんどなかった。ただ陸の孤島となってしまい物資が届かない状況。

仙台の若林区にいる知り合いの地域が壊滅的な被害にあったことを知った。ボランティアの受付は拒否されたが何か手伝えることがあるはずと仙台へ突っ走る。

東日本大震災で深まった絆

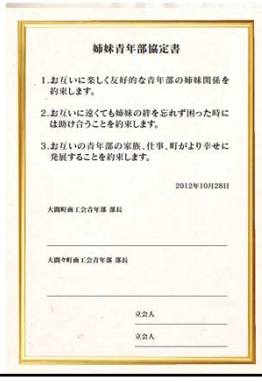
- これからはお互いに助け合おう
- 大間町商工会青年部と姉妹青年部締結。TV「報道Nスタ」で特番。2日間密着取材。
- 青森の人たちをはじめ、東北の人は皆心が温かい。

群馬県で大間のマグロ解体ショーをやろうじゃないか！！

この輪をもっともっと広げたい！！

まずは幼稚園から！！

ついに群馬で念願の解体ショー！！



現在

- 商工会青年部賛助部員。経済産業省の補助を受け、2月22日青森県大間町のアンテナショップ『大間のまんま 1号館』をオープンする。

みどり・大間々―青森・大間が交流

マグロ解体 本場の味

両商工会青年部 刺し身振る舞う

マグロの解体ショーに見入る来場者

銀幕に地域の魅力

地元舞台の作品上映

FAO荒井さん講演

食糧を大切にしよう

有限会社メジャーの仕事

- 測量器メンテナンス・販売
- IT機器販売・修理
- ソフトウェア製作販売

群馬県に4社（JSIMA認定工場)

- 測量器の校正
- コリメーターによる校正
- 測るものを計る仕事（検査）
- 許容誤差1kmで±3mm以内
- JSIMA日本測量機器工業会認定工場

測量の豆知識

- 本州四国連絡橋　支柱先端間と基礎間の差は？
- 1径間1991m　高さ297m　として計算
- なんと　93mmも先端間が長い

IT機器部門

- WinXPからの引越し
- Windows　PC修理(ブルースクリーンや起動しないPC)
- 社内ネットワーク・イントラネット構築
- セキュリティ対策

当社の特徴

- 出張料無料
- 万が一修理で直らない場合は無料返却
- 電話による遠隔サポート・相談無料

有限会社 メジャー 企業理念

一. いつも感謝
一. いつもチャレンジ
一. いつも人喜ばせ主義

いきざま

- 遊びがあるからうまくいく
- ピンチはチャンス
- 一期一会

ご静聴ありがとうございました

地域と共に発展するために
～大間々町商工会青年部の活動を通して～

大間々町商工会
前青年部長　吉澤正樹

みんなのとしょかん

一般社団法人　みんなのとしょかん
代表　川端秀明

１．はじめに

司会

26 年度第 2 回の VAN-NOOGA と足工大の共催による公開講座、今日は、「みんなのとしょかん」代表の川端さんにお話をお願いしました。

時間一杯で息せききってきたので、危うく会長の挨拶を忘れてしまうところでした。失礼しました。

中川会長

皆さん、こんばんは。台風も一過ということで、少し落ち着いておりますけども、なんか急に寒くなって、非常に気温の変化があるので、体には十分気を付けていただきたいと思います。

今日は久しぶりに足利に関連するテーマといいますか、川端さんにおいでいただきました。地元の方々がいろいろと支援もされているようですけども。いわゆる本、図書館という内容でお話いただけるということですので、よろしくお願いしたいと思います。

私も本についてはいろいろ関心もあって、一時それらしきことをちょっと、この辺で私の先生の本を預かって、何とかしようと思ったんだけども、結局、何ともできずに、別なところに移しました。

それと最近、古本市をあちこち歩きまわって、本というものと、図書館と、それからそれを必要とする人たちと、どう結びつけるかっていうのは、散々苦労して、いまだに解が見つからないんですけど。川端さんは、いろいろご苦労されて、成功しておられます。どうかいろんなノウハウをお教えいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

司会

よろしくお願いします。

川端講師

改めまして、こんばんは。先ほどご紹介いただきました、一般社団法人「みんなのとしょかん」というのをやっております川端と申します。

生まれは佐野市なんですが、今は足利市の八幡町のほうに居を構えて住んでおります。妻と子ども 2 人と、一家 4 人で足利のほうで暮らしておるんです。そんな人間が今やっている活動の一端ということで、今日は 1 時間ほどお時間をいただきましたので、お話を聞いていただければ大変ありがたいなと思います。

２．「みんなのとしょかん」とは

１）コンセプト

先ほど会長様からお話いただいたなかで、私のほうで「図書館を作っている」ということをよく言っていただくんですが。一応、現在までに作らせていただいた「図書館」は、44 館ございます。北は北海道から、南はそんなに行ってないんですけど、名古屋のほう、和歌山まで。現在は瀬戸内海のとある小島のほうに作りたいというお話をいただいております。

基本的には過疎の地域とか、人口が減少

する、あとコミュニティを形成するのがなかなか難しいという場所に対して、人が集まる場所としての「図書館」ですから、何か知の充足というよりも、いわゆるコミュニティとしての「図書館」というものをイメージしています。

そんな訳ですので、この写真は被災地の「図書館」ですが、皆さんが思われてるイメージとはちょっと別の、子どもが寝ていたり、託児所があったり、レストランがあったり、なかには学童保育をやっていたりですとか。あとはカルチャー教室がそこで開かれていたりとか・・。

基本的に皆さんがイメージされる、たとえば県立の図書館というような、静かな環境で本を読むというのとは少し違う場所を作っております。どういうふうに作るかというのは、基本的に地域の方が決めています。ある程度の権限とかルールを決めていく。そのなかで「図書館」という１つのツールを提供しているということになります。そういったこともあって、ひらがなで「としょかん」と表しているんです。

人がつながることが難しい都市部にも作っています。それから被災地。もともと活動を始めたのが、震災を機に、被災地ではコミュニティが本当に寸断されましたので、避難所であるとか仮設住宅、そういった場所です。自治会も崩壊して、人のつながりっていうのも、またゼロになった、管理する人もいない。そういうときに、誰もが自由に集まることができる場を作ろう。そのなかで「コミュニティというものを改めて見直していきましょう」という活動をメインとして行っています。

それなので、よく「公民館じゃないか」とか、「集まりだ」とかっていわれるんですけど、「図書館」という形を作っておいたほうがやりやすいと思う部分もあって、行っています。

２）活動範囲

もちろん、「図書館」を作って終わりということじゃなくて、そこのなかで様々なアクションを行っております。それは後段でご説明させていただきたいと思います。現在は足利のほうでやらせていただくのと、センター館としては石巻市のほうにあります。そちらのほうも館長がおります。

一応、被災地のほうの「図書館」は 13 ヵ所あるのですが、それぞれ館長や責任者がおりまして、チーム制で管理をしてもらっております。それもあとでご紹介させていただきたいと思います。

私どもがやる活動「みんなのとしょかん」は、ここに来ていただいている方の中にも、その「図書館」の場所で支援活動していただいた方もいらっしゃるんですが、基本的に被災地、過疎地への「図書館」の設置というところから始まっております。

ここに書いてあるのは 13 ヵ所ですが、それ以外にも、北海道の夕張市、先般、財政破綻して、管理できないということで、いわゆる図書館がなくってしまったんですね。全部で 12 校あった学校も閉校しまして、小学校１校、中学校１校のみになってしまった。ただ、夕張市は東京 23 区より広いなかに１校しかないということなので、閉校となった学校を活用して、「図書館を作っていこう」ということもさせてもらっています。

３）「みんなのとしょかん」の作り方

写真にあるようにこんな感じで作っています。別に何てことはないと思われるでしょうが、実はここの設置に動いている私ど

も「みんなのとしょかん」の事務局スタッフは、3 名だけなんです。設置に関して当日ボランティアさんを募るのですが、だいたい少ないところで 30 名ぐらい、多いところでは 200 名ぐらいです。「ボランティアが集まって、基本的に『図書館』を 1 日で作る」というのが私どものコンセプトとなっています。

ちなみにここ、「夕張のとしょかん」設置活動のとき、ボランティアを募ったところ、半分の方が宮城県、被災地の方だったんです。「自分たちに『図書館』を作っていただいた地域の方が、新しく『図書館』を作るんだったらって、お返しがしたい」ということで、わざわざフェリーに乗って、「図書館」の設置を手伝いに来てくださったり、恩送りじゃないですけど、そういう循環も活動を通しながら、させてもらっております。

被災地や過疎地で「図書館」を作るなかで、先ほども言ったんですが、私どもが一番大事にしているのは、箱物を作ることではなく、その「図書館を作るプロセス」を一番大事にしております。

ですので、基本的に 1 つの「図書館」を作るのに最短でも 3 ヵ月、最長で半年くらいの時間をかけて作らせてもらっています。このプロセスを必ず通します。裏を返すとこれを通せないところには、私どもは今、「図書館」は作っていないのです。

箱を作るのが目的じゃなくて、コミュニティを作っていくのが目的ですので、基本的にはこういうスタイルになります。

まずは、地域から声を上げてもらうことを最初に行います。私どもが行って、「過疎だからこういう図書館作りますけど、どうですか」というのは一切しないです。「こういうものって作れますか」という相談をいただいてからお伺いする。

必ず地域の方から声を上げてもらう。最初は 1 人でも構いません。そのときに、どこら辺に建てられるか、ゴールとしての日程を決めていきたい。それと同時にその人が 1 人でやるんじゃなくて、チームを作れるかというのも大事なことなので、何人か仲間がいるかということも同時に調べます。

そのなかで仲間が決まったら、「どんな図書館にしたいですか」ということを話し合います。ゴールを共有しないと、いい場所ってできないですから。あくまでも、「図書館」と言っても私どもの「図書館」は、外壁も違えば用意される本も、開館時間も閉館時間も全部違う。それは地域の方と一緒に決めます。

たとえば、足利なら足利に合った「図書館」があるはずなんですね。文化を大切にしたいとか、こういう本があったほうがいいとか。足利は神社、仏閣が 200 以上あるわけだから、そういったものに特化したものがあってもいいんじゃないかとか。

そういう地域の方の声を反映して、「図書館」を作っていきます。あと、基本的にそれにいくらぐらいかかるかという資金集めが一番重要になりますので、私どもでは「クラウドファンディング」や企業さん、いろんな方にお願いをして資金を集めるということを行います。しかし、基本的に資金の 10%から 15%は、地域の方に捻出をしていただいています。

＊クラウドファンディング（Crowdfunding）とは、不特定多数の人が通常インターネット経由で他の人々や組織に財源の提供や協力などを行うことを指す、群衆（crowd）と資金調達（funding）を組み合わせた造語である。ソーシャルファンディングとも呼ばれる。http://ja.wikipedia.org/wiki/

お願いをして全部ただで作るということは、私どもは一切やらない。「自己資金を1円でもいいので出してください」という。被災地でも同じようにやっていました。若干でもお金を出していただかないと、大切にしてくれないですね。

そういったこともあって、地域で1人じゃなくて、チームを作っていただいて、どういうチームだったら管理できるか。どういうふうに無理なくできるかという条件をまず見ます。

そして場所を決めたときに、設置に向けて「この日に作りますので、地域の方にどうか力を貸してください」とお願いしてボランティアを募りまして、事前に準備はするんですけど、基本的に「図書館」を1日で作ります。

建物の搬入から、本の並びかえ、システムの導入までをすべてを1日で完成させていくというのが、基本的なスタイルになります。

地域の方を巻き込むこと、ゴールを共有することで、「1日で作る」とボランティアさんが手伝いに行って、完成形が見える。そうすると、自分たちの力でこういうのができたと達成感を味わえる。

私も被災地とかいろんなところの泥のかきだしとか行たんですけど、終わりが見えないボランティアは結構つらいんです。自分の力が役に立てたのかがわからないと継続が難しいので、可能な限りボランティアの方には達成感を味わっていただきたいと思っています。

すると、リピーターになっていただく方も多く、「図書館」を作るたびに累積で20回以上、手伝いに来ているボランティアさんもいてくださり、そういった方々の力で「図書館」が成り立ってます。

4）「KaBOOM！（カブーム！）」のノウハウ

ちなみにこのプロセスは、アメリカに「カブーム！」という NPO があります。公園を作っている NPO さんです。

もともとは、向こうは公園が少ないので、あるときに廃車置場で遊んでいた子どもたちが、誤って車に落っこちてしまってドアが閉まり、出られなくなって亡くなってしまった。それを見た方が、「じゃあ公園作りをやろう」ということで、その方がこういうスタイルでやっているんです。

一番素晴らしいのは「カブーム！」さんが、10年間で2,000の公園を作ったことです。さらに素晴らしいのは、その方々はこういうプロセスを全部公開しているんです。ホームページ等で、「ここはこういうふうにやった方がいいですよ」というふうにボランティアさんの力を募ることで、全米にこの10年間で1万2000の公園が作られて、現在では全米最大の遊具器具の購入団体になっているのです。

＊カブームの公園設置数については数え片により諸説があります．因みに，オンライン上に公開された、カブーム!秘伝の公園建設の「レシピ」は多くの人に活用され、2012 年夏の時点までに「8 万 9000 もの公園建設に寄与した」とホームページに記載されています(カブームが直接関わって建設された公園は約 2100 件)。
http://gendai.ismedia.jp/articles/-/33324?page=4

我々も「カブーム！」のプロセスとほぼ一緒のものを採用しています。やはりプロセスを大事にしていきたい。箱物を作ることではなくて、それを作っていく過程に地域の方を一緒に巻き込んでいくことで、私どもは「コミュニティを作る」という活動を行っていると言えると思います。

３．宮城県山元町の「みんのとしょかん」

１）「みんなのとしょかん」のできるまで

じゃあ具体的な例を写真でご紹介していきます。ここは宮城県の山元町という場所です。人口はもともと 16,500 人だったんですが、津波で 700 名の方が亡くなりまして、人口の移動もあり、現在は 13,500 人ということになりました。

移住する方のほとんどが働き盛りの世代ですので、一気に高齢化率が進んでしまいまして、人口の流出率としては岩手県の陸前高田市に次いで 2 位。ちなみに 3 位は放射能の重点調査区域に指定されている福島県新地町です。

山元町の主たる産業はリンゴやイチゴだったんですけど、現在はそれもちょっと厳しいものとなっているということです。

写真のここは駅ですけど、廃線になっています。津波で駅が流されてしまい、この駅が 2 キロ内陸に移ることになったんです。これをイメージするには、「JR の足利駅が渡良瀬川の氾濫で流されて、2 キロ南に行ったら、今の駅の辺はどうなりますか」ということを考えてください。町ではなくなるんです。それが今、この周辺地域で起こっている。

「どうしよう」という相談をいただきました。「人が自由に集まることができる場所を作ろう」ということで、「図書館」というお話をいただきました。流れとしては、先ほどと一緒です。

まずは声を上げていただくということで、この方がお声をかけていただいた砂子さんです。ご説明をさせていただき、「協力してもらえる方を集められますか」とお願いをしたところ、多くの方に集まっていただいて、集まるなかでどんな図書館にしたいかも話し合われました。

写真では、後ろに祭壇があるので、お葬式っぽいんですけど、お寺さんなんですね。公民館も全部流されているので、人が集まる場所がお寺しかない。そういう状態で始まりました。どんな図書館にしたいかというのを話し合い、場所も決めて、日程も決めて、予算も決めました。

とりあえず場所決まりましたので、1 日で作るには、地ならしとか下準備はもちろんしておきます。土地は、もとは家が建っていたんですけど、津波で流されて更地になった土地を無償貸与していただくということで話をつけて、地域の方に準備をしてもらいました。

当日までに必要な本棚とかは、もちろん準備をしておくのですが、こういったものは企業協賛をいただきまして、これは足利の企業さんですね。うちの事務所の前に納品してもらっています。多くの方や企業の協賛いただきながらやっています。

現在で「図書館」には 224 社の企業協賛をいただいております。そういった力を集めて「図書館」を作るのですが、本当にちっちゃい「図書館」です。

山元町の場合は、「管理できるレベルを決めましょう。要は大きい箱じゃなくて、自分たちでどれぐらいだったら管理できますか」という相談から始まりました。「無理はしないで、確実にできるものから始めましょう」というと、「じゃあこれぐらいの量で、本はこの量で、これぐらいのスペースがあるといいね」ということも決まります。

ここは 8 坪だから 16 畳までと大きさも決まっていきます。ちょっとデザインも工夫があるんです。写真のように、モチーフとしてリンゴとイチゴが飾られています。これも地域の方のデザインで、地元の人からすると地域のトレードマークはリンゴと

イチゴなのです。山元町らしい図書館にしたいということで、リンゴとイチゴをモチーフとしたオリジナルデザインということです。

当日、多くのボランティアの方に参加していただいて、本の詰め込み等を行いまして、図書館が完成しました。私どもが作るのは、しょせんこれぐらいなんです。このちっちゃいコンテナと、本棚と本。

ただし、管理システムと管理のマニュアルは作ります。

２）自立し成長する「としょかん」

どういうふうになっていくかをちょっと見ていただきたいんですけど、「図書館」ができれば利用者が来るんですが、初めは、周囲も更地で何もない状態です。こういう状態を見て、少しずつ利用していく中で「もっと賑やかにしたい」とか、いろんな方の意見も集まり、まず、花壇を作ってくれる方が現れました。

今はネギが植わっているんです。野菜のほうがいいだろうと、地域の方の家庭菜園の場に変わってきました。アーティストさんも来たり、「絵があったほうがいいだろう」と絵を贈ってくださる方もできます。

そして、ここに子どもがいっぱい集まるようになった。でも遊具がないんですね。公園も全部流されているので、遊具を作ろうということで、これは「イグネ」といいます。防風林がありますが、津波で全部塩をかぶって、塩害で立ち枯れているんです。そういうイグネを伐採した木材がいっぱいある。そういうものを使って、地元の方がアスレチックを作ってくれた。それだけでは寂しいから彩色しました。この隣に、ビニールハウスができました。

「図書館」は、先ほども言いましたように 8 坪だったんです。「これではちっちゃい。みんながもうちょっと人が集まれて、カルチャー教室とかもやりたいよね」ということになって、地域の人がお金を出し合ってビニールハウスを作る。そこに札幌の「じいたん基金」の方も協賛していただいて、「じいたんドーム」というものを作っていただけるようになりました。

そして現在は、もともと何もなかったところに、人工芝が植えられて、看板も作っていただいて、花壇を作っていただいて、滑り台とかの遊具も全部付いています。

私どもは一切これにはタッチしてないのです。地域の方が自主的にやっていくんです。

この写真は開館中となっているんですけど、ここの開館時間は 9 時から 5 時だったのが、現在は 7 時半から 6 時になっています。なぜかというと、目の前にバス停があるんですが、この辺にあった学校も全部なくなってしまったので、この地域の子どもたちは、バスを使ってちょっと内陸の小学校に行くんです。冬の寒いときにそこで待っている。7 時 40 分、50 分にバスが来るので、それまでの間、寒いから図書館のなかで待っていて本を読めるように、暖を取れるようにしようということで、地元の方が開館時間を変えたんです。子どもたちは、図書館のなかで本を読んで時間を潰したら、バスが来る。なかには本を借りていく子もいる。バスに乗っての通学ですから、帰ってくる場所にもなっているんです。

こういう施設があるので、似顔絵教室とかいろんなものにいろんな方が参加しています。ちなみにここで、片倉先輩には「蕎麦教室」をやっていただきました。その節はありがとうございました。その頃には、たぶんこの施設もなかったと思います。

地元の方がどんどん意見を出し合って、自分たちのものだという意識がすごく強いんです。そういう意識があることによって、周辺のものもどんどん立ち上がる。現在は、ここに鉄骨の2階建ての建物を作っています。いわゆる塔ですけど、避難所です。「津波が来たときにここは低いので、逃げる場所がない。だったら高いものを作っておこう」ということです。みんながここに集まっているからです。公民館もこの辺にはないですから、みんながわかる場所ということになって、そういうものも作られる。行政とも連携して、できるようになりました。

私どもが作るものは、全体の0.01ぐらいです。0からは作れないですけど、それを1にするまでが私たちの仕事だと思っています。地域の方の町を元気にしようと思う力で、1が2になって、3になって、5になっていって、今の形になっていきます。

山元町には、もともと町の図書館はないのです。本屋もないです。教科書を売るだけの書店以外、この町にはありません。この「図書館」が、本を集めたりする拠点に今はなってくれました。

この写真の真ん中の方が館長さんをやっている方です。この方の発案で、絵本や児童書を、近隣の病院に30冊、50冊と置いて、児童文庫をそこでも展開をしている。「みんなのとしょかん」の出張図書館です。それも、地域の方が自分たちでアイデアを出して作っています。

これが図書館を作っていく1つのモデルです。被災地や過疎地でやっているモデルです。

４．何故、活動をはじめたか

１）カレーライスとしての地域の図書館

なんでこういういのを作るかっていうと、地域には図書館がある、たぶん、足利でも佐野でもそうですけど、図書館には誰が行ってもいいんですね。私は、もともと佐野なんですけど、実家が旅館をやっていました。旅館でしたので、365日お客さんが来る。旅館といってもちっちゃい宿だったので、自分の部屋というものがなくて、お客さんがいっぱい来ると、自分たちが生活している部屋に食事が並び、食堂になっちゃうんですよ。

私の居場所がなくなるので、ちょっと外に出ていく。お昼時とか、食事時に出ると、友達も同じ食事時なので、行き場がない。そういうときに行っていたのが、実は図書館でした。図書館は、私が行っても別に誰もとがめないですし、1人で行っても気にしない。でも、完全に1人じゃないです。誰かしらいてくれるので、孤独ではない。ただ、孤独ではないけど干渉されることも少ない。

心地良い距離感の場所が、私にとっては図書館だったんです。つまり誰が来てもいい、誰と行っても構わない、誰がいても気にしない場所ってなかなか地域に少ないんです。そういうものがコミュニティにあることによって、皆さんに来ていただけるかなと思っています。

私はよくカレーライスみたいなものと言っています。「何食べる？」と言って「カレー」。カレーの大嫌いな人って少ないんです。とりあえず出しとけば8割方の人は問題ない。

「どこ行きたい」と言っても「カラオケボックス」だとうるさいのが嫌いな人がいる。「映画館」だと好き嫌いが分かれる。「喫茶店」だとお金がかかる。でも「図書館」だったら、嫌いにする人って少ない。そういう場所で、「誰でも来れる場所」がある。

「嫌いな人が余りいない場所」を作っていく。つまり「誰が来ても良い場所」とは、「誰もが等しくいられる場所」。そういったものを地域に作っていくことによって、「みんなが自然と集まれる場所を作る」というのが、私たちがやっている図書館プロジェクトの核の部分となっています。

２）初期の失敗

先ほどの申し上げたのはプロセスの部分です。作るまでのプロセスです。ただ、最初からうまくいっていたわけじゃなくて、最初の図書館はそういうのも考えずに、ただ箱だけを提供しましたので、正直、うまくいきませんでした。

最初に作った図書館は避難所に作ったんです。管理してくれる人が１人いるというのでその人に全部お願いしたら、とっても責任感の強い方で、貸したものが返ってこないからって電話をしようとか、やれ何日に返してくれないとかっていうのを、すごく気に病みすぎて、その人倒れちゃったんです。

避難所に避難している別の方が司書をやってくれていたんですけど、その方も心労で倒れてしまった。これはもう失敗だということで、方針を変えました。

次に建てたのは神社の境内です。「人が集まる場所がないので図書館を作ってくれ」とあるボランティアさん１人に言われたんです。地域の方からじゃなかったんですね。ただ、私どもも、「我々で作れるんだったら」と作りに行きました。しかし、地域の方の協力を得ないまま作ってしまったので、なかなか利用してもらえない上に、地域のやんちゃな高校生ぐらいの子が、居場所がなかったので、だんだん溜まり場にしていっちゃったんですね。

「ちょっと来てくれ」と言われて、「図書館」を開けるとシンナーの袋とか、煙草の吸殻、コンビニの食べかすかが、ぼんぼん置いてある状態でした。神社の方も怖いので、鍵を閉めちゃったんですね。「必要なときだけ開けますから」、こうなるともう使われない。

そういう反省や失敗も踏まえてプロセスが大事なんだということを、正直学んだ、これが本当のとこなんです。ですから、最初からああいうプロセスで図書館を作っていたわけではなくて、試行錯誤で一番いいなというところへたどり着いた。

３）維持することの重要さ

作るまでのプロセスがあっても、もっと考えなくてはいけないことは、「それをどう維持していくか」ということです。「図書館」は作れました。でも「3 年後も 5 年後もそこに図書館があり続けるためには、どうしたらいいですか」という問題を考えなくてはいけないんです。

本当に継続するためには、人の力を集める、参画意識を高めるだけではなくて、もう１つは、経済的に自立できるような仕組みを作らないと本当に元気になる場所にはならないんです。

誰かの支援、誰かの寄付を募っていく。特に東北の被災地というのは、もう被災地と呼ばれないです、もう興味も関心も薄れている。その中で、誰かの支援を募りながら図書館を運営するというは、事実上不可能なんです。いかに経済的に自立させてくいかが、これからのポイントになっていくという厳しい現状があります。

一方、「行政から委託され、行政から補助金をもらいながらやればいいじゃないか」というお話も、いただくんです。そういう

提案を行政の方からもいただいて、実際にそうさせてもらっているところもあるのですが、過疎化が進む地域とか人口減少が進む地域で、「それはこれからも継続可能か」と問われると、ちょっと難しいんじゃないかと思います。これは作った施設を地方が抱えるということですよね。

例としての話ですが、これは平成 26 年度の足利市の予算です。一般会計の歳入は減少しています。26 年度に関しては、足利市の市税、市民の方からいただく税収は、188 億円ぐらいです。それに対していわゆる民生費という、高齢者福祉とか生活保護とか 1 人親家庭の保護とかに当てられる金額は 195 億円です。つまり、税収よりも生活に必要なコストが上がっている。それを賄っているのは、地方交付金や県からのいわゆる補助金です。今後、市税は普通では増えないわけです。

家庭で言えば、お給料は限られていて、減ってくけど、生活に必要なものは増える。そうすると、減らされるのは、文化活動にあてる費用とか、命に関わるものから遠いものが、外されていく。これはもうやむを得ないことです。そっちにも力を入れたいという人がいても、力を入れられない現状が、これからどんどん進行します。

先ほど言った山元町は、高齢化率 48%ですから、もう税収も減っている。ただ今は、復興予算でなんとか賄えますが、復興予算は期限が切れる。今後、文化関連の支出を行政が保障してくれるというものでもないですね。

それでは、「図書館」をなくしていいのか、それは違う。税収が減ってもやっていけるものを作っていかなくてはいけない。これが、私たちの考えです。

今後、誰もが自由に来られる場所が町からなくなる。元気になれる場所もなくなる。そうならないために、「図書館」をどう維持するかということを私たちは考えなくてはいけないと思います。

４）企業との連携

そのなかで、現在進めているのは企業との連携によって「図書館」を作る活動です。商業施設の中にも、設置させてもらっています。

先ほど、被災地で 13 ヵ所を設置と言ったんですが、全部で 44 ヵ所ある内の、たとえば幾つか、場所はちょっと言えないんですが、ショッピングセンター、ショッピングモールに図書館を設置させていただいたり、スーパーマーケットやホームセンターと併設して図書館を作らせていただいているというケースもあります。

ちなみに、スーパーマーケットの場合は本の貸し出し期間を 1 週間にする。ホームセンターの場合は 10 日から 2 週間ですね。買い物の頻度に合わせて、レンタル期間を変えるんです。そうすれば、借りにくることは返しに来ること、来店することですから、「公共的な施設を店舗に付加することで地域密着型の施設をやってみませんか」と呼びかける。「利用者の買い物のリピーター化をしましょう」とか呼びかける。

たとえば、足利の図書館は県立図書館です。市立はないですよね。正直、栃木県としては市に譲りたい。でも、市はコストかかるからいらないとずっとせめぎ合っています。そういう部分のなかで、「じゃあどうすればこういうものが作れるか」と考えていかなくちゃあいけない。

そのときに企業の力は、無視はできない。「企業と利用者と地域にそれぞれ益のある「三方よしの仕組み」として、「図書館」は

どうだろう」というご提案させてもらっています。

もちろん大きな施設だけでなくて、たとえば宮城県の石巻の流留というところでは、コンビニの敷地に「図書館」を作っています。

ショッピングモールとかショッピングセンターは大きな人口がいるから成り立つ。ただ、これから人口が減少していったときに、最少の商業集積とは何かと言うと、コンビニです。日用品が買えて、宅配便が送れて、本が買える。その敷地内に「図書館」というか、小さなものを作らせていただいて、店員さんが管理する。買い物に来た人が、パンとコーヒーを買って、「図書館」でごはん食べながら本を読む。そして、本を借りていく。借りたついでにコンビニを利用して帰っていく。

地域の特徴ある商業施設との連携を図れないかということで、実際にこういうふうに進んでおります。千葉県船橋市のショッピングモールですけど、うちの名前では出していないですけど、イオンさんのほうに設置をさせてもらっております。あとは学童施設内でもやっています。そういう形のものを作っています。

どうしてこんなことをやるかと言うと、これは企業側の問題も大きく内包しています。私も足利で看板やイベントをやっている会社を経営していますから、地方で仕事をしていくことが非常に厳しくなっていると思います。

ほんとうに商品の差別化が難しい。同じ商品がどんどんできて、同じ価格で全部売られる。しかもそういうものはインターネットを使えば、検索で、「価格ドットコム」じゃないですけど、値段はさらに下に行く。つまり価格競争に晒されやすい状況にある。さらに、大手は、どんどん大量仕入れでさらに安い値段で来る。地方の小売店や卸をやっていても、打ち勝つのは難しい。

新しいもの、オリジナルのものを提供できたとしても、すぐに類似品が作られるんですね。商品の寿命っていうのは今までは5年とか7年のものが、今や3年、へたすると 1 年で切れてしまう。ということは、商品開発力が強いところがどんどん勝っていくという現状があります。

５）地域に必要とされる企業とは

だから地方の企業の経営がどんどん厳しくなっている、これは日本中どこでも変わらない。それでも「ここの会社がいい」って言っていただけるにはどうするか。

つまり地域に必要とされる企業というのは、厳しいなかでも伸びています。ただし、先ほど言ったように、地方そのものがどんどん体力を失しなっている。

そうであれば、地域の企業だからこそ、「地域の弱さを補完するような企業になっていくことで、地域に必要な企業になっていきましょう」というのが私どもの考えを実現化しているのが、「図書館」ということです。

そうであれば、社会的なものをやりつつ付加価値を付けましょう。そういうものを付けることによって、「地方オリジナルの企業にしていきましょう。地域につながりがある企業を作っていきましょうよ」ということで提案を行っております。

1 つ事例ということで、ちょっとご紹介したいんですが。

たとえば、写真のようにこういう場所が既にあります。ここは「図書館」を作らせていただいたんですけど、ここはちょっと施設の関係上、こういうふうに分かれてい

ます。全部で 2,200 冊の蔵書だけなんですけど、あとバーコードの管理システムを行っております。ここはちょっと珍しいんですけど、ここにある本は少し変わっていまして、葬儀関係とか相続関係の本を置いています。これは、お隣の佐野市にある「ホクサンさん」という葬儀社さん、仏壇屋さんです。

「仏壇を売っているコーナーで、地域の方が集まりやすい場所を作れないか」というご相談をいただきました。シニアの方が相談に来たりする。でも、葬儀社さんにダイレクトに葬儀の内容の相談っていうのは難しい。「だったら、こういう本が近くにあって、すぐ借りられて、そこで解決できるものだったらそれでいいじゃないですか。あとは当然普通の本もいっぱいありますから、そういった本の貸し借りで、敷居を下げる動きになる」とお話ししました。

今、そんな多くないですけど、だいたい週に 50 冊くらいは借りられるようになっています。だから地域の方が来るようになったんですね。ちなみに、この葬儀関係の本については、佐野市立図書館や県立図書館よりも在庫は豊富にあります。専門図書館としては非常に優秀なものです。

そこの葬儀社さん、「その地域の企業さんの個性を生かした図書館にしていきましょう」ということでやっています。「いろんなもので地域とのつながりを作ることで、販売単価の減少を防ぎましょう」ということでやっています。

６）サポーターズライブラリー

さらにもう１つの働きです。ここの場合は、「サポーターズライブラリー」というシステムを導入してもらっています。あくまでもその企業のなかで、そこに図書館を設置して終わりじゃなくて、その設置費用の一部を児童養護施設とか小児科病棟の書籍の購入費用に充てさせてもらっているんです。

つまり、株式会社ホクサンさんというのは、この図書館を設置することで、自分の地域の方に図書館のを提供するだけじゃなくて、それを運営されてく費用のローテーションも行います。そういう費用が過疎地の小児科病棟とかの支援になります。

「社会貢献性の高いことを行ってます」ということを PR することにもつながっています。こういう「サポーターズライブラリー」というシステムを今では 84 社に導入をしてもらっています。

そういうことによって、これで全部が賄えるかっていうとそんなことはないです。「あくまでも図書館というものを使って、社会貢献度の高い経営を行っています」というイメージを付ける。価格競争だけではなくて、企業の付加価値として図書館を使っていただいています。

７）コーズリレーティッドマーケティング

こういう図書館を作るところもあれば、全然違う形で、皆さんご存じの足利市の企業さんからも協力いただいています。

「アベスポーツ」さんの場合は、図書館を作るのはできませんので、いわゆる「コーズリレーティッドマーケティング」をご存じだかと思います。

＊コーズリレーティッドマーケティングとは、製品の売上によって得た利益の一部を社会に貢献する事業を行っている NGO などの組織に寄付する活動を通して、売上の増加を目指すというマーケテイング手法。企業は社会貢献事業への積極的な姿勢を示すことで、その事業への資金を集めることができ

るだけでなく、企業のイメージ向上やステークホルダーからの評価なども期待でき、NGO などの組織は資金獲得と活動の認知を高めることが期待できる。

http://m-words.jp/w/

たとえば、ボルビックの水を 1ℓ 買うと購入者は 10ℓ の水をアフリカに送ることができる。これを使ってボルビックさんのところは、売上が 160%になっています。あとは自由の女神キャンペーンのアメリカンエクスプレスさん。カードの会員になって使うと、その分の 1 ドルが自由の女神の修復費用に充てられますというものです。その結果、会員数が 140%に増大した。

これが、いわゆるコーズリレーティッドマーケティングです。コーズマーケティング、要はあくまでもビジネスの、マーケティングの手法として、社会貢献度の高いことを取り入れましょうということなんです。

アベスポーツさんの場合は、既にスポーツコーナーも設けていますので、「各地域のスポーツコーナーを支援する活動」をしました。そういうのをやっていると、テレビの取材も来ていただき、新聞にも掲載されました。このときは、「スイム」水泳のフェアをやったんですが、売り上げが昨年対で 108%になったそうです。

ここでの売り上げの 1%を「みんなのとしょかん」に寄付をする訳ですけど、私たちはそのお金を使って、被災地で野球道具が流されてしまった中学校があるので、ボールなどの野球用品をそこのコミュニティ支援に使いましたが、これもアベスポーツさんで買っている。差額の利益で「図書館」の維持費用も賄えました。アベスポーツさんからすれば、「社会貢献度の高い活動を行っています」という PR ができる。

つまり、地域と企業が、お互いに継続できる関係を作る。「図書館」があることは自分たちにもメリットがある、結果として企業のファンや仲間を作ることで、「図書館」の維持や継続を図るという事例を今、行っています。

これが、パターン A です。パターン B もあるんです。パターン A は企業さんの力を借りて、「図書館」を維持する。第三者の力を借りて「図書館」の維持をやっていくのがパターン B です。

５．図書館機能を利用した地域教育モデル

１）図書館機能とソーシャルビジネス

もう 1 つのパターン B は、「図書館で事業をやりましょう」というものです。事業と言っても、図書館は本の貸し出しでお金取ることでおきない。著作権法があるので、利用料としてお金を取ると、著作権料が発生して、お金を払わなくてはいけない。

しかし、人が集まりやすいという特性と、その地域の抱える問題を利用することで事業はできる。

ということで、現在私どもが行っている事業の 1 つは、学習支援です。つまり、過疎地とか被災地など、地域によっては子どもの学力が低いんです。もちろん、全部の地域ではありません。

たとえば、過疎で人口流出と高齢化の厳しい夕張市では、小学校の 5 教科で 500 点満点中、学年 4 位の子の点数は、首都圏などと比べてかなり低い。そうした地域では学校の授業だけでは厳しいものがある。

ということで、塾や学習支援もやりたいんですけど、子どもの絶対数も少ないので、まず塾が成り立たない。

「じゃあ隣町に行けばいいじゃないか」と言っても市域が東京 23 区より広いので、隣町の塾に行くのに 50 分かかるんですね。

片道 50 分かかる。3 時間の授業を受けて帰る。でもお母さんは、送って行っても自宅に帰れない。お母さんは子供の塾の間、待っているんです。でも夕張市は積雪地帯ですから、とても待っていられない。それに危険で移動もできない。

そこには、塾に行かず学力を支援する場所がないという現状があります。あとはやっぱり指導者も足りません。環境も厳しくて、指導者もいません。もしそうした人材がいたとしても、地元に仕事がないので流出してしまう。

一方、夕張市は広いですから、みんなバス通学です。だから、放課後みんなで買い食いして「どっかに行こうぜ」とか、「どっかの塾行ってみんなで勉強し合おうよ」というのは一切できないんです。仲間もいないのでモチベーションが保ちづらいという問題があります。

私どもは「図書館」を作っているので、

それを使ってどうにかできないかと考えた。まずは「タブレット」というものがあるから、「ホームラインで学習支援システム」を作っています。ただし、これは、ベネッセさん始め、教育産業のどこでもやっていることです。ただ、それだけではなくて、「図書館」は、月に 1 回か 2 回は顔を突き合わせて、みんなで学習できる場所なわけです。「図書館」を最大限活用し、「みんなで集合してグループ教育はしましょう」と提案し、地域の方に家庭教師をお願いして、指導者の育成もしていく。地元に指導者を育成して、いわゆる「教育の循環」を作りたいという部分から始めます。

授業のスキームということで、現在はオンラインの学習支援のプログラムですけど、いわゆる放課後教室的なものを行います。こちらのほうを廉価で提供して、過疎地の子や被災地の子も同時に学べる。インターネットのスカイプを使って、オンラインで教えています。授業が終わったあと、「チャットシステム」も使い、たとえば夕張市の子と被災地の陸前高田市の子と石巻市の子が 1 つのオンラインのなかで学べ、楽しめる。

授業中はチャットをやっちゃ駄目ですよ。終わったあと、そういう時間を設けて、「自分たちだけじゃないんだ」と、同じ時間の共有もできうる。

講師陣は、今は首都圏の大学生のインターンや、OB の方にお願いをしています。被災地では東北大の学生チームやいろんな学生チームの方にお願いすることが多いです。北海道では北海道大学の学生チームを編成してやっています。

オンラインだけなので、「図書館」も使って、学習拠点にしていこうと考えています。どうして学習拠点を作りたいかと言うと、拠点になると、指導者の人は、塾の経営と一緒になっているもので、雇用と、若干の収入が生まれます。収益が生まれるので、「図書館」の維持と、地元の人の雇用が生まれます。まだ、月に 8 万円のレベルなんですけど。

ただ、地元で今までの教育を生かせる仕事がなかった人が、塾の講師になれる。さらにオンラインで教えてくれる人の後の仕事になるので、自分も教え方が学べる。さら各地の拠点の「図書館」とのグループトークもしていますので、教え方の共有というものも行っています。そういう部分のサポートもしつつ、定期的な指導者ミーティングも行って、将来の指導者も育成しています。

私どもがやって行きたいのは、ここで勉強した子がいい大学行ってほしいとかじゃ

ないんです。先ほども言いましたが、地域は人口が減少します。経済力も落ちます。これは過疎地や被災地のことじゃなくて、たぶん将来的には足利もそうですね。

一番厳しいのが過疎の地域です。誰も助けてくれないんです。自分の地域の問題は自分の地域で解決していかなくてはいけない。だったら、「その問題を解決しよう」と思う子供達を育てていきたいというのが、我々の活動の根底にあります。

２）次の世代のためのソーシャルビジネス

実際、私ども、東日本大震災のあと過疎地に行って、先ほどの図書館もそうなんですけど、「何かを作りたい」というときに、地元からなかなか意見が出てこない。日頃の学習をおろそかにしているからです。特に浜のほうは、勉強しなくても網の修理ができれば、それで稼げますから。でも今はそれができなくなったんです。

だから、急いで従来のそういう環境を変えなきゃいけない。でも親の世代は自分たちが勉強してないですから、「父ちゃん、これわかんない」と言われても、自分もわからない。教える仕組みがないんです。という環境の中なので、問題解決しようというところまでいかない、「面倒くさいな」となってしまう。だから勉強して、「問題は解けるんだ。自分たちが努力すれば問題を解決できるんだ」という能力を育てていく。

そういう学習をしたい。地域の中にそれを教えてくれる人がいる。その姿を見て、教わった子が大人になったときに、自分が指導者になる。そうすると、ここで「教育の循環」が生まれるんです。教育は循環させてかないといけない。中央から一方的に与えられるだけだと、中央が弱まったときに、地方の学習能力はなくなります。だからこそ、地元のキラリと光っている方、そういった方の能力を使うという仕組みを、今は授業として作っています。

現在これは宮城県の亘理町で導入しました。あと石巻でも導入されまして、北海道の夕張市では、来年の４月から導入になります。あさって、鈴木市長にお会いして、正式な形の導入のプレスリリースはそのときに行われると思います。

学種に活用するシステムは、「ライブラーニングシステム」という、既存のものを使います。ただ、これはスクール形式なので、1 対 10 とか 1 対 40 のシステムもできるんですけど、私どもの作っているのは、基本的には、10 人なら 10 人、こういう感じで真ん中に資料があって、自由に会話ができる。「みんなで学べる」オンラインシステムを作って、それを来年の４月から導入しました。

そういうものを使うことで、授業料が発生します。それと地元の教育というのは雇用を生む。最終的に「図書館」が必要ということになれば、維持もしていけます。

継続的に維持できるものと捉えれば、パターン A だとすると、企業の力を借りる。パターン B の場合は、自分たちでやっていく。

３）地域の埋もれた人材の活用

宮城県亘理町の場合は、両方とも使って、ハイブリッドでやっています。企業の力もスポンサーも得ながら、このシステムを導入し、今、何とか維持を図っています。

おかげさまで、仮設住宅とかに建てたもの以外は全部、今も営業しています。講師に関しては、「ティーチフォージャパン」さんや国公立大学の教育学部と連携をしてい

＊特定非営利活動法人 Teach For Japan（テ

ィーチフォージャパン）とは、経済的理由、家庭環境、さまざまな事情で十分な教育を受けられない子どもたちの学習環境の向上と、若者たちのリーダーシップの育成を目的に活動している団体。2010 年に全米文学系就職先人気ランキングで Google、Apple を抑えて 1 位を獲得した、非営利組織 Teach for America のモデルを日本へ応用してミッションの実現をめざしています。
http://www.saicompany.jp/design/tfj/

るケースや朝日学生新聞社さんと先日、

＊朝日学生新聞社は、朝日新聞社の子会社にあたる。子供向けの新聞（朝日小学生新聞、朝日中学生ウイークリー）の発行と書籍の出版が主な業務である。また、小学校高学年向けの児童文学小説を対象とした朝日学生新聞社児童文学賞を主催している。
http://ja.wikipedia.org/wiki/

提携が正式にできました。新聞は読み書きに使えるんです。その教材も全部提携して、「図書館」でいただけることになりました。同時に、朝日小学生新聞は 1 年間の読者がだいたい 10 万人くらいいらっしゃる小学生の専用の新聞なんです。それを読む方は基本的に富裕層です。それと勉強に対して熱心な方なので、大人になったときに、著名な大学に行かれていたりする方が読者 OB、OG に多いんですね。その方々で、地元に埋もれている方がすごくいっぱいいらっしゃる。OB、OG が 400 万人以上いるんですよ。創刊 50 周年なのでそういう方々と連携して、「地域のチューター、家庭教師になりませんか」と呼びかける。足利にも朝日小学生新聞の読者さんの方々はいらっしゃる。

たとえば、「うちの妻の父親は京大出身なんです。全然知らなかったんですけど、教え方とかすごく上手なんですよ。今、隠居生活でお酒しか飲んでないんですけど。」

そういう方に地元の、地域の教師になってもらう。地元で教育をサポートできる方っていらっしゃるんですね。朝日学生新聞社さんと提携をしまして、そういう方々の参加のきっかけとして、メディアで募集をかけて、全国で指導者を募集していただけることになりました。これは 50 周年事業としてやっていただけるということです。

こういういろいろなツールを使いながら、地域に仕事を作っていく。仕事と言うよりも、雇用を生んで地域の問題を解決する事業をしていく。「図書館」だからこそできることであると思います。お金を生まない場所だからこそできる。お金を生みやすい場所と言うと、どうしてもそっちのイメージが付いてしまう。教育という以上、「図書館」というお金のかからない、クリーンなイメージだからこそできるものを私どもは逆転の発想でやっていく。

６．自分だけではできないからこそ

ではあと 5 分で、まとめをさせていただきます。「町を元気にするためには」です。

１）自分のできないことを知る

ここに、そんなに書いてないですけど、「自分 1 人ではできないことを理解することで、地域の力が不可欠であることを地域の人に伝えましょう」と言っています。

私が図書館を始めたきっかけは、実は劣等感とかコンプレックスからなんです。私が最初に被災地に行ったときに、お金がない中だったのですが、「医薬品が欲しい」と言われたんです。自分で 5 万円。あと商工会議所の力を借りて 5 万円。「10 万円分の医薬品」と言っても、命に関わるものじゃない。当時は 3 月の下旬ですから、花粉症

とかアレルギー性鼻炎、津波で埃がすごかったので、アレルギーが多発してたんです。でも、病院は野戦病院みたいになっていますから、アレルギーではかかれない。目薬もない。

ところが、私どもは医薬品をミカン箱 1 個分しか買えないんです。私のなかでは、10 万は大金ですが、地元の人からすると「これだけですか」なんです。向こうの人からすると、行政とかだったら、ドンとトラックで来ますけど、個人ができることの限界っていうのがある。

いろんな被災地に行くなかで、たとえば、自分の家が海に浮いている。そのなかに大事な家財道具がある。そこを漁師さんがずっと見ていたわけなんです。私もが「どうしましたか」と聞くと、「いや、家があるんだけどさ、これがあるから船も出せないし、傷ついちゃうんで。引き上げるものもできない。」私も、「そうですよねって、どうしましょうね」と言ってるときに、ほかの人が来て、技術系の人がクレーンでグッと引き上げて、解決させちゃったわけですね。

私は、「被災地に行きたい、助けたい」と思っても、チェーンソーを使うこともできなければ、重機を扱う免許もないんです。つまり私は、行ったところで、自分ができないことをやろうとしても、そのときに必要なものを提供できない。だから行けば行くほど自分の無力さを感じるんです。

そのときに、ある方から言われた、「本を読みたい」という一言が・・・・。最初持って行ったときには喜んでいただいた。でも次に持って行ったときには、「ずっと持ってこられてもゴミになっちゃう」と言われた。「だったら誰もが読める形を作ればいいんじゃないか」と思った。「でも本棚は誰が管理するんですか」と言われるわけです。「だったら管理できる仕組みも作ろう」ということで「図書館」になったんです。

でも図書館にするためには自分の力じゃどうにもなりません。だからいろんな人にお願いをして、本を集めることをした。結局、自分ができることは、人にお願いすることと、そのときに、ニーズを集めただけなんですね。

私は、特定の何か技術を持っているわけでも、センスがあるわけでもないです。そういう特別な技術や能力のない人間がやれることを理解していくということがまず大事。でも、自分ができないっていうことをわかっているおかげで、本は、累計で 52 万冊が私どもに集まって参りました。自分で買っていたら、たぶん 1,000 冊くらいが限界だと思うんです。

でも、自分ができないということを理解することで、そういう部分でお力添えをいただくことができて、今に至っていると思うんです。

ですから、やれないことを決めていく。私はチェーンソーも使えないし、重機も扱えない。そんな人間ができることを考えていく。被災地で、地域も町も元気にするために、私はお金があるわけでもない。力があるわけでもない、そんな人間がどうすればできるかというのを考えることが大事だと思います。

２）主役は地元の人

あとやはり、主役が誰かということを考えるのがすごく大事だなと改めて思います。最初の図書館を建てたときに失敗したのは、「俺がこういう図書館を作る。俺がこういう場所を作ってあげる」というふうに、主役が自分だったんですね。主役は自分だから、周りに地域の方がいないから、作った

って、継続できないですものね。

でも、「そこの地域の方が使うんだよな」と、あと「なんで図書館か」というと、私はその地域にせいぜい週に１日行ければいいほうなんです。つまり自分はいなくなるわけです。いなくなっても継続できる仕組みを作ると考えたら、図書館でも「誰かが管理する仕組み」、それを「定期的にメンテナンスする」のだったら、週１回でもいいわけです。

自分ができるものを考える。そうすると、管理してくれるのはやっぱり地域の人。つまり、主役を考えていく。少なくとも「自分じゃない」っていうことを理解すると、いろんな人にお願いができるので、町が元気になりやすくなるんじゃないかなと思います。

「カブーム！」さんも同じですが、「何かを作るプロセス」や「ゴール」を重視して「それをみんなで共有しましょう」と考える。「どんな場所にしたいですか」と。

学習支援も、地域の方を巻き込みたいですね。地域の方に指導者をお願いした。「どんな教育をしていきたいでしょうか」、「どんな勉強だったらいいでしょうか」という話し合いを必ずしています。共有すれば、それに向かってみんな向かっていけるし、ゴールさえ合っていれば、方向性は別でもたどり着くとこだいたい一緒なので、「ゴールだけは共有しましょう」というようにやっています。

３）継続できる仕組みと具体的イメージ

あと、「継続できる仕組みを作っていく」ことです。やはり学習支援も企業も、「どうすれば継続できるか」と考えると、ものすごく抽象的なんです。しかし、「3年後もここにあるにはどうしたらいいか」と言うと、具体的に考えなきゃいけないんです。「お金はいくらかかるんだろう。管理どうしていくんだろう」。「そのためには、ここで損益分岐点は出さなきゃいけない。」

3年をイメージしておけば、「来年にはこういうふうになってないといけないよな」。「半年後にはこうなってなきゃいけないな」と具体的なイメージが描ける。必要な経費も出てくる。必要な人も出てくる。

ですから、どうやって継続すればいいだろうとかいう抽象的なことじゃなくて、3年後ここはどうなっていたいかというイメージを持つことで、継続の仕方も考えられるのかなと思います。

４）そして、行動

そして、ある程度考えたら、とりあえず行動してみる。やっぱり動かないことには、元気にもなりませんし、動かないとわからないものがたくさんあるなと思いました。先ほどの学習支援でも、動いていると、誰かが助けてくれるんですね。朝日子供新聞社さんや、某学習塾とかもにもご支援のお話をいただいたり、某大学さんも協力いただいたりと、お話はいただいています。

やっぱり動いていると、誰かしら協力してくれるんだなということをすごく感じます。それはやっぱり自分ではできないこと、自分には足りないものを、そういう方が補完をしてくれるので、そうすることでいいものができてくるのかなと改めて思います。

私どもの作るのは、「みんなのとしょかん」という図書館です。だから、 私の図書館でもないですし、あなたの図書館とか、そういうことじゃなくて、みんなのもの。みんなで作る場所であって、みんなが共有するものであって、みんなで維持できるもの。それで「みんなのとしょかん」と言っ

ています。これからも、みんなでいるからこそ継続できる。みんなが集まれるからこそ元気になる。そういったものを地域に作っていきたいと思いますし、現在足利市内にも、何館か作る話もいただいております。

いろいろなものを使いながら、町を元気にするお手伝いができればと思っておりますので、逆に、そのなかで気が付いた点とか、こうしたほうがいいよっていうアドバイスをいただけましたら、そういう意見が一番貴重だと思っていますので、ぜひとも忌憚ないご意見をいただければと思います。

以上となります。お時間いただきありがとうございました。

７．議論―運営の実際―

司会

どうもありがとうございました。地域活性化の根底にあるものは継続的な活動ですね。

これからは、自由な意見交換の場にしたいと思います。

１）組織形態について

A 氏

NPO じゃなくて、「一般社団法人」なんですね。これはどうしてですか。

川端講師

図書館法がありまして、図書館法のなかで、図書館を作れる法人は、地方自治体、日本赤十字社、あと、公益財団、一般財団、公益社団法人、一般社団法人です。NPO では作れないんです。

という縛りがあるのと、最終的には「図書館協会」とも連携したりする必要がある。ただ私たちだけで作るっていうんじゃなくて、地域の方の参加とか、その汎用性も考えると、「一般社団法人」が一番フレキシブルだったっていうところです。

A 氏

でも社団にするためにはそれだけの会員が必要ですよね。あ、そうか、一社ですね。

川端講師

一社なので、公益社団法人じゃない。震災直後に作ったこともあるんです。NPO は 7 名の理事が必要で、申請してから 2 ヵ月後ないし 5 ヵ月かかる。震災直後なので時間がなかったんです。スピード感を持たなくちゃいけないんですけど、任意団体でやっているところに本を送るって、やっぱり皆さんも勇気がいると思うんですよ。それで、「ちゃんと法人でやってまいすよ」ということを伝えていくためにも、スピード感もってやりたかった。図書館法もあって、社団だったらいけるっていうのもあったのでその両面で行きました。

A 氏

図書館法があれこれあるわけですね。でもうまく使えば、またそれはそれだけの力にもなる。

川端講師

そうですね、そこで認定されると日本図書会協会さんのバックアップもいただいたり、図書館の会報誌に「新しくこういう図書館できました」って紹介してくださるんですね。最近はそういう部分も緩やかなので。

先月には佐野市立図書館の「図書館祭り」があるんですけど、そこで講演をさせていただいたり、今度 12 月には県立の図書館の研修会の関東地区大会があって、その講師として私を呼んでいただいたりとか、非常にフレキシブルになってきているなというのは感じはします。

司会

ありがとうございました。どうぞ。

２）建築許可について

B 氏

私、設計事務所やっているんですが。最近、学童保育の施設の設計を頼まれてるんですよ、仕事で。学童保育に対して国も力入れて図書も入れるんだけど、学童保育の中で小学生の放課後みたいな感じも多いと思うんだけども、学童保育って、わりとそわそわするんだ。そうした子に今言った「図書館」って、馴染みますか、どうなんですか。

川端講師

もう川崎市は、7 館ぐらい、先ほどの 44 館中の 7 館は学童保育の施設です。石巻の「センター館」ってあったんですけど。最近はそこが学童化してきちゃいまして。図書も置いといて子どもたちが自由に来るんですね。夕方 5 時ぐらいになると 10 人ぐらい、どかどかどかって来るんですよ。みんな宿題とかをめいめいにやって、そのなかの 1 人のお母さんだけが来て、あとのお母さんは仕事に行っているんですね。それで、7 時とか 8 時ぐらいになるとみんなお迎えに来て帰っていく、要は学童保育の場として使ってるんです。」

B 氏

指導員もいるしね。

川端講師

そうですね、子供だけではうちも困るんですけど、そういうのを地域の方が自主的にやっていただけるので、学童に自然となってる場所もあったり、逆に学童保育のところから「図書コーナーを作って」とご相談いただいて設置させてもらったり、保育園もですね。

先日は大阪の保育園が 6 館同時にオープンするというので、そこの設置をさせいただきました。

B 氏

そうなると国からの補助も、結構大きいしね。最後に気になったのが、被災地だからだと思うんだけども、通常 10 平方メートル以上もの、6 畳以上超えちゃうと建築許可をとんなきゃいけないんですよ。

川端講師

はい、知っています。

B 氏

被災地は仮設としておいているから問題ないと思うんだけども、どっかで「許可取れと」か言われたことありませんでしたか。

川端講師

実はあそこだけは、許可じゃないんですけど一応取っているんです。それ以外のところというのはコンテナでやった場合は、おっしゃるとおり、10 平米以下の 3 坪のコンテナハウスしか置いてないです。ほかのたとえば本を読む場所を別に用意してというふうにやって、おっしゃるとおり 10 平米以内に抑えましょうとなります。基本的に既に別の施設が開いている場所とか、たとえば仮設住宅の公民館の中、集会場の中作らせていただいたりというのもあって、最初、私もわからなかったのですが、一番怖いのは、建築許可もそうなんですけど、固定資産税、課税対象になってしまうというのが私としてはすごく心苦しいというか、被災地支援といっておきながら課税対象になって、税金も発生してしまうのはできないので、最初は 3 坪以内、だから非常に狭いんですけど、それを何個かに分けて作らせてもらったりというふうにやってます。

C 氏

移動図書館の場合だったらいいけど、実際の固定の図書館だと 3 坪って垣根あるん

で、その外でやる分には問題ないですね。

川端講師

そうですね、ただやっぱり先ほどの、あそこも一応許可には、ちょっと時間がかかってるんですね。そういうのも全部申請します。行政にもそこの確認はして、特例じゃないですけど、減免申請もやった事例ですね。

B 氏

私はね、フィリピンのほうに図書館作ったんです。最初はすごくまぶしい施設っていうか、図書館は当然ないし、小学校はあるんだけども運営するのもできないっていうんで、日本円で 200 万円、向こうに行くとおそらく 5 倍か 10 倍の価値だから、相当のお金と蔵書とパソコン置いたりしたんです、それで毎年行っています、なんで行くかっていうと、1 年間の運営費が 10 万円おりるんです。

でも、完成はしたんですが、ボランティアでやったって感じが多いし、なんか活用されている様子がね、あんまりないんですね。だから今にして思えば、やっぱりこっちのエゴかなっていう感じです。

もう少し向こうの子たちにね、やらしたほうがいいかなと思って、反省してて、今、毎年送ってる 10 万はどうなっているんかな思います。

D 氏

日本の ODA の典型みたいなもんですね。

C 氏

いや、向こうにとって 100 万くらいの価値ありますね、10 万円は。

３）広報活動について

D 氏

最初にあるように地域から声を上げてもらう、これがスタートになっていますけども、声をあげてもらうときに最初はだいたい皆さんの存在を知られない状態でしょう。ある程度声が来るようになるまでの間はどうやっているんですか。

川端講師

そうですね、最初は図書コーナーだけを仮に作っていったりとか、いろんなものやり、すぐに引き上げられるシステムにしたりとか、メディアは活用させていただいています。

1 回作ったものを地元の新聞に取り上げていただく。記事を地域にそれとなく配布をさせていただいて。それで、「欲しい」っていう声があがると伺う。私から直接「どうですか」みたいな案内は今もうないんですね。

ただ、最初だけはやっぱり、実例がないと、具体例がないと説得力はない。その具体例を作っていくときにさっきの話みたいに勝手に作って、ヤンキーのたまり場になったりとか。

D 氏

いろいろご苦労があったようだね、最初はね。

川端講師

最初はいろんな方から、寄付とか支援をいただいたのがそうなってしまうとやっぱりちょっと精神的にきつくて。そこを考え、試行錯誤をしたのが当初のスタイルだった。それで、もっと高めたいなと思ったら「カブーム！」さんというのが非常に似てたのです。

D 氏

そういうことね。そういうのも勉強しながらね。さっきのフィリピンの話も地元の要請でやる気になった。それともこっちから作ってやるよっていってから。

C 氏

地元要請、現状を見ていて、切ない、図書館の普及率が非常に低くて、始めたの 20 年前なんだけど、実際、図書館作るのは 10 年ぐらい前です。

最初、私、設計図まで書いたんだ。図面から起こしてやろうと思ったんだけども、そうすると中が狭くなっちゃうってんで、結局、小学校にある一部の施設を利用してやったんですけども、最初は市庁舎だったんです。

その市庁舎のすぐそばで一般市民を対象にやろうと思ったんだけども、最初は市が運営をやってくわけだっのが、急に担当者いなくなっちゃった。それで小学校だったらば先生方が見てくれるというので。

年に一辺行ったときは、それはそれで歓迎はしてくるんだけども、なかはどうってわかるんですよ。使われているかどうかぐらいはすぐわかるんです。しいんとしているんだよね。本が妙にきれいすぎちゃったりとかね。

４）組織運営について

D 氏

今は 3 人でやっておられるんですか。

川端講師

事務局だけですと、うちは 3 人だけです。でも、それもうちの仕事やりながらの兼務の人間だけですので、実際その図書館の館長さんっていうのは全館もちろんいますし、携わっている。

D 氏

本体は兼業で 3 人ぐらい。

川端講師

そうです。やれるレベルにしましょうということで。ただ、最近おかげさま、この学習支援システムも導入になったんで、これの専門の分野を置くために、新宿のほうに拠点を構えています。

システムの募集もやっていかないとなんで、すでに熊本の過疎の地域から「導入したい」ということでお話をいただいているので、なるべくそういうふうにしていきたいと思っています。そうすると講師陣が充実するので、今、東大や京大、東京理科大さんとか、ある程度専門的なので、足利工業大学さんにもお願いしたいなあと、ほんのり思いながらですね。

そういう専門の方もいて、そういうのもで学べるということも必要になってくるので、そういうのも考えながらですね。

５）地域の寺小屋としての図書館

E 氏

今後、一番多くなりそうな学童保育、どんどん増えていくわけですよ。そうすると、学生のアルバイトというようなかたちをとっているけども、図書館は非常にいいアイデアというか、学童に一番似つかわしいシステムじゃないかなって思うんですよ。

だからこれから増えていく。この辺でも、親はいるけど、仕事していないとかですね。昔と比べて学童保育の要素は増えるんで、そのときの仕組みとしての図書館は有効だろうなと思うんですね。

川端講師

市立の場合は図書館の設置は多いんですけど。町立の図書館、独立した建物としての町立図書館は 45%で、村に至っては 17%しかないんですね。それ以外は公民館に併設されてたりとか、独立しているのはないんですよ。だから 500 以上の町村には図書館がないんです。そういうとこはだいたいコミュニティ施設もなければ学童保育施設もない。

そこを維持できる施設として、たとえば

文科省も作りましょうと声はかけるんですけど、維持がやっぱり大変なわけですね。それを民間の形で継続可能なものとすれば、地域に文化的なものというか、学童保育として使えたり、うちの場合はカルチャー教室もやって、お年寄りも結構使うので、子供とお年寄りの交流の場にもなったりする。そういう場所として、地域の状況に応じた場所を作っていける、それが「図書館」ですね。それをどう使うかっていうのは、やっぱり地域の方がアイデアをすごく持ってるので、それを表現する場所を提供していくっていうだけだと思います。

D 氏

最近はマスコミ、新聞なんかでも、かなり図書館もいろんな活動の紹介があり、出版でもかなり「図書館」とタイトル付いた出版物が増えていますね。関心を持たれているのは、どっちかっていうと、町とか村よりもある程度の人口のあるところの図書館の活用の話がわりと多いように感じるんです。

だから町とか村という大事なところに目を付けたんじゃないかなと思います。

C 氏

コミュニケーションの場としてね、図書館ってのは重要だっていわれてて、実はアメリカでも、図書館自身が活動する図書館だ。そういう図書館も必要だけど、学童の図書館っていうか、コミュニケーションの場としての図書館も意味があるんだろうなと思うんだ。

川端講師

そうですね、世界で最大の図書館はニューヨークにあるんですね。70 万冊以上の蔵書があって、アメリカの独立宣言文もあるけど、運営は NPO なんです。鉄鋼王のカーネギーが寄付しまして、ニューヨーク州が土地を無償で貸与して。ただし、運営は全部 NPO でしますということで、寄付や事業収益によってのみ成り立っているんですね。

ちなみに地域に 86 ヵ所の地域分館がニューヨークはあるんですけど、それも全部 NPO が、最初から行政の補助金とかではなく、NPO が自分たちでお金を集める。あと事業しながらで、成り立っている。ニューヨーク市民の図書館の利用率って実は日本の 2.2 倍ぐらい。お金も出しているので使おうとか、使い倒そうとかっていう感覚もある。だからこそ継続されていくという、非常にいいモデルになってる。

私としてはそちらというか、日本の公立図書館よりもそういう地域で維持できる、特に地方って財政的に厳しいので。足利ですと場所は言えないですけど、お寺さんに図書館を作るっていう動きがあります。足利は 133 ヵ寺。とお寺さん多いですから。

B 氏

寺子屋感覚で。

川端講師

そうですね、もともとで、駐車場もありますし、本来そういう存在だったわけなので。

C 氏

さっきの写真にも出ていたけど、お寺が、境内が図書館になっている。あれは、当然なんでね。もともと人を集めるのはお寺とかそういう集合場所なんですね。コミュニティの場所なんで、図書館であってもまったくおかしくない。

川端講師

だから、やっぱ足利ってそういう場所が関東で 2 番目にたくさんある。だったら、それを生かさない手はないんじゃないかなと私は思っています。仏教会の方いくつか

お話はさせてもらっています。

司会

足工大の図書館もなかで、留学生を講師にして韓国語講座を開き、地域の人が習いに来ることをやっています。ですから、そういう使い方が素直なんですね。まず、形としてね。

D 氏

足利は県立の図書館、市立がなくて、足利学校のなかに史跡として入っている図書館がある。あとほとんど公民館が主体ですね。

川端講師

公民館の図書館の利用率が本当に低いんですね。

D 氏

ほんとにね、利用しにくい。使いにくい。

川端講師

なんとなくこう、行きづらいっていうイメージがあるみたいで。

D 氏

公民館だけども、「公民」といってんだけど、やっぱり行政なんだね。

A 氏

日本の場合は官民なんですよね。公がないんです。「パブリック」という概念が日本の場合は官になっちゃっているんですよね。

D 氏

使わせてやるっていうかね。見させて、読ませてやるって感じになっちゃう。

A 氏

そもそも所有が官なんですよ。そこから間違っているんだろうなという気はする。

川端講師

うちもタバコとお酒は駄目なんですけど、まあだいたいのことはOKにしていたりする。この前も石巻に行ったら、小学生の子供がコンビニ行っておでんとか食いながら本読んでいるんですよ。「おまえ垂らすなよ」とかって怒られるじゃないですか。でも、私はそれでいいと思ってるんです。そのあの、自由に使ってくれて、子供たちが約束をする場所として、たとえば「図書館」でみんなで集まろうよとか言ってくれたりとか。あとは学童や幼児の保育所の代わりとして使ってくれたり、自由に使える場所があるって、私は大事だと思ってるんですね。

D 氏

今お話を伺って、食べながらだと汚してしまうと。それは公でいえば、最初から「だから駄目」って言うけども、こぼして汚してから、「じゃどうする」かっていう発想がないんだよね。駄目になったことを「じゃあどうするか」って考えるには、まず駄目にさせたほうがいい。わかりやすいと思うんだけどね。

A 氏

要するに公物管理なんですね。管理責任というところから話が始まるから動かないんだ。

D 氏

危険だから駄目だって、予防的な発想ね。あれで全部抑えちゃうから。

A 氏

だから官なんですよ。公ではなくて。

D 氏

教育はみんなそうだからね、だいたいね。しつけも。

川端講師

だから「みんなのとしょかん」には館長はいるんですけど、無人のところもいっぱいあるんですね。盗まれるんじゃないかとよく言われるんですけど、最初やるときに盗まれても一切責任求めませんから自由にやってくださいっていうのでお願いするん

です。うちはそれも理由を了解してもらった上で寄付も集めているんですね。

ただ返却率は97%以上なんです。例えで、大変申し訳ないですけど、友愛会館（商工会議所）でもちっちゃいコーナーを作っているんですけど、一番紛失率が高いのはあそこです。

やっぱり、地域の方にある程度お任せをして、ただ返却も遅くなる人もいるんです。おばあちゃんで足が悪くって、そうするとわざわざ手紙を書いて、「何日間遅れてしまいました、すみませんでした」っていって返してくれるんですね。一番重要なのは、私もだから性善説に基づいてやってくしかないっていう思いはあるんですけど、だからこそ、うちは「これだけ信頼されているんだったらこうしよう」っていうふうに参加意識はすごく高まっているなっていうのは感じます。

６）蔵書の集め方

D 氏

さっきのお話あったように、たとえば葬儀屋さんがお葬式関係の図書コーナーを作って貸出するとかね、そういうことは非常に当然ありうると思うんだよね。一般的に本の集め方っていうのは分野を決めて集まるもの全部集めるって感じなんですかね。

川端講師

そうですね、先ほどの葬儀社さんの場合は葬儀関係の本は全部買ってもらっています。やっぱりそこは集まらないですし。要はニーズのちゃんと合うものを作んなくちゃいけなくて。

D 氏

要するに、葬儀屋にしてみればそこは投資だよね。宣伝のために。パンフレット作るのと同じような感覚になりえますよね。

川端講師

そういうものであればやっぱりメディアからも取り上げていただいて、放送もされいてるので、宣伝効果としては非常に高い。しかも、そういう専門性をもって、そういう葬儀とか仏事関係の蔵書数というと佐野市内だけですけど、市内では１番になるわけですから、そういうPRもできますよね。、それが自由に借りられるということになる。

D 氏

それを持ってかれるとか、返さないとかということはあるけど、それでも恐れずにやったほうがいいのかなと思っている。

この図書館はこういう図書館にしたいって本を集め形ではないんじゃないかなと思うんですが、そうするとものすごくいっぱい世の中に余ってる本がねあると思うんですよ。死蔵されているっていうか。この辺もってくれば、ただ同然という。だから、いつでも補充はできるんじゃないかって感じなんですけど、どうなんですかね。

川端講師

おっしゃるとおりです。ただ１点だけチェックしているのは、今、古書としてどれくらいの価格で出回っているかというのは事前に全部チェックしています。やっぱり、値段がものすごい高い本とかあるんですけど。1回被災地のほうで、70冊くらいごっそり盗まれたことがあるんですよ。それは1冊やっぱり１万いくらとか値段がするものとかもあり、最初は、被害も出ました。そういう古書業界での値段になっていたのだけがごっそり抜かれていた。

でも、人気の高い本っていうのは逆にAmazonとかで１円になってたりするんですよね。でも、そういう本のほうが借りられるので、そういうものも見極めながら、たとえば、価値の高いものだけは別途管理

をするとか。あとあのうちのほうでは、暴力描写とか性描写が強いものは、特に性描写のものは外します、図書館なので。

で、そういうのに関しては古書を扱う書店と提携してるので、そこに売却をして、その売却益を使って「図書館」の維持費用としてリクエスト本を買ってもらう。

基本は図書カードに替えて使う。地元の本屋さんも売り上げが落ちているんです。人気のあるベストセラー本を買うのはできれば「図書館」のある地域の書店で買っていただくようにしてるんです。

山元町だと近くにないので隣町になっちゃうんですけど。ただ、なるべくその地域に、毎月１万円しかないかもしれないですけど、地元にお金を落としましょうと、そうすると買う人の顔が見えるので、何かあったときもつながりができる。だから本の選定はそういう形でやっています。

A 氏

子供向けにマンガの本も置いてあるわけですか。それは置かない？コミック。

川端講師

置いてあります。もちろん。ワンピースも全巻という感じで。人気のマンガ本は基本的に全巻そろえて。リクエストに必ず書かれるので。

F 氏

買ってそろえるわけではないでしょ。

川端講師

買ってそろえるのもありますし、うちのほうですと図書館が、本の募集をこうやりますって Facebook とか使い、ホームページ上で１日多いときで３万人ぐらいが見てくれるんです。

そうするとこの前も絵本が足りませんということで、メディアも取り上げてくれて、そこは戦略的にやったんですけど、「足りません」っていってお願いして１週間でだいたい 2,800 冊くらいは本が集まるように今はなっているのです。

７）ライバルはブックオフ？

A 氏

そうすると先ほど言った性描写の本でも、とにかくそちらで集めてそれを換金して・・・

川端講師

うちは全部ウェルカム。

A 氏

処分に困っている人なんかは助かるかもしれない。

D 氏

古本屋行くとね、そういう専門の本屋もあるし、そのコーナーみたいのもね。足元のほうにね、ずらっと何冊もそういう関係のが書架になってるんですよ。

A 氏

マネーロンダリングというと表現が悪いけど、それで循環してけば、結果としてそれがいいほうに置き換わっていけばいいわけだから・・、なるほどねって今思っています。

川端講師

一応、別法人でやっぱり古書を扱う古物商の許可も取っているんですよ。ただ、そこは収益とかじゃなくて、売った全額がこっちに来る。ただ、図書館ですから、そのまま売却っていうのはできないので、そういうのを Amazon でも扱ってる、「株式会社嵯峨野」さんという会社にお願いをして、そこが本をブックチャリティーにもって行ってくれてるんですね。そこに本を送ると全部換金されて換金分が全部私どもに来るというシステムを作ってくださっている企業さんもあるのです。

A 氏

そうすると、ブックオフと競合してくるんですね。ビジネスモデルとして。

川端講師

そうですね、ライバルはブックオフです。

A 氏

それは意識しているわけですね。

川端講師

意識しています。ただ、ブックオフの場合は素直に、お金に換える。私どもの方はそういう間の仕組みがあって、それを使って募金にもできます。

A 氏

公益事業として成立させていくわけですね。

川端講師

そうですね、お金に換えて自分で使ってもそれはそれで選択です。でも、全部古書店に送っても1000円か2000円にしかなんないんだったら、「役に立ったほうがいい」と思う方ってかなりいらっしゃる。そういう方々にお願いをしていく。

あとは、学校関係にも。私、今まで 190 校ぐらいの小中学校とかが協力してくださって、学校行事で、たとえば 10 月 11 日は長崎東中学校さんの文化祭があって、その文化祭の授業として子供たちが自主的に私たちの存在を知って、本を集める活動を行ってくれるんです。

そうすると千何百冊集まって、それをまとめて送っていただいたり、あとは佐野の日大高さんも、3 年連続でそういう協力をやってくださったり、学校単位のまとまった支援もいただいているので、それもすごくありがたいです。

８．おわりに

司会

非常に貴重なお話いただいて、まだまだお聞きしたいこともあると思いますが、最後に学生さんのほうで、この過疎地域の問題を扱っている方がいたと思いますが、何か意見はありますか」

G 氏

ガソリンスタンドをそういう拠点として使う意味はあるんじゃないかなと聞きながら思ったんです。農業で「地産地消」なんて言葉をよく聞いたんですけど、これも一種の「地産地消」なのかな、なんて思って。地域が、活性化するには、やっぱりその「地域からの力」があるのかなと思いました。

あともう 1 つは、最近はインターネットで、Amazon なんかで買っちゃって、本 1 冊買うにしても、自分の物っていうか、そういった物でも誰かと分かち合うとか、みんなが同じ本読んでるっていう感覚がない人が多いのかななんて思ったので、「図書館」ができてることによって、紙媒体の素晴らしさっていうか、レザーじゃない温かみみたいなものがまた増えていけばいいなと思いました。

川端講師

ありがとうございます。

司会

地域交通の拠点性と図書館の関係を研究するのもあるのかもしれないね。

H 氏

そうですね、今デマンドパスを利用されている方が、コミュニティとして求めている部分もあるんで、そういった部分を研究したりとか。

司会

急には研究に生かせないかもしれないけど、過疎地域の今「地産地消」、そういった循環みたいなものを意識するとずいぶん違った世界が見えてくるかもしれないね。

ということで、最後は北川副会長に締めのお言葉をいただいて終わりたいと思います。

北川副会長

本日は非常に貴重なお話をいただきましてありがとうございました。今、本離れとか活字離れというようなことをいわれております。そのなかでは、こういう形で図書館を作られているということは、図書館ということだけでなくて、大きな広がりを持って社会の基礎的な部分を助けているというような感じを非常に受けました。

これからもひとつ頑張っていただきたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。

まちをげんきに
～みんなのとしょかん～

誰もが自由に集まることが出来る場所を

「みんなのとしょかん」プロジェクトとは

- 人のつながることが難しい都市部や被災された地域において、交流の拠点となり、誰もが自由に集まる事が出来る場所となる、「としょかん」の設置を通じて、地域コミュニティを育てる活動を行っています。また設置した図書館でカルチャー教室なども開催し、地域での生きがいづくりの支援も行っています。

名　　称　一般社団法人みんなのとしょかん
代表理事　川端秀明
設　　立　2011年6月8日
所 在 地　【本部】
〒326－0035
栃木県足利市芳町26
ＴＥＬ　0284－43－8913
ＦＡＸ　0284－40－3071
【石巻センター館】
宮城県石巻市立町2－7－25
ＵＲＬ　http://www.mintosho.org/
受賞歴　社会貢献支援財団　東日本大震災における貢献者表彰
パナソニック教育財団　子ども達の心を育てる総合運動　奨励賞
日本青年会議所主催　人間力大賞　衆議院議長賞　全国知事会賞　ＮＨＫ賞

被災地、過疎地へのとしょかん設置活動

としょかんが出来るまで

- としょかんをつくるプロセスがコミュニティを育てます。

1. ・地域から声をあげてもらう（地域を巻き込む）
2. ・設置場所及び完成予定日を決める
3. ・どんな「としょかん」にしたいのかを話し合う
4. ・資金集めや設置の方法を話し合う
5. ・地域で無理なく管理できるチームをつくる
6. ・設置に向けたボランティアを募ります
7. ・みんなで「1日」でつくりあげます。

地域の方を巻き込む　・　ゴールを共有する･達成感を味わう

最近の事例

- 宮城県山元町　山下駅周辺

●地域にとしょかんがある

＝その地域に誰が来ても良い場所がある

カレーライスと図書館
→嫌いな人はそういない

誰が来ても良い場所とは、誰もが等しくいられる場所
それを誰かに作ってもらうのではなく、「みんな」でつくる

本当に継続するためには
①人の力を集める、参画意識を高める
②経済的な自立を考える
の二点を考えなくてはならない！

現在の地方が抱える問題点

- 人口減少により、歳入は減少
- 高齢化にともなう民生費（高齢者福祉・生活保護）の増加で歳出は増加

平成２６年度　一般会計　歳入歳出予算

歳　入　（単位：千円）

区　分	当初予算額	構成比(%)	前年度	対前年比(%)
市　税	18,945,842	28.5	18,746,379	0.6
地方譲与税	484,051	0.8	471,001	+1.5
利子割交付金	34,000	0.1	31,000	9.7
配当割交付金	60,000	0.1	18,000	233.3
株式等譲渡所得割交付金	11,000	0.0	6,000	81.8
地方消費税交付金	1,708,000	3.2	1,460,000	17.2
ゴルフ場利用税交付金	80,000	0.1	70,000	14.3
自動車取得税交付金	70,000	0.1	120,000	−40.0
地方特例交付金	64,000	0.2	65,000	−1.2
地方交付税	6,500,000	12.6	6,500,000	1.5
交通安全対策特別交付金	29,000	0.1	32,000	−9.4
分担金及び負担金	561,842	1.1	539,100	4.3
使用料及び手数料	1,532,120	3.0	1,533,433	−0.1
国庫支出金	7,546,554	14.6	6,901,066	9.4
県支出金	3,520,452	6.8	3,217,424	9.4
財産収入	208,757	0.4	233,365	−10.5
寄附金	9,002	0.0	8,002	0.0
繰入金	1,398,627	2.6	1,021,854	+33.7
繰越金	300,000	0.6	300,000	0.0
諸収入	4,263,003	8.2	4,306,049	−1.0
市債	4,391,500	8.5	4,308,800	1.9
合　計	51,700,000	100.0	50,500,000	2.4

平成２６年度　特別会計　歳入歳出予算

（単位：千円）

会計名	当初予算額	前年度	対前年比(%)
介護保険（保険事業勘定）	12,170,000	11,447,000	6.3
国民健康保険（事業勘定）	19,189,000	18,117,000	5.9
後期高齢者医療	1,543,000	1,475,000	4.6
土地区画整理事業	53,000	—	新規
公営地方卸売市場事業	170,000	174,000	0.6
農業集落排水事業	22,000	22,000	0.0
公共下水道事業	5,255,000	5,241,000	0.3
宿泊レクリエーション施設事業	14,000	13,800	1.4
水道事業	3,882,000	3,888,000	0.0
工業用水道事業	204,000	178,000	14.6
合　計	41,508,700	40,537,800	2.4

歳　出　（目的別）　（単位：千円）

区　分	当初予算額	構成比(%)	前年度	対前年比(%)
議会費	360,093	0.7	361,813	−0.5
総務費	3,991,297	7.7	4,074,781	−2.0
民生費	19,566,099	37.9	18,316,183	6.8
衛生費	3,427,115	6.6	3,413,199	0.4
労働費	85,273	0.2	102,185	−16.6
農林水産業費	449,405	0.9	442,112	1.6
商工費	4,537,245	8.8	4,495,576	0.9
土木費	7,668,258	14.8	7,466,522	2.7
消防費	1,627,600	3.2	1,732,672	−6.0
教育費	5,236,230	10.1	4,973,613	5.3
災害復旧費	6	0.0	6	0.0
公債費	4,619,405	8.9	4,976,125	−7.2
諸支出金	1	0.0	1	0.0
予備費	100,000	0.2	100,000	0.0
合　計	51,700,000	100.0	50,500,000	2.4

歳　出　（性質別）　（単位：千円）

区　分	当初予算額	構成比(%)	前年度	対前年比(%)
人件費	8,759,762	16.9	8,893,978	−1.5
物件費	6,076,731	11.8	5,631,801	7.9
維持補修費	659,999	1.3	668,380	−1.3
扶助費	12,335,599	23.9	11,742,599	5.0
補助費等	3,412,436	6.6	3,148,176	8.4
普通建設事業費	5,342,949	10.3	5,292,146	1.0
災害復旧事業費	6	0.0	6	0.0
貸付金	3,907,940	7.6	3,913,847	−0.2
出資金	28,287	0.1	28,992	4.8
繰出金	419,096	0.8	317,664	31.1
維持費	6,047,857	11.7	5,818,333	3.9
公債費	4,619,405	8.9	4,976,125	−7.2
予備費	100,000	0.2	100,000	0.0
合　計	51,700,000	100.0	50,500,000	2.4

市税の収入より、民生費が上回る状況

例１）企業との連携による「としょかん」設置

- 商業施設内及び商業施設に隣接した学童等の保育施設に、誰もが気軽に訪れることが出来る「としょかん」を設置。地域コミュニティを育てる場所として活用されるだけでなく、

・公共的な施設を付加する事による、地域密着型施設としての位置づけ
・利用者（本の貸出と返却）の買い物への誘引及びリピーター化
・出店地域に対する社会貢献事業としての広報的役割
・貸出データを活用した、地域住民の利用層及び利用頻度の調査※
（※貸し出しシステムの導入が必要となります）

等にも活かされる事で、利用者、企業、地域のすべてに益のある「三方よし」の場所としての「としょかん」を設置します。

設置事例：宮城県石巻市　コンビニエンスストア敷地内（復興庁連携）
千葉県船橋市　ショッピングモール内（地域ＮＰＯとの連携）
神奈川県川崎市　店舗併設学童施設内
他

地方の企業が抱える問題点

- 商品の差別化が困難　（同じ商品・同じ価格）
- ネットによって商品の購入が容易に
- 大手の購買力に打ち勝つのが困難
- 陳腐化が早い（商品のライフサイクルが短い）

「それでも○○社が良い」と思われるまでの意識づけが重要
↓
いかに、地域に根付く企業となれるか？がポイント

地域の企業だからこそ、
地域の弱さを補完する事で、
地域に必要な企業になれる

地域と企業の接点をつくる

株式会社アベスポーツさんの取り組み

地域と企業がお互いに継続できる関係をつくる

例２）地域のニーズに合わせた有償事業の展開（学習支援の例）

これからの地域を担う
問題解決力を持った
子ども達を育てたい！
…が、

環境による問題

子どもの絶対数が少ないため、塾などの学習支援施設の経営が成り立たず、支援環境が整わない。
塾があっても距離が遠く、送迎が困難

相関関係が強く、
全体的な解決が必要

指導者不足

能力を発揮できる環境が無い為、優秀な人材が都市部に流出、
結果、指導者が不在に。
自宅学習では親の指導力に問題がある場合が多い

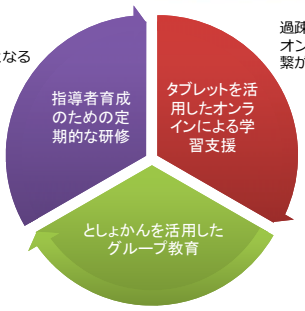
仲間がいない

周囲の仲間が少ない上、勉強に力を入れている仲間も少なく、勉強しているとかえって仲間外れにされるケースもあり、モチベーションが上がりづらい

取り組む学習支援事業の概要

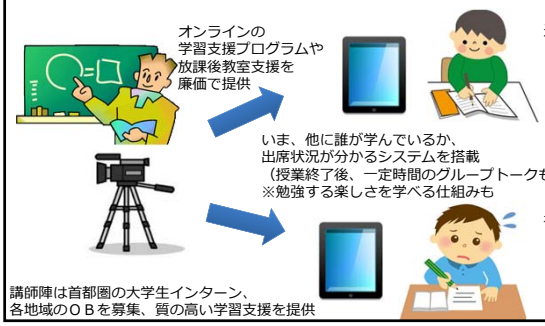
次世代の地域の指導者となる
若者の育成

過疎地でも学べて、
オンラインで他の仲間と
繋がっている環境も提供



定期的に仲間と実際に会い、共に学ぶことで切磋琢磨出来る時間を提供

事業のスキーム（オンライン）



講師陣は首都圏の大学生インターン、
各地域のＯＢを募集、質の高い学習支援を提供

事業のスキーム（としょかん）

学習支援の拠点を作りづらい地域において、各地の「みんなのとしょかん」を活用し、オンラインだけではない、顔と顔をつき合わせながら学ぶ、グループ学習を定期的に開催

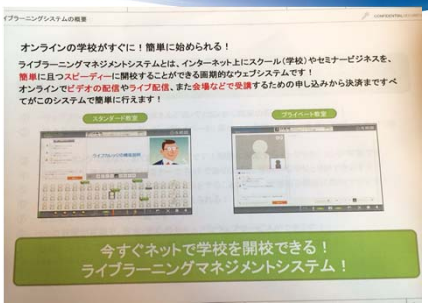
オンラインで学ぶ
子ども達

オプションで送迎
サービス

オンラインだけではなく、
としょかんを活用し、
仲間と共に学ぶ機会を提供

サポートは地元大学生の協力のもと行う。
定期的な指導者ミーティングや研修会も
開催し、将来の指導者を育成

活用するシステムについて



当初はライブラーニングマネジメントシステムをＯＥＭにて活用
40名までの同時授業・ライブ配信及びビデオ配信・パスワード配信による授業も可能
ニーズによっては、オリジナルシステムの開発も視野に入れる

講師に関する連携先

国公立大学の教育学部等

ＮＰＯ法人ティーチフォージャパン
次世代の日本社会を担う若者を
教師として選抜・育成。
少なくとも2年間にわたって正規の職員として学校現場に派遣し、
学校現場の課題解決を推進するプログラムです。
※詳細については現在調整中

研修プログラムとして、オンラインによる
学習支援活動を展開
また、定期的な現地訪問による、グループ
学習支援と子ども達とのコミュニケーションを
実施

- **やる気があり**
- **将来の指導者の育成も兼ね**
- **対象地域の経済的な負担が少ない**

※サポートとして朝日学生新聞社と連携し、読者ＯＢより地域指導者（チューター）
を全国各地で募集、細かなフォローも行うと同時に教育の地域循環を目指す

まとめ

まちをげんきにするためには

①自分一人では出来ない事を理解し、地域の人の力が不可欠であることを伝える。
（劣後順位を決める）
②主役は誰か？を考える（少なくとも自分ではない）
③何かをつくるプロセスとゴールを重視し、参加者全員で共有する
④３年後のイメージを描き、どうすれば継続できるかを考える
（継続できる仕組みづくり）
⑤ある程度考えたらとりあえず行動してみる
（動かなければ分からないものがあるし、
動けば誰かが見てくれます）

うさぎや製『キモノのココロ』
ーハジマル・ハジケル・ハジモカクー

「うさぎや」店主
大竹麻実恵

司会

会長から一言ご挨拶をいただいて、始めましょう。

中川会長

今日のお話が今年度の公開講座の最後になるわけですけども、地元足利で活躍している大竹さんにおいでいただいて、これまた足利で、誇りとなっている「銘仙」のこと等についてお話しをいただくということで大変楽しみにしております。足利の事情については、いろいろと、身をもっていろんなことをご存じだと思いますので、その辺も教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

大竹講師

知っているなんてとんでもない。こちらこそよろしくお願いします。

司会

それではさっそく、お願いします。1 時間ぐらいお話しいただいて、あと 30 分ぐらいを意見交換にして 8 時半に終わりということでやっています。よろしくお願いしたいと思います。

中川会長

今日は本当申し訳ないんですけどね、これだけ人が集まんなくて。

大竹講師

慣れない事なのでかえって助かりました。

司会

人数少ないから、アットホームな感じで座談会風にいきましょう。よろしくお願いします。

1.「うさぎや」を始めるまで

大竹講師

お願いします。

1 時間続けて話を聞くにはたぶん苦痛だろうと思って、何を用意したらいいのか、本当に皆さんが聞きたいのは何かというのが、まったく分からなくて。

今日お伝えしようかなと思っていることは、世の女性たちは、こういうことに楽しみを覚えて動く、という事なんです。私も一応女性なので私の知っている範囲で。

ただ逆に教えていただきたいなと思うのは、「男性が、どういう部分に誇りをもって、地域にしても、自分のお仕事にしても、どの部分をふだん考えて、お仕事されているのか、生活されているのか」ということを会話のなかで教えてもらえればいいなと思うんです。というか、同じ銘仙に対しても、年代の違う男性の視点ってどうなのかなっていうのが実は気になるところなので。

さて、私がこの石畳界隈＊に来ることになったきっかけというのが、「うさぎや」という、着物を扱うお店です。

＊足利学校から鑁阿寺に向かうまでの石畳通り、足利市大門通りが住所、昭和レトロの建築物が多く、観光地らしい雰囲気があります。【アンティーク着物ショップ　うさぎや】足利には、足利銘仙という織物があるのですが、このお店では、タンスに眠っているような古い着物を販売、リメイクで洋服のオーダーができます。http://www.soba.info/access.html など参考

実は、うちの父親が骨董・古美術商をやっておりまして、私たちは小さいころから白い器を見たことないような生活でした。家の生活雑器が骨董品で、器1つにしてもちょっとボテッとしている染め付けのものとか、いわゆる伊万里焼などでした。

弟は、近くのヤマザキデイリーストアの「春のパン祭り」でシールを集めるともらえる白いお皿を楽しみにしていたんですね。白いお皿が欲しくて弟はパンを買い続けたんです。

古い器は身近にはありました。そういう環境ではあったにもかかわらず、「これが古い」とか、「これはいい味出ているね」とかいう興味はなかった。

一般的に育ってきたつもりではいるんですけれども、祖母の時代から商売をしていますので、人を集め、人に喜んでもらうことを常日頃、掲げているような家族でした。サービス精神が旺盛すぎて、しつこく煙たがられるくらい何かこう、人のためだったら動ける、みたいな。

足利の中心市街地にある「うさぎや」、今12年目くらいですけど、もと新聞屋さんでしばらく空き店舗だったんです。

元々骨董つながりのお付き合いのあった方から、あの通りの店舗が空きっぱなしではと、そこで何かできないかっていう相談があって、「足利で必要とされるもの、足利に来てあったらいい思う店は何かと言ったらやはり織物関係じゃないか」と、提案していたつもりが、結局自分（父）がやるはめになっちゃって・・・。

特に、織物の知識はなかったんです。普段はお皿とか、掛け軸など道具類中心でしたので。足利で骨董業をやっている女性がいて、道具と平行して布関係も扱っていたので、その方にお任せしてやり始めたのが、2001年でした。その頃私は都内に出ていましたので、うさぎやオープンから5年間は足利にいなかったのですが、足利へ戻るきっかけがあったときに、たまたまお任せしていた店長が家庭の事情で辞める事になってしまい、交代というか、父に「(店長が)いなくなっちゃうから、お前ちょっと見てくれないか」と言われて。

布には興味あるけど、今更親に引かれた道を行くのには気が引けて、もうしょうがなく「1 年間だけね」というところから、本当にしぶしぶ始めたというのが事実、しかも、その頃の私はまず「銘仙＊」というものが足利の織物であることも分からなかったし、「足利が織物の町」ということしか知らなかったんです

＊銘仙は、一般にいう“平織りの絹織物”です。大正から昭和にかけての女性の普段着として、また、お洒落着として日本全国に普及しました。 経糸（たていと）と緯糸（よこいと）を交互に組み合わせる織物ですが、銘仙は、経糸の色と緯糸の色を故意的にずらすことで、色の境界がぼけるような柔らかい見栄えとなり、これが当時の流行となりました。この織りの技法を「絣（かすり）」といいます。www.ashikagadouraku.jp/銘仙とは/

小紋なのか、訪問着なのか区別はつかず、きらびやかな成人式や七五三くらいでしか着物のことを分からないような知識でした。お客様に「それはなんですか」とは聞けないですし、とにかく毎日不安で。私が出勤して2日目のエピソードですけど、電話で、「留袖がありますか」って言われたんです。留袖って結婚式のときに親や親族が着る、紋付黒地の裾に祝い柄がついているようなものなんだけど、それが分からなくて、「あるとは思いますが、お客様の気に入るものが揃えられるかどうか、電話だとお応えで

きないので、お店に来てください」と言って、その場を逃げたんです。そして電話を切ったあとに留袖がどれなのかを周りに聞いて、実際に、2、3着ぐらいしかなかったので、よかったと思いながら、うちにある留袖はこれ。という様なスタートから、掃除をしたり、着物をたたんだり、そんなことをしながら、日々お店を開けていたわけです。

２.「銘仙」との出会い

この仕事で特殊なのが、仕入れ方です。うちは古物商ですので、ほぼ競り市で仕入れます。このように人（業者）が集まったところに品を出して、いくらからかスタートして競って買う。自分で欲しい金額を定めなきゃいけない。金額を定めるのは物を知らなきゃ分からない。物が分からない私は、安くて誰も声が出ないものにしか声が出せない。誰もいらなくて声が出ないところに、『はい』と言えば買えるものを買って、後でそれはなんなのかを聞いたり、いくらにつけたらいいのかを聞きながら、前の店長が残してくれた店にある在庫でしばらくは過ごして、自分で買えたものを足していったわけです。

そのなかに「銘仙」がありました。それがなぜ買えたかというのも分からなくて、ただ、自分のなかで単純に、「可愛いな」と思えたり、「面白い！」と思う柄にもかかわらず安いから仕入れられた。なぜ安いかは不思議だけど、まずは買って考える。

そんなことで、「これが銘仙、これは違う」というふうにしているうちに、「あっ、銘仙というものがこの地域の産物で、こんな面白いものを作っていたまちなんだ」ということを初めて知ったわけなんです。

そこから、「アンティーク着物、古い着物というのが、なぜ魅力か」を考えたときに、私にとって「銘仙」が外せないものとなりました。

今、『着物』といったら、「お祝いのときに着るもの、日本の民族衣装」というふうな答えが出ると思います。普段着には登場しないものと思われていると思います。でも、皆さんのようにスーツやシャツを着ているそのものが着物だったとしたら。

「銘仙」を調べると大正、昭和初期を中心に、ほとんどが戦争より前のものだということと、「洋服」を着始めたばかりでまだ洋装をする人が少ない頃の着物でした。ということは、その時代では銘仙などの「着物」が生活着なんですね。だから、肩の力が抜けて、私にも扱いやすい着物なんだなと、自分のなかで徐々に、『銘仙』というものがすごく大事になってきたわけです。気が楽になるものは人にも伝えやすいし、自信を持って「気兼ねなく着れますよ」ともお伝えできる。

３．着物イベント『足利道楽』の誕生

ある時、大それたことを発言したんです。私がうさぎやに通い始めて何カ月めかのことなんですけど、足利ではないところである方に『足利のまちを、着物でいっぱいにしたいんです、私』と言ったんです。その方はあらゆることを有言実行、即座にやっていく女性の方で、『あらいいじゃない、やりなさいよ』って言われて。

『はい、やります』と言いつつも、そのとき計画を立てたわけでもなく、ただ、「うさぎやから見ているあの石畳の道が、もし着物でいっぱいになったら楽しいだろうな」「足利に行くと、着物姿が古い着物で街なかがあふれてたら、ちょっと面白んじゃないかな」っていう、軽い気持ちで言った

ことが、最近なんとなく現実になってきたみたいです。

ただ、そうした思いはずっとあっても、「どうやろう」とか自分から何かをやりだすつもりはなかったんですけど、思っていると、やっぱりそういう話って向こうから来るものですね。あるとき、商工会議所のとあるプロジェクト担当の女性の方が来て私の話を聞いてくれたんです。それが銘仙を着て町を歩くというイベント「足利道楽」のきっかけとなりました。

私はたまたまその数日前に、自分の友達と話した、「こんなことがやりたい」と言う内容をそのまま話したんですね。それが、「ある日、ある時刻に、銘仙を着た人たちがわあっと急に集まって、自分の好きな時間に帰る。日にちと時間だけ決めて、着物を着て遊ぶ仲間が増えたらいいね」ということと、それに名前をつけて。「銘仙で遊ぼう」で『銘仙ごっこ』。

そんな話をしたら、『それやりましょう、大竹さん、ぜひ。』と言われて、数日後、会議に呼ばれたので、早速私の意見をすくい上げてくれたと思い、『あのことが実現できるかも』と席に着いたら様子が少し違っていた。

声を掛けてくれた女性は、実は 10 年前からそうしたイベントを組み立ててやっている人だったんです。やり方は違いましたが、「街なかで着物を着せて闊歩する」イベントをやってきて、ちょうど 10 年目くらいで芽が出てきたころの話でした。それは都内で成功したことで、それを足利でもやろうかという話のところで、「協力をしてほしい」という話だと会議の途中で分かって・・・。

自分がもう完全に勘違いをしていたから戸惑いましたが、そのイベントの実行に関わることにしました。

B 氏

その方は，M さん？

大竹講師

はい、M さんです。まずどうやったら、大勢の方に着物を着せれられるか、何人に着せるのか、そのために何をするのかも分からないまま始めて、1 年目は準備が間に合わなくて、裏方はひどかったです（笑）。

それまでうさぎやでは銘仙を販売していましたので、在庫は多くなかったんですけど、夏にお話があって『じゃあ今秋にやりましょう』って、それから銘仙を買い集め「何着集まるかな」というところからイベントの募集人数を決めたんです。ただ銘仙は戦前の着物。サイズも小さいし、全部使えるかどうか分からない。結局、子どもも含め 100 人にちょっと欠けるぐらいかな。70 人の大人と子どもが 30 人ぐらいだったと思うんですけど、そのイベントをなんとかやったことが、その後の活動のきっかけになったとは思います。

参加した人も協力してくれた人も、「今年やりきれなかったから、来年はちゃんとやりましょう」という話になり、2 年 3 年と続いてくんですけど。

自分の企画ではなく市全体のイベントとしてやることは、大きい数字や制限があって慣れないし苦しいわけです。なので次は「うさぎやイベント」としてもっと気楽に『銘仙ごっこ』やろうと考えました。

子どもを連れてきてもいいし、お友達呼んでもいいし、ごはん持ってきたら公園で食べればいいし、ミュージシャンだったら、うちの縁側のところで演奏してもいいし、『章太郎さん』という人力車を引く友人にも協力してもらって、人力車も出して、あんまり規模を大きくしないで「最低、私た

ちスタッフだけでもやろうね」ということで声をかけて、「2 人でも 3 人でもできることをやる、たまたま大きくなったらそれなりにやりましょう」ということで、「気軽に来れるときに来てね」って声をかけたら、最初 70 人ぐらい集まっちゃって、スタッフは、朝から晩まで着せるばっかりになって、大変だったけど思いっきり遊んだわけです。

その『銘仙ごっこ』がきっかけで、着物を着たくなった人たちが案外といて、「これは面白いな」と思ったんです。なにが面白いかいうと、『銘仙』って足利の地で着ていると、「これ銘仙だね」ってある程度一定の年齢より上の人は男性でも分かるじゃないですか。そうすると、声をかけてくれるんです、知らなくても。声かけられた人も自分のことじゃなくて着物のことだから、自然に受け入れられて、自然とコミュニケーションがはかれる。そうすると、会話が 5 割増しぐらいになる。観光に来ただけとか、遊びに来たりした人が、声をかけられる率って少ないと思うんですけど、銘仙の着物を着ることで、なんとなくなんかこう、ほんわかした、受け入れやすい空気、入りやすい空気になったりしたことが、現象として本当に面白いなと思いましたね。

人によっては、ずっと心のうちにためていた銘仙の嫌な思い出もあるんです。それを仕事にしてた人たちは、女性が毎日毎日朝から晩まで働いて、ごはん食べる間もなくという思い出が。行田に行けば足袋屋さんも言うんですけど、「いいことばかりじゃなくて、大変な時代だった」とか、「そのことを知らない世代に話そうとしても聞いてもくれないからずっと黙ってたんだ」とかですね、そうした思いが溢れるように出てくるわけです。

それで、興味があるから聞いてくれる人たちがいるし、銘仙を仲立ちに異世代の交流が、毎回増えてく感じで、まちの人にとって嬉しい企画だなっていうのを確信したのは覚えています。

そんな感じで、イベントっていうのはコミュニケーションのきっかけになったり、ハードルが低いことで知らぬ間に交流の輪に入っていたということが、その次の、階段を上がる一歩になると思うんです。

そういったものを少しずつ種まきしてったら、いつのまにか楽しいまちになってる。そんな風にまちづくりができたらと思う中、今、石畳で商売してる若い世代が増えていて、物忘れがひどくて、だいぶ抜けている私ですが、周りのできる方たちと一緒に、少しずつですけど、いい形になってきていると思います。

その辺の輪が強まったのがここ 3、4 年でしょうか。今年は市との協働事業で 2 年目になるんですけど、「石畳界隈の未来を一緒に考えよう」っていう事をやっていて、そこに私も参加させてもらっているんです。そこには異業種だったり、伊勢崎から来てる人、太田、宇都宮、県庁や市役所の人も一市民として参加しているなかで、いろんな世代が混ざっているのは珍しいとか。

まちづくりのワークショップでやっている大学の先生が来てくれて、「一般に、30 代か 60 代前後でひとかたまりになってしまって、ほかの世代の目線のを同時に交換できる場所が少ないことが悩みだ」そうですが、足利はそれをはるかに超えて、高校生から 80 代ちかい 70 代だったかな、までが、一緒に、今楽しくやっているのです。

今年は「その地域にあるもの、その地域にいる人、その地域にあるもの」をワークショップで作る冊子ができます。参加する

人たちがテーマごとに調べて取材して作る足利では新しい取り組みです。そんなこんな、楽しくやりながら、今を過ごしてます。

４．うさぎや製「キモノノココロ」

では、これからスライドを使って、絵を見ながら話をさせてもらいます。

今日のテーマは『うさぎや製キモノノココロ』ということで、格好いいことを言っていますけど、ただの持論です。

「始めて始まって、知ると、はじけて、はじけすぎて恥をかいて、また新しく覚えて始まる」というか、ずっとそうした循環がある。経験しているなかで、「これを繰り返して、今がある」と思っているので、これを少しお話しします。

１）始めるために必要なもの

皆さん、何かが始まったり、始めるときに必要なものって何だと考えますか？

突然の質問だと難しいですね。私が思う必要なこととは「興味」だと考えています。

小学生を含む子ども対象に、映像のワークショップをやったことがあるのですが、まず参加者を集めるのが大変でした。

「これならいけるな」と大人が考えた計画に、簡単には子どもは乗ってくれない。企画の本筋まではほど遠い、出鼻でつまづき仕切り直しをした事があります。

これには「きっかけ」が必要になってくると思います。先程話した、「足利道楽」という着物のイベントもそうだと思います。この辺だと鎧行列や花火大会などの地域の行事やイベントなどもそうですね。友人に誘われたのをきっかけに、自分がはまっちゃったり、はたまた事業で始めたり。

着物は、女性にどうしても偏ってしまうイメージはあるんですけど、男性や子どもさん、誰でも楽しめるものです。

ある中学校の先生に相談を受けて、選択授業の１つに「着物を着る体験をしたい」というお話をいただいて、中学 2 年生 14 人を２回に分けて銘仙を着せ、ちょっとした作法を話した事がありました。それは着物を着るだけで充分効果がありました。

学生さんたちにはちょっと強引に引き込まないと参加するきっかけにはならなかったりするので、授業にイベントを入れてしまうというのは、この先いいか方法かもしれないと考えています。

２）石畳の週末イベント「う・サロン」

すべてにおいて、「きっかけ」が日常生活の延長線にある方が入りやすいなという実感があります。

「うさぎや」では今年の１月から『う・サロン』といって、うさぎやでサロン、お茶飲み会みたいなものを始めました。市内の北郷地区にある「ふくしまや」という和菓子屋さんの３代目とまちづくりのワークショップで知り合ったんです。「石だたみの会」のメンバーである同世代の子に『たぶん「うさぎやさん」に、合うと思うよ』と言われて、紹介してもらいました。会った瞬間、「この人とだったらやれるな」と思い、軽いノリで一緒に何かしようって。

右と左にあるのが、うさぎの形に見えますか？あれがね、マカロンって知っています？フランスのお菓子ですけど、それをうさぎ形にしてくれた、「うさろん」。スライドの右側にも「うさろん」とありますけど、あんなかたちで毎月味を変えて、第１土曜日を『う・サロン』の日としました。

福島さんが北郷の自分の店ではやれないことを石畳に出てきて挑戦してみたいという気持ちと、私たちはうさぎやの喫茶部門

の売上が伸び悩んでいて、「うさぎやでも喫茶ができる」ということを知らせたいっていう、お互いの利点がかみ合って始まったんです。

最初はなかなか人も集まらなかったのですが、私たちに福島さんを紹介してくれた「mother tool」さんと、伊勢崎のパン屋さん、「C&B」というコーヒー屋さんのやっている、毎月第1土曜日の『ハレノヒカフェ』に合わせた事で、お互いのお客さんに行き交って知ってもらいつつ、中身がどんどん更新されていくっていう感じで。

夏にはマカロンが暑さに弱く溶けてしまうので、夏のう・サロンをどうしようかといって、和菓子屋が本気のかき氷を始めたんです。浴衣を着て7月から9月のお彼岸までやりました。

これも、挑戦ですね。どういう風にお客様へお菓子やサービスを提供するのか、私たちの「喜び」が、お客様の喜びでもあるかどうかということ、器やしつらえ、材料も一緒に考えることでお互いのお店同士、向き合うことができました。

夏のう・サロンはだいぶ好評で、かき氷の季節が終わってしまうころに、ものすごい火がついて、高校生とか小学生までも来てくれた。今回の企画を踏まえて来年に向けてやっていこうと思っています。

３）ハジケル勇気

それをやり始めたら、ちょっとはじける事件がありました。はじけるために必要なもの、これは、勇気だと思います。やったことがないことでも少しかじると、なんでもできるような気がしちゃう。小さい子は特にそうだと思うんですけども、そうした気持ちが大事かなと常日頃思っています。「ちょっとやりすぎかな」というものを、やるかやらないかで迷ったときに、「怒られたらやめる。」と決めてやってみる勇気。そうすることで怒られて初めて、「ここまではOK」と境界線を引いてルールを覚えていく。昔の子どもの遊び方と同じ、いろんなものに挑戦してみよう、と勧めます。私自身、うさぎやに来て「怒られた」経験を相当してきました。その失敗があって今がある。失敗は大事な経験。

①『謎の梅子さん』の失敗

これはかき氷の失敗例ですが、写真の一番左が『謎の梅子さん』です。ちなみに私たちのネーミングは全部さん付けにしていまして、いちご、もね、大切なものを、材料使わせてもらっているので、敬意を表しようということで。

C氏

蚕も「おかいこさん」と、言うなぁ。

大竹講師

そうそう、そういうことです！

「苺さん」とか「梅子さん」とか、いろいろさん付けしたなかで、通常の梅子さんはとってもシンプルでおいしいんですけど、そこに「赤しそ」のシロップを加えて、なかに水羊羹を入れたんです。

それを「謎だから、何が出てくるかお楽しみ」と言って、お客様にあえて黙って出したら、一番最初に食べてくれたかたが、まるまるその水羊羹を残して帰られたんですね。びっくりもしただろうし、お口に合わなかったというのもあったんでしょうけど、結局のところ、私たちの名も知れてないうちに「謎なこと」はやっちゃいかん、ということを身をもって体験した一例です。

②反省して改善

次の佐藤錦は、材料があまりにも高いので、やるかやらないかが一つ目の壁、二つ目はシロップ。一日漬け、二日漬け、三日

漬けと、この写真で泡を吹いているのは三日漬けで､味はいいけど色と見た目が悪い。さくらんぼは生が一番おいしい、という答えに全員一致。でも、実際佐藤錦は大好評でした。やったことで分かった、手をできるだけ加えないさくらんぼシロップ、これは来年もやります。

かき氷の時期だけは第一土曜日以外に平日が増えて、週１ー３日毎週やりました。シロップも主役（メインメニュー）のほとんどが生もので、その日限定にはなるんですけど、自分たちも（お客として）食べたいし、一度に来られても対応が大変で。その日その日の反省会が欠かせない、夏のう・サロンでした。

③銘仙を着る、使う

写真の真ん中のメガネの人が福島さんで、一番右手が私、一番左がスタッフ、3 人で浴衣を着て、接客をする。何かをやるときは着物、夏場は浴衣で雰囲気作りをしています。

真ん中の写真で彼が持っているのも実は銘仙のはぎれです。銘仙は垂れていると目に入るので、ひらひらしたところに一言メッセージを付けると、それに誘われて入ってくる人がいるという一例です。

右側の「のほほん茶会」は、先日行われた市の取り組みの着物イベントですけれど、前の公園で接客して出している子、初めてその日に銘仙を着て、お茶を出すというお手伝いをしてもらいました。足利で銘仙を着てお茶がのめる。そういう場があるだけで、観光で行き交う人たちにも自然に立ち寄っていただけます。右側に座っている 3 名様は一般の方です。イベントのために開いていますけれど、一般の方も受け付けました。好評で、休みなくお茶を点てることになりました。

④恥をかいて得る

恥をかくという場合はいろいろですけれど、恥をかいたときに必要なものは、素直さが一番だと思います。お店なので、ご近所に住んでいる方たちと、どうやってうまくやっていくかという課題がありました。うさぎやに通い始めてから、私のできることは挨拶しかないと思って、とにかく目が合ったら大きい声で挨拶。挨拶なら自然なことだし、私も気持ちいい。ずっと続けてきて、だんだん顔を覚えてもらい、受け入れてもらえる感じがあって、ついに調子に乗って失敗しました。

GW の時期に銘仙を着て遊ぼう。という企画で人を呼んで、公園を使わせてもらって、音の出るイベントをやったんです。最初は、ギターとか笛とか、心地良いものだったんですけれども、なかに太鼓を持ってきた人がいた。それも地べたに置くタイプで。さすがに､「これは大丈夫かな」と不安でいながらも言えなくて、みんなを盛り上げてそのままやっていたら、案の定、

「もうちょっと考えてくれないか」と、近所の人に怒られました。

それから、ある年越しのお正月の例ですが、大晦日の夜、近くのお店で和太鼓の演奏をしてきた友人が、初詣前にうさぎやへ寄ってくれて、年明けの一曲を演奏してくれ盛り上がりました。まあ、お正月だしこのくらいだったら大丈夫だと思っていたら、お詣りから戻ってまた演奏を。しかも今度は、3 曲くらいやっちゃったんですよね。さすがにうさぎやのガラス戸一枚じゃ、外にどのくらい響いているのか心配で心配でたまらずにいました。

そうしたらものすごい勢いでその戸が開いて､「大竹さん！前にも言ったよね（怒)」心の中で（あのときは昼でしたけどそうで

す、初めてではありませんっ）と思いつつ、謝るのみ。でもそれはもう当然のご迷惑だったので、怒りに来てくれてほっとしたくらいですね。

いくつになっても頭を下げっぱなしの毎日です。叱られるのが恥ずかしいのは当然ですが、言ってもらって初めて分かることも多くて、叱ってもらえる距離感というのは、ものすごくありがたいと思いました。

私は基本的に前向きなので、私に対するだけじゃなく、「地域に対する愛情だな」という思いも強かったです。

自分自身の意思を持ち、住んでいるまちそのものも大事に考えている方が多いあの地域で、本当に私も成長させてもらっていると思います。そしてご近所さんとの関わり合いというのは、自分の人生にとってかなりプラスになっています。

５．銘仙の可能性について

１）銘仙の七夕飾り

それでは角度を変えて、今までとは違った銘仙のあり方です。写真の左から、「七夕飾り」など、いろいろと作られていますが、材料は全部「銘仙」です。

銘仙は生活着なので状態の悪いものが多く、汚れて着れなくなったものをどうしようか考えていたときに、柄もきれいだし汚れた部分を省いて何かの材料に、ということ切り売りを始めたんです。

さらに、七夕の飾りだったら、ちょっとくらい汚れていても目立たないし、何より捨てずにすむ。

この写真は織姫公民館の０歳児のママさんたちを対象にやったワークショップですけど、外で雨風に吹かれても保つように、木工用ボンドを薄めた液体に布を浸してアイロンをかけ、ちょっと防水した状態になっているものを準備し、切って貼って繋げて飾りを作りました。すごく華やかでいいものができたと思います。

このワークショップをやるに当たって七夕祭りを調べてみると、昔は女工さんたちが、織物がうまく織れますようにという願いを込めて布を飾ったり、字がうまくなりますようにと紙に願いを書いたりということが分かって、時代を振り返るキッカケになりました。

２）銘仙のデザインを生活へ取り入れる

真ん中の写真には「空間」とありますが、うさぎやの隣、今年できたお香屋さんの２階でここがストックルーム兼イベントスペースになっていまして、銘仙のはぎれを白い壁にふわーっと横に並べてバシバシ壁に貼ったものです。ちなみにあそこの角は西向きでして、足利の夕日をイメージして作ってみたのですが、大きなスペースをこんなふうに色で表現するという展示にも、材料としての銘仙は活躍してくれています。

写真の一番右は「ファッション」。こちらはハンチングの帽子で女性向きな柄ですね。でも左の壁にあるものから選ぶと、男性に合うものも出てきたりします。

「銘仙」を「まちの材料」と考えて、着物を着ることだけではなく、「自分の生活への取り入れ方」を考えると、意外なところにも入り込んでくるものだと思います。

３）和菓子と銘仙

これは今、続いているものです。「う・サロン」のサロンで、「うさろんさろん」ってなっちゃったんですけど、今回ふくしまやさんが思い切った銘仙柄のお菓子を作ってくれました。左の写真がお菓子です。

「のほほん着物さんぽ」のときに銘仙を

イメージした主菓子を作ってもらったのですが、1 回目は本物の花びらを練り込んだ練り切りで、それは白地に花びらがふわっと混ぜ込んだ可愛いらしい柄だったんですけど、印象が弱かった。きれいだけど物足りない、というダメだしをして、次の日に出てきたのがこれでした。

「これは完全にパクリなんです」と指を指した銘仙がこちらです。うさぎやの壁にかかっていた銘仙柄を再現しただけだと。

味がおいしいのは当然にして、断然こちらのほうがインパクトも強いし、「見た目が大事」ということが、銘仙という織物の「心」の部分に、すごくリンクするんです。

まず、銘仙のあり方が、質よりも印象、デザインの斬新さ、思い切ったことが反映されている織物なので、その心にとてもマッチしたお菓子ができて、これは商品化したいなと考えているところです。

A 氏

まだ商品化していないんだ。買おうかなと思った。

大竹講師

値段がなかなか決めにくくて。

練り切りで、中にあんが入っているお茶の主菓子なんです。

A 氏

そのお菓子、どれぐらいの大きさですか。

大竹講師

このぐらい。

A 氏

確かに、値付けは難しいね。いくらだったら買うかな。

B 氏

4ー500 円！ゲンロクになっているから、作るのは面倒くさいんだ。

大竹講師

そう、技術が分かる人だったら、その価値が分かるんですけどね。

A 氏

目で楽しんで食べる。

大竹講師

これは自分で食べるだけではなくて、差し上げたら相当喜ばれると思う。一応、250 円から 300 円の狙いなんですけど。

A 氏

2 つで 500 円ぐらい、そんな感じだね。

大竹講師

そうですね。それがいいでしょうね。ただ、都内だと 360 円から 500 円が普通になってきますよね。密かに考えているのは、私が言っちゃっていいのか分からないですけど、これが、世界に、海を渡るつもりで作っているという、大きな気持ちではおります。

B 氏

ジャパン・クールでいけば、ひょっとしたらもすごく評価を受けるかもしれない。中途半端な評価じゃなくて、1 個 1000 円とか、ドンといっちゃう手もあるかもしれない。

C 氏

福島さんは二代目かな。

大竹講師

三代目です。おじいさんが干菓子の職人さんだったそうです。お父さんの代でおまんじゅうなどに進出して。彼はイタリアに料理人として 5 年くらい修行に行って、戻ったけど、少し経ったら足利の地からは、出て行こうと思っていたんですって。いろいろな理由があったそうですが、偶然の出会いが重なって、今は足利で骨をうずめる気で頑張っています。

彼の場合「このお菓子はすごい物なんだ」というふうに打ち出さないところが、相手にとって受け入れやすいんでしょうね。

でもやっぱり、「安過ぎるんじゃないの？」というくらいのほうが、もしかしたらヒットするかもしれないじゃないですか。

４）時代を超える銘仙

大竹講師

そんなこんなで、スライドショーのほうを続けます。

たとえば、私たちもそうですけど、「銘仙を着せたらいいんじゃないか」ではなくて、「一つの材料として、アイテムとしての銘仙」でいいのではないでしょいうか。

ある人にとっては「銘仙」は要らないものです。特にアピールもしたくない。だけど、地域との関係性や、銘仙を知らない世代の人が身につけたときのあの表情を知ってしまうと、面白くて止められないのも事実で、私は１年で辞めると言っていたのが、すでに８年続いてしまっています。だんだん面白くなっちゃったんですね。

この写真（銘仙）は、恐らく昭和 12、13 年ころ、80 年くらい前の物ですけど、この柄を誰が考えて、どのような人がオーダーしたのか、誰が染めたのか、誰が織って、縫って、どんなときに着たというふうに、ものすごくたくさんの人が関わっているものです。

今の物でも、そういった工程があるものもありますが、銘仙を通して、この時代の人と、会話しているかのような錯覚に陥るときがあるんです。これがあったころは何がはやっていたんだろうとか、世の中の様子や戦前の流れ。

C 氏

戦前はね、はやりと言うよりも、皆当り前に着ていたんだから。

大竹講師

着物だけではない昭和 12、13 年の世の中の流行です。たとえば、カフェがはやり始めたのが大正だとすると洋風文化どんどん入り込んできて、洋服に憧れを持つような時代じゃないですか。

でも、銘仙は洋服に負けまいと頑張って、まだまだ着物でもいけると踏ん張った。でも明らかに変わる、黒電話からプッシュに変わるとか、携帯電話になるとか、そのぐらい大きく時代が変わる瞬間にいたものが銘仙だったわけだから

C 氏

昭和 30 年代までは女性は着物を着ていましたよ。少なくとも、初めの前半くらいまでは。高度成長で、三種の神器なんかが出たした頃は、もう一斉に着物から洋服に。

B 氏

足利はね、着物の生産をやめたのが早い。

５）銘仙から見た足利の地域性

大竹講師

私も経験上分かってきたことなんですど、足利は見切り、あきらめが早いです。プラス、すごく先を読む目がある。

要は先を見る目があるから、やってみて、結構器用にできちゃうから、欲がない。一番にやったという満足感を得るのはいいけど、それを続ける努力がちょっと足りない。そのかわり、人間らいしというか、私の中で面白さは足利が一番かな。

銘仙にも地域性が出るんですよ。

伊勢崎は、すごく上等な銘仙を作る地域ですね。伊勢崎は華やかな柄でも斬新な柄でも真面目にきっちり織る。大変なことも全部やる、手を抜かない。川で繋がっていますけど、秩父、八王子と、所変わるとまた違う。秩父は地味ですごく真面目。

足利は、つまらないのは嫌、だけど大変なことは続かない。だから、変わった事を

ちょっと加えて、面白いものを、と考えた。と、これは私の憶測です。この半併用がそれを語っていて、この発想力とか行動力は、私は愛嬌があっていいものだと思っています。

どれがいいのか、これは完全に好みにもよるので、私は決して足利が一番だ、とは思わない。その人にとって、どこの地域の銘仙と波長が合うのか、意見が合うのか、やはり物って好き嫌いがあるし。足利で伊勢崎銘仙の型紙を作っていた人が、私は伊勢崎銘仙しか作りませんと言っていました。自分の仕事に誇りを持ってやっている方たちはどの地域にもいたし、手を抜く人もいたでしょうから。そこは別に否定せず、ただ、これで生計を立てていた時代から、明らかに今、時代が変わってしまった。

でも幸いなことに伊勢崎も秩父も、機屋さんが残っているわけです。でも足利には残ってない。ところが、足利でイベントをやってみて感じたのは、地域の受け入れがいいということです。

私、今日は着物にブーツで来ちゃったんです。このようにきっちりしていなくてもどこか認めてくれるというか。

もちろん足利でも「やっぱり草履のほうがいいわね」と言われる事もあるけど、「こうでなくてはいけない」「have to」があまりなくて、「こうしたい」ということが叶うまちだなと思いました。

B 氏

そう言えばそう、あまり形式的なことは言わないかな。

C 氏

うん、言わないね。

大竹講師

見方とか聞き方、受け入れ方にもよるのですが、前向きにとにかく楽しく過ごす。

B 氏

「柄」って言ったけどね、意匠登録をしない。やっていると遅れちゃうから。だから、どんどん人の真似して作っちゃう。

大竹講師

そうですよね。でも、私がこちらに来たばかりのときは、足利銘仙に関わる人たちみんな、自分たちの過去をけちょんけちょんに言っていたイメージだったんですけど、これはどこの地域もあることですね。

自分たちのことを卑下して言う性質もあって、そういいつつも足利の人は自分たちのことを意外と好きなんですよ。地域のこと。

B 氏

本当はね。悪口言っているわりに好きなんだ。

A 氏

一種の自虐主義なんだ。

大竹講師

それは、もうそろそろやめてもいいんじゃないかなと、私は思います。

C 氏

なかなか治らないと思うんだけど、さっきおっしゃったように、自分を大事にしているんだよね。人に合わせようとは決してしない。

大竹講師

でも、それがすごく今の時代にはぴったり合っていると思う。

C 氏

私はもともと足利が好きなんだけど、実にやりづらい。皆さんと付き合ってきて、地元の支持をなかなか得られないんじゃないかと思う。だから、尖がった人は外国に飛んで行っちゃうんだよね。銘仙も外国のデザイン、川島理一郎も資生堂でデザイナーは外国からとか。

大竹講師

過去のことは過去のことで、それがあって今があるのだから、これから先、自分たちに誇りに思っているということを、もうちょっと前面に出せていいと思うんです。でも実際出せるようになるのは、過去を知らない若者たちだと思う。彼たちの世代で、「ここは住みやすいんだよね」と言う人が自然に増えてきたら、「足利って実はそうなんだ」って意外に思えるんですよ。

C 氏

外からの血が入らないと駄目なのかな。今の若い人って、何歳代くらいをいうのかな。30 代 40 代だって、その親父、おじいさん、皆強いんだよね。30 代辺りが力を発揮できない構造が、まだ続いていて・・・。だから、その上がいなくならないと。

司会

それは皆さんおっしゃいますね。それにしても 80 代が元気過ぎて・・・・。

６）モダンな足利のセンスと気楽な銘仙

B 氏

僕が若いときに、相川辰夫っていうおじいさん、銘仙を残した人がまだ、生きていたんだ。そういうおじいさんから聞いたけど、第一次大戦の後、足利の織物は粗悪品が出たからけちょんけちょんだった。

それが、今の銘仙になって、評価がぐっと上がってくるんですよ。三越を中心にそれを売って、日本一になってくるわけだね、昭和 13 年がピークね。

さっき伊勢崎と言ったけど、当時、伊勢崎の人は足利を相手にしなかったんだ。だけど、足利のモダンな柄というのは、どこに行っても通じちゃう。

大竹講師

そうですね。伊勢崎からしたら、手を抜いていると思うもので人気が上がってしまうという・・・

B 氏

今度は伊勢崎が真似したんだよね。

大竹講師

伊勢崎はまた、「きっちりさ」が違うんですよ、本当に。すばらしいものを作っています。ただ、平面的です。

伊勢崎は色も、絵や写真のように、きれいに仕上げるんですよ。足利は、ちょっと雑だけど、立体的なんです。

B 氏

モダンアートになっちゃうね。

大竹講師

全部がそうかと言ったら、モダンアートは伊勢崎もやっています。正確さでは、伊勢崎が一番。足利は、自由さで一番だと思います。私はそれも評価の対象になると思うし、ほどよく肩の力が抜けるので、着ていて、着ている側の気持ちが楽なんです。「ちゃんとしなくちゃ」と思わなくて済むというか。

四角四面に収めるではなくて、着る側が自由を感じてくれればいいと思うんです。きっちり着たい人もいます。「うさぎや」は普段着のお店だから、ちゃんとしたものは実はないに等しい。キチンと着たい方には、うちの近くの呉服問屋さんをお勧めするんです。

その人に合ったものかどうかが大切で、全部のお客さんにヘコヘコして商売したくないというのが、足利の気質なのかもしれないとは思います。お互いが気持ちよくないと・・・、気持ちいいか悪いかは会話してもあるじゃないですか。

たくさんお金をいただいても気持ち悪い商いもあるし、それは嫌だから、本当に好きか嫌いかをはっきり言えるような環境に

できるように、努力しているつもりです。

C 氏

やはり足利は、安さというか、普段着で安直に着られる感覚が、大事なんじゃないかと思います。でも、着物を着たいという人はいるんだけど、まず、高いね。

それで、昔のしまってあるやつを着るのも、今度は、汚したら大変だし、雑に着られるようなものを持っていないわけだね。

B 氏

そういう意味では、全く気楽に着られるというのが銘仙。

大竹講師

今銘仙の着物を一から作ろうと思うと、やはり作れないものだし、高いものになってしまう。そうすると、普段着じゃなくなっちゃう。それは大島とか、結城におまかせして、銘仙は復活しないほうが、幸せかなと思うんです。

C 氏

昔の普段着はだいたい木綿だからね。地味で丈夫な木綿だけど、こういうのが安く出てくるといいけど、デザインが絣とかだから。

大竹講師

やはりおしゃれはしたいですよね。でも本当に、昔と今の明らかな違いは、お蚕さんの育つ環境が違うこと。桑の葉を食べて自然に育ったお蚕さんの糸と、人間が栄養を全部考えて、計算した餌を食べたお蚕さんの糸は、全然違うんですよ。丈夫でしっかりしてるのが今、昔はしなやかで、きゃしゃな、とにかく肌触りが滑らかでいいものなんです。それも節があったり、むらがあったりするものが手作業なので当たり前で、それが機械化されて、銘仙だって昔は斬新なものですから。でも、感触は全然違いますね。

C 氏

昔のやつは、相当ロスもあったんだって言うからね。今はロスがなくて、かなりいいものを取り出して作っているから、均一にできるようになっているけど。

B 氏

一番いいが、山繭。あれの場合は 600 メートルくらいの糸が採れるんだ、日本ではなかなか桑の葉を食べさせて作るというのは、もう今はほとんどできないね。今なんか、餌に色入れて、いろんな餌を食べさせて、着色しちゃうからね。

大竹講師

作る糸を餌で染めちゃう方法が海外でありますね。でも、それって虐待というか、人間のエゴで、そこを何にも考えていない。自分がお蚕さんだったらという気持ちになったこと、あるんですかね。

B 氏

たとえば蛍光塗料みたいなのを入れて、蛍光の繊維を作っちゃおうとかやっているから、ないですよね。

C 氏

お蚕さんだから、「さん」を付けて大事に崇めて。一番いいところに住まわせていたんだよね、昔はね。献上品でもあったし。

B 氏

桑の葉っぱを食べる音がね、シャリシャリとね。うちも裏が農家で、桑の葉を育てていて、お蚕さんが手の上を這うのが楽しみだった、小学生のころ。

柔らかくて気持ちいいよね。

７．着物文化の復活を

１）どうしたら着物を着るようになるか？

C 氏

足利で、いろいろご活躍されているイベントで着物を着る群衆を見ることもあるん

でしょうけど、ごく普通の日常で、着物を見る機会は、どんなのがありますかね。だいたい冠婚葬祭かな。

大竹講師

30 代 40 代のお母さんが、子どもの七五三をきっかけに着物を着ようかなと試みる。それを着ると、次は入学式も着ようかなと言って、数人が卒業式にも着るようになってきています。でも、私はもっと普段着にと思っていますが、「着ていくところがない」と、必ず皆さん言うんですよ。別に普段着って、今日は洋服じゃなくて着物にしたいなと思って着ていいものだから。そういう認識が少しずつ増えていけばいいかなと思っています。

でも今、着物が着たくて普段に着ている女子は増えてます。男性も。

C 氏

私もね、若いころからずっと着物着ていたんだけどね、うちでも。街中へ着物で出かけるんだ。

最近、朝のテレビ、着物着る時代のものが続いているんですよね。あれを見ていると、なかなかいいなと、でも、一般にはなかなか着ないですよね。

C 氏

僕も泥大島持ってんだけど、高いから着にくい。

大竹講師

あれは着つぶさないと着にくいですよね。

C 氏

着物っていうのは、着るほうも辛抱がいるんだよ、着なれるまでに。洋服みたいにちゃっちゃっと着ればいいんだけど、一枚の布でやっているだけだから、なかなか難しい。

大竹講師

今も着ているとおっしゃっていただいたのは、うれしい事ですが、全国の調査でも 5 年前くらいかな、男性の着物を着る率が 1%、だったかな。

C 氏

銀座の旦那衆もやっているよね。

大竹講師

今､鹿沼でも旦那衆たちがやっています。着たからどうってわけではないんですけど、私は、その 1%が 2%にならないかなって始めた。そこで質問。男性は、普段、着物を着る女性がいるとうれしいですか？

B 氏

たくさんの若い女の子が、イベントでは銘仙着ている｡昔は全然いなかったんだよ。案外となかなか着ない感じだね。

大竹講師

私は男性に、もし女性に着物を着せたかったら､自分で着てくださいと言うんです。男性が着物を着ていたら、女性は絶対に着たくなります。

C 氏

そうかな、男が着物着るというとね、だいたい仕立て直ししないとだめなんだ。ぴったりじゃないというのとね、古い昔のおじいさんとかおやじの持ってんだ。それをすっと着ていないから、仕立て直ししないといけない。

大竹講師

腕の長さとか身長とか小さいんですね。

「対丈」といって旅館の浴衣みたいに、

そのままの丈で着るのが男性物で、女性はお腹のところに「おはしょり」があるので。

C 氏

女性は、いろいろ調整ができる。男物は全くだめなんだよね。だからそういうことができる人が少なくなる。

大竹講師

いろんなことが足りなくなってきていて、現代で今問題なのが、例えば友禅の職人さんが使う、筆を作る職人がいない。筆が変わってしまったらどんなに腕があっても慣れるまではなかなかいいものができない。それから材料の質を落としてしまっているのが現状らしいですね。

２）着物の市場価値は？

C 氏

私が着物を着ているっていうとね、いろんなところから届けられるんだよね。「昔のが残っているから、使ってください」って言って。皆さん捨てられないでいるから、くれるんだけどね、すぐには着られないよね、そういうもんは。

B 氏

昔だったら質屋で引き取ったのに、今全然取らないからね。もう一文にもならないからね。」

大竹講師

私たちも買い取りしているんですけど、結局そういった相場でオークションに出てくるわけです。

C 氏

ちょっとした端切れのほうが高いもんね。赤くて細かい柄とか。

B 氏

ちゃんとしたもののほうが、評価が低い。端切れになる前は、本当に価値ゼロだったわけ。質屋さんが、「お金になんないから、そんなもの取れないよ」って。

大竹講師

質屋さんが活躍した頃っていうのは物がなくて、引っ越しをするために自分たちの家財道具を全て売って、次の土地で買うという、道具屋さんと質屋さんちょっと噛み合っていた時代ですからね。

３）着物を着る TPO

C 氏

先程、着ていくところがない、という話。やっぱりないですよね。

大竹講師

着物を着たことがあるっていうか、持っている年代の方の意見と持っていない方の意見はたぶん違うと思います。価値観が違う。

着たいと思う気持ちは、少なからずある。だけど「着つけができない」、「着ていくところがない」、「そのあとの手入れが分からない」というのがみんな悩みなんだけど、着てしまうとあまり場所は関係ない。
でもみんな、安心したいんですよね。

C 氏

そしてお互いに、「あれなんだとか」見てるわけね、着物の品定めをしてるの。それと私も趣味でやっているんだけど長唄とか、ああいう会では、紋付でやらないといけないんです。

大竹講師

そうすると敷居が高くなっちゃうんですよね。
皆さん、お酒は飲みますか？
ご飯食べに行くときに着て行ったらいいです、紬を。

C 氏

ああ、紬をね。

B 氏

お茶の会だったら紬いいね。

A 氏

やっぱり、面倒くさいんだよなあ。

４）イベント情報発信の課題

D 氏

ちょっと質問しちゃっていいですか。
うちの子ども、高校生で、着物着たくて

着たくてしょうがない。女の子。お茶とかもやったりしているんだけども、「のほほんお茶会」とかイベントの情報発信っていうのはどういったかたちでしているのですか。

大竹講師

それは私たちが直接にやっているものではないので、情報発信はお任せしているんですけど、「のほほん着物さんぽ」というのが足利市役所と JR のタイアップしたもので、「足利道楽」というのが商工会議所が発信元です。今は JTB さんが入って、ツアーになってきているんです。ただ、発信というか、足利って本当に広報が上手じゃないというか・・・。

たくさんいいことをやっているのに、お互いの情報交換ができてないので、メイン通りの石畳の人たちが知らないのです。

当日になって、「今日は何？」っていうような状況で、そこが一番の悩みかな。

A 氏

そうすると Facebook とかのほうかな。

大竹講師

Facebook も弱いですね。「のほほん着物さんぽ」は、たぶんほとんどしてないんじゃないかな。

C 氏

広報のチラシはいっぱい出ているんだけど、市民に伝わってない。

大竹講師

いっぱい出ているけど、そもそも広報をチラシでやろうと思うところもそうだし、情報を伝えるタイミングも上手じゃないと思います。イベント告知をただまとめればいいわけではないけど、最近やっと、「ぐるワンバス」さんが街中を回遊してくれて、文化財の一斉公開とかも混ざって来てるので、秋のイベントには少しずつ絡んではきてるかな。でもまあ、ヘタですね。

C 氏

足利はね、口コミはやらないんじゃないかと思うんだよね。

大竹講師

口コミの効果は大きいですけどね。

C 氏

だから人のやっていることはタッチしないっていう、あの文化だね。「あそこであんなことやってるよ」っていうようなことを「あいつらがやってるんなら、いいや」っていうような感じはあるね。

司会

今一つ思い出したんですけどね、3 年くらい前に鹿沼の風間さんが来て言っていたんだけど、街中のガイドマップを作るときに商工会のマップと市役所のマップと全部縦割りで作るから、観光客にとって欲しい情報がバラバラだったので、それを彼のほうで委託を受けて、一枚にした。

だから、誰かが他のことにタッチしないと縦割りで全部動いていくってことですよ。足利では、行政と商工会と大学の交流もないし。それをなんとか統一的に情報を載せるフィールドを誰かが作らないと、どうにもならないですね。

C 氏

D さん，娘さんの場合どんなものなら伝わりそうですかね。

D 氏

やっぱり Twitter とかそういうもので情報をまいていく。

C 氏

そういう、メディアなんだ。

A 氏

高校生あたりだったらそっちのほうから入ったほうが早そうな気がするね。

大竹講師

それで、じゃあ Twitter 立ち上げました、

Facebook 立ち上げました、ということをどう伝えるかですよね。そこに届くまでが難しいんじゃないかな、選ぶことがあり過ぎて。

D 氏

例えば、女子高生の茶道部だの中でそこに一回話を持っていって、そこからの口コミで広げるっていうのはいいですよね。

大竹講師

私たちも、あのかき氷イベントをやったときに、女子高生の力は絶対必要だと思いました。あの辺を歩いている、通学している子たちの目に入るようにと知り合いの娘さんに言って、「まず、ちょっと騒いでみてくれない？」っていう話をしたんですけど、伝わると即、来ます。

A 氏

そうすると、着物を着る高校生に茶道でしょ。お花と弓と剣道と、柔道も入れてもいいかも。とにかくそういうネットワークをしたほうが早いかもしれない。その延長線上に「銘仙」もあるんだというくらいに位置付けていったほうがいいのかもしれない。

５）和服文化の位置づけ

大竹講師

私は、「今」現状を超えてからの話になると思う。それは、「銘仙」がまず着物の枠から外れていると思うからです。銘仙は、洋服に向かっている時代のものだから、明らかにベクトルの方向が洋文化に向かっている。モダンになるとのはそういう意味で、「和」に向かってないんですね。

「今、着物という概念がちょっと崩れている」ということが、知られていないから、まず、それを知るきっかけが必要であると、私は「足利ビューティーデザイン専門学校」の学生たちにプッシュしたいんです、銘仙のああいう斬新なデザインから入る・・・。

A 氏

そっちのほうがいいかもしれないね、確かにね。

大竹講師

そうすると別に着物じゃなくてもいいですよね。彼女たちは、一枚の絵というか材料として見てくれるので、そこからかっこいい何かが生まれ、もちろん着物好きの、和が好きな女性たちも着れるようなものも銘仙の中にはありますので、そこを振り分けていけるといいなとは思っています。

B 氏

ストックはたくさんるんですか？

大竹講師

今は商工会に着物を貸し出ししてないので、自分のところで貯まっているものがあって、少しずつ自分でも分けられるようになってきていて、皆さんに見せられる機会を増やそうかなと思っています。時期を変えて季節の銘仙展みたいな形で、石畳の辺りでは出せるかなと思っています。それはなんとなく頭に入れてみますね。

D 氏

着物は高校生のほうが入りやすい感じがあるし・・・

大竹講師

「着物の着方が分からないから」ってみんな言うんですけど、「着たい」って思ったら、絶対着られるようになります。
着ようとしますから。

C 氏

若い人で浴衣はかなり増えてきましたね。浴衣にスニーカーもいるからね。

大竹講師

増えてきました。男性も、そうですね。あと今ビーチサンダルもかっこいいのがあ

るから、もうビーサンで浴衣もあり。

B 氏

半襟とか小物なんかもいらないんだよね。

大竹講師

いらないです。

B 氏

だから、帯の締め方も知らないで着物を買ってきちゃうわけね。

大竹講師

ただ、マジックテープで留める帯とか、ああいうんじゃなくて、普通に帯を締めたほうが体は楽。着るのに楽なモノ（道具）は着崩れます。着る「方法」を覚えたほうが後々楽だし、体も楽だし。あと、化繊のものより天然ものや自然布は、体が楽です。

着崩れもしないし、本当に理にかなってて。

学生さんたちも一回、学校に着物着て行っちゃってみて。何か先生に叱られたときの罰ゲームでも何でもいいから、罰ゲームで着物を着てみるとちょっと周りの目が変わるかもしれない。

C 氏

着てみたらいいよ。帯なんてのは不思議なものだよ、あれ。あれ一本でちゃんと体を保ってんだからね。

大竹講師

男性はパンツと一緒で腰ばきするのね。腰の位置に帯が締まると、本当に背筋が伸びて気持ちがいい。脱いだときがまたほっとするから。着物を着ると男性はやっぱりしゅっとするし、女性はどの人でもたいてい指を揃えますね。

C 氏

指を揃えないと歩けない。

大竹講師

こう、ガニ股になっちゃう子もいるけど、言うことを聞いてくれる。要するに聞く耳が持てるのと、普段女性らしさをあまり前面に出したがらない人たちでも、着物着ちゃうと、女性らしくできるんです。

そうしたほうがきれいだし、本来はみんなきちんと着てみたいと思っている。入口のハードルは低くして、着ることを目標に。そのうちきれいに着たいなと思ったら、その次の段階をだんだん覚えていけばいい。

だから最初のきっかけというのは、何でもいいと思っているんです。

C 氏

女性には、「そのほうがきれいになるよ」と言ったほうがいいんだね。

大竹講師

はい、男性もそうですよ。

スーツは 1.2 倍だけど、着物着たら完全に 2 倍かっこよくなるから。

C 氏

本当にきれいになるから。稽古に G パンで来ているような女の子が、おさらい会なんかでちゃんと着てくるとね、きれいなんだ。

大竹講師

なんかたどたどしくしていても、かわいいし美しいですよね。その美しさというのは、たぶん皆さんが本来、備えているものだから、内側に持っているものをちょっと表に出すきっかけに、着物を利用してもいいと思いますね。

D 氏

イベント以外のときの休みの日とかは、石畳を着物で歩いている人っているんですかね。

大竹講師

けっこういますよ。特にここ 2 年くらい増えましたね。ほかの地域でも着物を着て遊んでいる人たちはたくさんいるんです。「着ていくところがない」って言った人に

は、まずはうさぎやに来てもらい、「自分で着てみた成果を見せて」って言うんです。そして鑁阿寺にお参りに行く。そうするとね、楽しくなって、どんどん歩く。

A 氏

動線として、石畳通りから鑁阿寺は使えるね。

大竹講師

着たら誰かに見てもらいたいし、知った人に自分で着たものがどうなっているのか見てもらって、安心できれば外を歩こうと思える。

８．着物文化の普及のために

１）簡単に着ること

B 氏

割烹着でひところ有名になったSTAP細胞の人。

C 氏

割烹着、あれは実によくできたもんで。

A 氏

昔は、主婦はみんな着物着ていたから、だいたい割烹着でしたね。

C 氏

私も今暇だからさ、炊事やらされるんだけど、着物着ていると割烹着がいるんだよ。あるいは、たすきをかけたり。

大竹講師

袖口に水が入ってくるのも止まるし。

C 氏

たすきも、なかなか、よくできいてる。紐一本で実にいろんなことに使えるからね。日本の「結ぶ文化」って、すごいですよね。

大竹講師

日本人は本当にすごいと思います。

私、実はこの下、普通の洋服を着てきてまして、脱いでも大丈夫なようにしてきたんですけど。襟がこう、男性ばっかりだと少し恥ずかしいんですけど、襟だけこれ嘘ついているんです。中にTシャツを着ていて、さっき慌てて 10 分かからず着てきたんですけど、そんなふうに靴も脱がずに、ちょっと行儀よくないけど、着物を着ることができて。

A 氏

たぶん今みたいなお話が大事なんだと思うんですよ。

C 氏

簡単に着れるようじゃないとね。

A 氏

結局着るとなるとみんな構えちゃうでしょ。構えずに着られる、それで楽しめるんだってこともう少しアピールされたほうがいいと思いますね。

C 氏

もうできているでしょ、簡単に、ぱっと着れるように上下分離の・・・。

大竹講師

着物を切ることは私したくないんですよ。工夫するっていう意味で結構ぱしぱしと切ってしまうスタイルもありますね。縫ってしまうところもあるんですけど、着心地が悪いので。

B 氏

ベルトでくっついてもあるんだけど、あれものすごくあと大変なんだ。

大竹講師

いろんなものがついていると分からなくなって、実際は使えないので、これはだいぶシンプルにしてあります。後ろがぐっと引っ張れるような細い布と、紐が通せる穴があるだけなんですね。浴衣と帯を持っていれば、要は浴衣が着物になっちゃうの。

秋口の９月は一応単衣の時期ですが、暑いときには、浴衣に襟をつけて、帯にもリボンでも紐でも帯締め代わりにしてちょっ

とひと工夫すれば、充分着物っぽく見える。

女性はね、ここがポイントでこうなっていればいい。って言うと、ほとんどの人が、着物を着れるようになっちゃう。

B 氏

それやったのが、大塚きもの学院の大塚末子先生だけどね。

大竹講師

はい、そうですね。だから、世の中には「美容襟」というのが出ているんですけど、それをもっとさらにシンプルにしたものが今私がつけているもので、イベントで使っている半襟です。

この「半襟」というのは、本来、大事な着物を汚さないためのものなんです。これなしに襟が肌に直接触れると汚れ易くなる。

A 氏

カラーみたいなものですね。

大竹講師

そうです。

そういうことが分かってくると、これがあることで着物が大事に使えるし、重ねるということが楽しめるようになる。

２）行政と民間のバランスと仕掛け

C 氏

先程の話の中に商工会、足利道楽ね。商工会議所と市役所と JR。多少はそういうコラボができるようになったのかね。

大竹講師

少し前から、できてきていますね。お互いに、行き来もしてます。ただ２年ぐらいで担当が変わっちゃうので、そこからまた、話が変わるけど。

私たちも最初に関わったことがあるので、ここの部分はこうしたほうがやりやすいのになあ、という思いはあるんですけど、ただ規模がだんだん大きくなってくると運営は別の方にやってもらったほうがやりやすいかな。とも思います。

私たちは私たちで好き勝手やらせてもらいますっていう感じで。

C 氏

役所が入っているといい面もあるんだけどね、やりづらい面もあるしね。

大竹講師

「役所はみんなの意見を聞かないといけない」ということを、住民には「それだから駄目なんだよ」と言われてしまう。

でも私たちは「私たちがやろうとすることにサポートしてほしい」と言ってます。

だから市民の発言というか発信を、多くしていくという体制が少しずつとれてきている。特に石だたみ界隈は観光絡みが多いですけどね。

C 氏

「お前のとこだけを面倒見るわけにいかないっていうよ」というのが役所にはあるからね。

大竹講師

逆に商工会は、けっこう絞られてる。

司会

面白いですね。まちづくりとか言って頑張らなくてもいいということが非常によく分かりました。

B 氏

大日様、今、足利で一番活気のあるのが大日大門の石畳通り。なんやかんやいって、七夕の飾りもあるし、正月の飾りもみんな知っているでしょう。お餅つきもね。

大竹講師

石畳の方たちはそれを続けることが大事だと思ってやっていると思います。そうしたことは、足利中にまだに残っているんだと思ったけど、あそこだけだったんですか。

A 氏

あの一角にそういうものが残っている。着物も非常に重要なアイテムだということでいいんでしょうね。

大竹講師

そうですね。決して強要ではなくて自分が着たいなあとか、自分がそうしたいなと思ったときに着物が着られる環境だっていうことが私は大事だと思っていて、足利はそれができる可能性を持っているまちだと思います。「いつでもやっていていいんだよ」という空気があるんじゃないかなと思いますね。

司会

だから、D さんとこの娘さんだって着物着たかったら石畳に行けばいいだけの話なのかもしれない。

D 氏

そういうことか。だから、たとえばそれがきっかけでイベント情報が入ってきて行ったことで、それが次につながっていく。

B 氏

「うさぎや」さんが、中心になって足利市を紹介するゲームでは、店頭にうさぎが飾ってあるんだよね。できれば、あそこに香道らしきものがあると面白いかな。

大竹講師

それはいずれできると思います。でも私がまず香道を少しでも知りたいです。
今度足利の秋祭りのときに商工会議所で「足利の美、足利の芸術祭」というのをやるんですけど、今年 3 年目で、日替わりイベントに「香道体験」というコーナーがあり、私もそこからスタートです。

香道は、木に問いかけるんだそうです。

「聞く」というんですけど、「お香を聞く」っていうのは香りを自分の脳に届けて、「あなたは誰ですか」って聞く。「どの木ですか」というふうに。その木に対しての心を研ぎ澄まして意識をそちらに向けるというものらしいです。

A 氏

感覚というか感性というかそっちの世界ですね。

B 氏

すごく理にかなっている。「香り」は脳に一番直結しているから。

A 氏

じゃあ石畳のにおいは何ですか。
昔はね、中心商店街がどうのこうのって言われているけど、商店街っていうのは基本的にコロッケのにおいとか、そういう町のにおいがあったはずなんです。

だから、ふと思ったのは、あの通りの「におい」みたいなものがもしあるなら、それが出てくれば面白いなあと・・・。

大竹講師

父親は、それを「蘭」にしたいと言っています。「蘭」といえば「胡蝶蘭」と皆さん思い浮かべると思うんですけど、「春蘭」といって山の中にひっそりと咲いている東洋蘭、「ジジババ」と呼ばれる小さな蘭で、それをあの孔子様がこよなく愛したんですって。

孔子様がある旅に出て、その帰り道に通った山道で香しい香りがした。「これは何の香り」だと思って誘われて行ったら、そこにひっそりと「春蘭」が咲いていた。この花は春を呼ぶ花として、小さくて目に見えないような場所でもかぐわしい香りで人の心を動かすということに孔子様が感動して持ち帰ったという説があるので、足利は「蘭」にしたいということでございます。

＊東洋ランというのは、中国と日本で古来から珍重されたものに基づいた鑑賞基準の元で、栽培鑑賞されている数種のラン科植物に対する呼称である。古典園芸植物のうちでも重要な位置

を占める。中国の東洋ランはそのまま日本に持ち込まれ、長く栽培されてきた。その一方で、日本でも似たような花を探すことが行われ、その結果、日本春蘭と寒蘭が、日本における東洋蘭として独自の分野を形成するに至った。
http://ja.wikipedia.org/wiki/

B 氏

胡蝶蘭じゃ香りがしないんだ。

大竹講師

味は、おいしかったっていうことは覚えていますけど意外に忘れちゃう。でも「香り」って、脳の記憶に残るらしいですね。

９．まとめ

「時代はソーシャル・ビジネスへ」

１）交流の「場」の提供

司会

そろそろまとめに入ります。

「うさぎやさん」は着物を売るだけではなく、「場」を提供しているんですね。着物を着るとか、お正月飾りをつける場を、古来からのアイテムを、表現できる場を皆さんに提供しているといういわば、「ソーシャルビジネス」ですね。

無理矢理まとめようとしているところもありますが。

大竹講師

農業にしてもなんでもそうですよね。

「できる環境がある」と分かれば来る人たちはいる、「求めている人がいる」。ということですね。

でも、D さん、娘さんに言ってください。「いつでも来て」って。

着物を着るきっかけは、高校生は文化祭とかの余興だったりします。何かしたいっていうものがあったときに相談に来てもらえれば。

着物だけじゃなくてあの辺はね、相談するといろんなもの教えてくれる人たくさんいるの。アイデアでもなんでも。

鹿沼の風間さんもそうですけど、自分の本来の仕事じゃないことでも不動産でもなんでも、相談する人が来て、それに応えて地域の窓口になったことで、ある程度まちがまとまる結果になっていると思うんです。

２）楽しみながらビジネスを

司会

ずっとお話を伺っていて、感じたんですが、この公開講座の前回の「みんなのとしょかん」の川端さんもそうだし、その前の大間々の吉澤さんの話も伺ったけど、ビジネスの世界から少し外れたところで皆さん楽しんでいて、その楽しんでいる部分がちゃんとうまくビジネスに戻ってくるという感じですね。

大竹講師

最初からビジネスでやったら動けないですね、きっと。

司会

ビジネスにはなってまた戻ってくる。だけど、本当は「遊び心」でやっている。皆さん、若い人はいいなあというか、歳をとるとそういう発想についていけなくなってきている。

大竹講師

ありがたいことに今の時代だからこそ言えますが、今はおうちの手伝いとかやらずに生活ができる環境でしょう。

そんなこと考えられない時代、親の言うことを聞くのが一番で、どんなことがあっても先生の言うことを聞く時代があったと思うんです。

そうした時代があったことで、今の時代が裕福になっているわけだから、申し訳ないけれども、その上に乗らせてもらえるん

だったら、ただ、ある道具で遊ぶだけじゃなくて、自分たちで「何が本当に楽しいかな」というのをもう一回見直す機会があっていいと思いますね。

司会

宇都宮の「街コン」をやっている人とか、基本的にみんなそんなかたちで進んでいますよね。

あんまり難しい話をする気はないけれど結局「まちづくり」には、「ストリートウォッチャー＊」という存在が必要なわけなんですね。そういうストリートウォッチャーがいるような場をみなさんが作り始めているということかもしれない。

＊ジェイコブスの挙げる例によると、ボストン市内に都市計画家から見れば再開発の対象となる地区があるが、ここではほとんど犯罪が起こっていない、ジェイコブスは、安全な街路の条件として、常に多数の目（ストリートウォッチャー）が存在していることなどを指摘している。都市が多様性を持つための条件として、ジェイコブスは次の 4 つを指摘した。

・混用地域の必要性
・小規模ブロックの必要性
・古い建物の必要性
・集中の必要性

http://ja.wikipedia.org/wiki/

大竹講師

それは既にスタートしていると思います。決して後ろ向きではなく、ちくちくと動いているので、それを知って少しずつ集まったり、石畳に来るきっかけになってくれれば、そして、そこから何かを持ち帰って・・・その町々でそういう輪が広がるといいですよね。

司会

まだまだ、話題は尽きませんが、時間も参りましたので、最後は無理矢理着地させて申し訳ございませんでしたが、これでお開きにしたいと思います。

大竹講師

とんでもございません。ありがとうございました。

司会

これをもって 26 年度の地域活性化講座を終わりにしたいと思います。本当、どうも今日は、聴衆が少なくて申し訳ございませんでした。

ハジマル

始まるために必要なもの

「興味」

う・サロン ハジマル
うさぎや×ふくしまや

ハジケル

弾けるために必要なもの

「勇気」

謎の梅子さん　佐藤錦シロップ　生桃でその日限定

ハジヲカク

恥をかいた時に必要なもの

「素直さ」

夏は浴衣で　これから着替えます！　のほほん茶会

う・サロンサロン
銘仙×主菓子

七夕飾り　空間　ファッション

銘仙をまちの材料と考える

編集後記

平成 26 年度公開講座「地域活性化社会システム論」の講演録が刊行できることになりました。足利工業大学と足利まちづくりセンターVAN-NOOGAの協働による地域の活性化に向けた 6 年間の活動の成果と自負しております。

平成 21 年度の開講から 6 年目を迎え、述べ 28 回に及ぶ講演録は，地元足利市から始まり、佐野市、鹿沼市、栃木市，そして，県境を越えて埼玉県行田市，群馬県桐生市、伊勢崎市、太田市，館林市と両毛地域とその周辺を一巡し、今回は、群馬県みどり市と足利市から，地域を元気にする活動の第一線でご活躍いただいている方々から実に楽しい、そして、元気の出るお話を伺うことができました。

本公開講座も今年度を以て一応の区切りを付けることになりましたが，6 年間の活動を通じて，地域活性化のための重要なキーワードが浮かび上がってきました．それが，「ソーシャルビジネス」です．高度経済成長期に大人になり，その後の石油危機や円高ショック，バブル経済等々を経てきた我々の世代には，趣味とビジネスが融合したような次世代の活動は眩いばかりです．ビジネスにおいても遊び心を失わず，社会貢献といっても肩肘張らず，みんなのため，社会のためになるならと軽々と業種や地域の境界を超えて汗をかき，それで少し本業が潤えばいいという感覚は羨ましい限りです．古い世代が，社会貢献という響きに必要以上に力が入っているだけなのかもしれませんが.「私たちは豊かな社会に育ったんだから，地域に貢献するのは当たり前です」とさらりと言われてしまう．そうした活動を概念化しようとして見つけた言葉が「ソーシャルビジネス」なのかもしれません.

最新の IT 機器を駆使して情報交換を行い，助け合い，自分をさらけ出し，他者と繋がることも自然にできる，そうした世代が，次の時代を活性化させていくのだということが，少し分かりかけて来たところなのかもしれません.

最後に，本公開講座を開設するにあたり、ご協力をいただいた内閣官房地域活性化推進室、栃木県、栃木県まちなか元気会議、足利市の皆さん、また、裏方を勤めていただいた足利工業大学の総合研究センター、VAN-NOOGA 事務局の皆さん、そして、機材運搬、設置に協力し，議論に参加してくれた研究室のスタッフ、学生諸君にお礼を申し上げます。

末尾ながら、講演録の編集にあたり、テープ起こし原稿を校正し，読みやすくするために勝手ながら小見出し等を付けました。ご提供いただいた写真等もページの制約上、編集しております。内容には注意したつもりですが、不備な点もあるかと存じます。お気づきの点があれば、下記までご連絡いただければ幸甚です。以上を申し添えます。どうか、御寛恕いただきたいと存じます。

築瀬範彦

〒326-8558　足利市大前町 268-1
足利工業大学工学部都市環境工学科
地域・都市計画研究室

TEL　0284-22-5684
FAX　0284-64-1061
Email:yanase.norihiko@v90.ashitech.ac.jp